第　2　巻

『高（たか）・清（きよ）フレンドリー古道』

（“清川道”主体）

調査報告書

ダイジェスト

～月山東南エリア西川口大ロマン古里～

～高・清シルクロード～

2025(令和７)年１月末日

（Ｔ・Ｋ－ friends）

『清川道』は出羽三山登拝参詣古道（岩根沢口）

古来、月山・湯殿山を目指して多くの道者が押し寄せた参詣古道

本道口「高清水通り」と合わせて『高・清フレンドリー古道』

この山道もとにかく謎と神秘がぎゅっと詰まった不思議な道

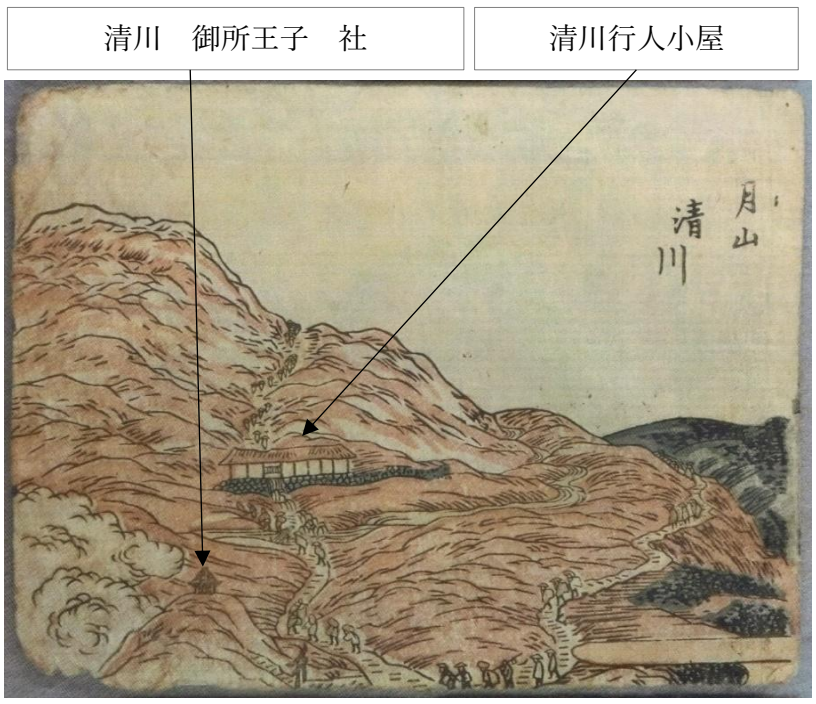
奇妙な石造物が点在し霊気・異様さも漂う怪しげな道

本道の強みは大きな泊り場「清川行人小屋」があること

－Mysterious ＆ Romantic Area－

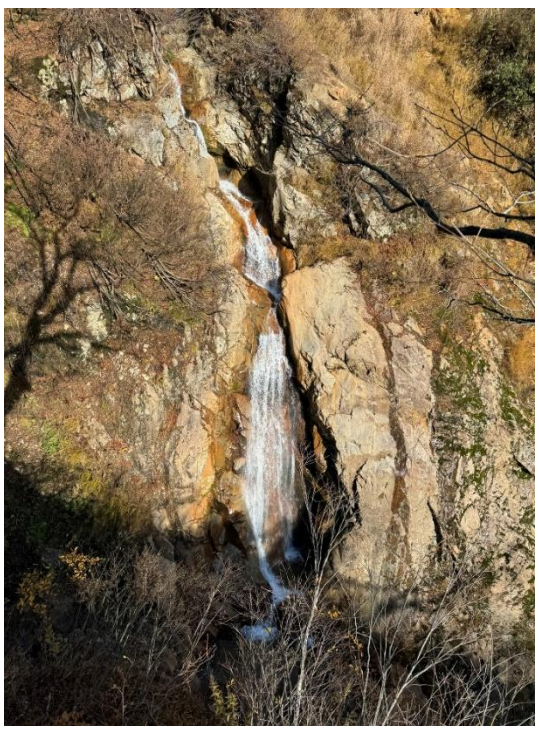
義川筆『湯殿山道中一覧』（版画）より拝借したもの。（入手先不明となったが、武田喜八郎著作集巻二によれば原本は住吉栄作氏所蔵か。）

タイトル「烏川　不動」



タイトル「月山　清川」

烏川不動滝



2023(令和5)年11月9日(木)
大沼香撮影

撮影日は2008(平成20)年９月７日、
写真人物の布施昭太郎さんから提供
賜ったもの、佐藤辰彦さん撮影

2023(令和5)年9月24日(日) 大沼香撮影

御所王子・五所皇子・五所王子（稲荷神社）

留　意　点

☑ 「高・清フレンドリー古道」とは、次頁対象エリア全体域を指すが、「高清水通り（赤色表示）」については別途単独で報告書を作成していることから、本書は「高清水通り」を除く「清川道」を主体に焦点を当て、その調査結果に基づき文書化を図ったものである。

☑ 調査活動は、予め報告書を作成する意図を以って、規約制定のグループを形成した訳ではなく、また、リーダーを決めた訳でもなく、このエリアに関心を持って自発的に登山した仲間達との行動記録を踏まえ、旧蹟・史蹟に着目し文書化したものである。

☑ 本書は、調査期間 2023（令和五）年 7 月 31 日(月)～ 11 月9日(木)までの3か月少々の短期間を経て纏めたものを主体としている。

☑ 従来広く知れ渡っていなかった月山東南エリア西川口「清川道」にも謎と神秘がぎゅっと詰まった不思議な道であることを判明せしめた。

☑ 記録重視のために発掘・発見年月日と対応者名を敢えて明記した。

☑ 本書は細部の調査報告書（作業中）の内容を大づかみで把握出来るようにダイジェスト（要約）版として纏め作成したものである。

☑ 本調査に係った仲間・有志を「T・K-friends」と通称することとした。

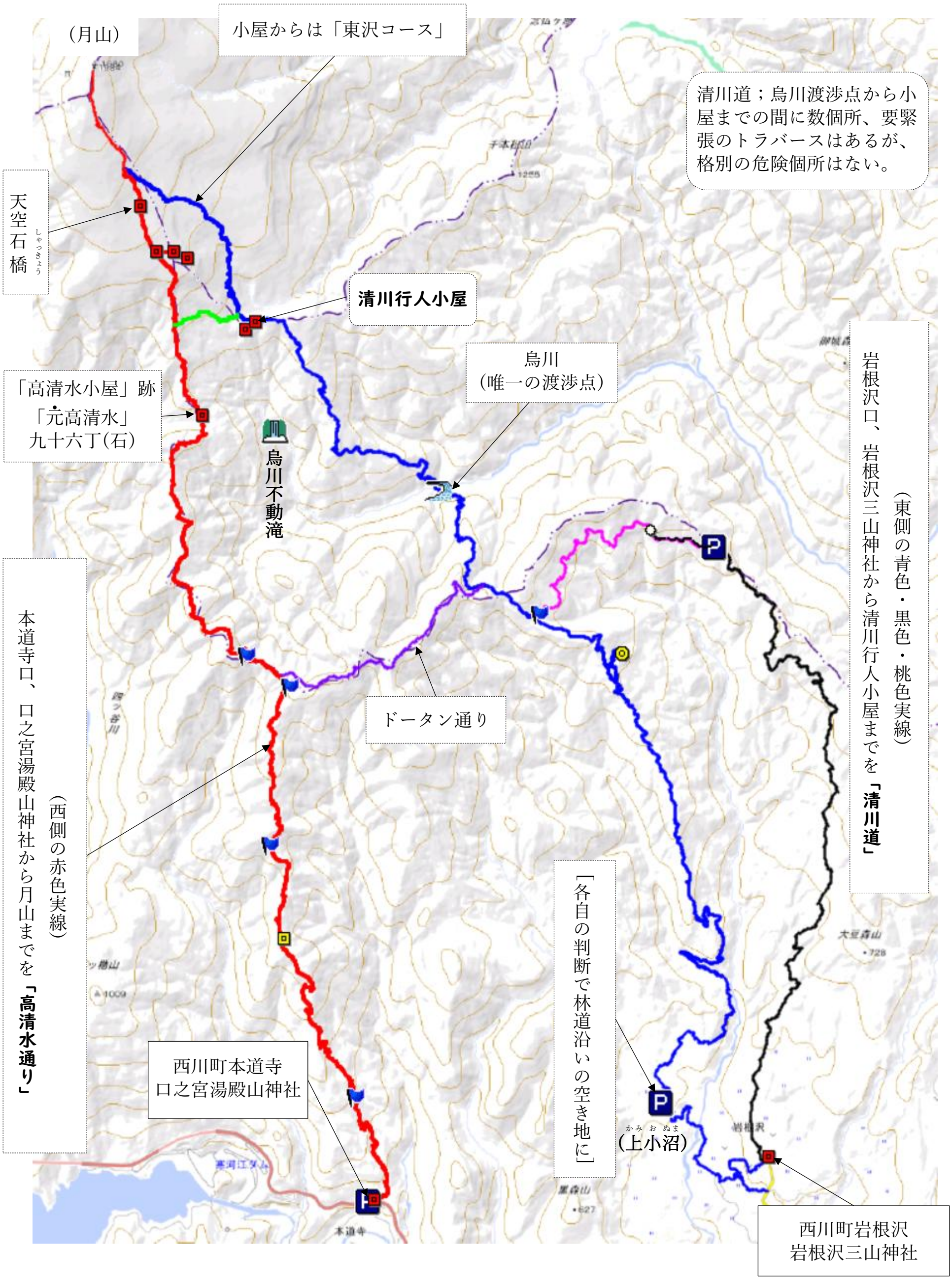
☑ 当該地域の魅力を紹介したく、アウトドア志向派の好奇心を刺激したく、そして、登山の際にはそれらの史蹟と直接対面して貰いたく、さらには新しい地域興しモデルの一つになればと思い、公開・共有化のために情報発信するものである。

目　次

『清川道』は出羽三山登拝参詣古道岩根沢口	1
留意点	2
目　次	2
対象エリア（清川道に焦点）	3
『高・清フレンドリー古道』域 地勢・史蹟等調査過程	4
第　I　部	5
調査対応トリガー中核的参考書籍	6
把松稲荷神社	7
不動明王碑（カンマン碑）	8
清川行人小屋	9
同小屋前石碑群	10
同小屋前「弘法大師像」	11
「清川 御所王子 社」	12
「清川 御所王子 社」建立趣意石碑	13
「湯殿山・月山」遥拝の向き	14
古絵図（歴史）に見る「清川 御所王子 社」	15
「清川 御所王子 社」周辺眺望	16
「来名戸神（来名戸古墳）」	17
「来名戸」由来の霊気充満	18～20
「月山・湯殿山」追分碑探査過程	21
「月山・湯殿山」追分碑	22/23
同追分碑探査検討過程	24
同追分碑と直結の「直路」	25
「高・清直路古道」復元（旧道修復）	26
「御田の神」	27
使われた横道／東西連絡古道	28
第　II　部	29
「烏川不動滝」と「秘連古道」	30/31
烏川不動滝（位置）	32
烏川不動滝（現況）	33
「烏川不動滝」探検勇者	34
「烏川不動滝」様々	35
昔から注目された「烏川不動滝」	36
出羽三山聖水信仰三大滝行場	37
「秘連古道」探査	38～40
しめくくり	41/42
付録	43
最後に	44
奥書	——

「高・清フレンドリー古道」域対象エリア

（“清川道”主体）



『高・清フレンドリー古道』（高清水通りを除く）域
地勢・史蹟等調査過程　2025(令和５)年

調査年月日	対応者	※
2023(R5)/7/31(月)～8/1(火)	阿部剛士、大沼香	(A)
2023(R5)/8/29(火)～8/30(水)	宮林良幸、阿部剛士、大沼香	(B)
2023(R5)/9/11(月)	芳賀竹志、真鍋雅彦、阿部剛士、大沼香	(C)
2023(R5)/9/23(土)～9/24(日)	宮林良幸、大沼香	(D)
2023(R5)/10/8(日)	大沼香	(E)
2023(R5)/10/11(水)	阿部剛士	(F)
2023(R5)/10/11(水)～10/12(木)	片倉忠幸、松田秀孝、大沼香	(G)
2023(R5)/11/1/(水)	宮林良幸、阿部剛士、大沼香	(H)
2023(R5)/11/3(金)	大沼香	(I)
2023(R5)/11/9(木)	大沼香	(J)

（註１）当該氏名の敬称を略する。
（註２）本表氏名を含めた仲間達を「Ｔ・Ｋ- friends」と自称する。

①把松(たばねまつ)稲荷神社、②不動明王碑、③清川行人小屋前石碑群、④清川御所王子社（五所皇子稲荷神社）、⑤来名戸神（来名戸古墳）、⑥「月山・湯殿山」追分碑、⑦御田の神、⑧烏川不動滝、⑨秘連古道

※	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
(A)	○	○	○	○					
(B)			○	○					
(C)						○			
(D)			○	○	○	○			
(E)					○	○	○		
(F)								○	
(G)		○	○	○	○	○	○	○	
(H)								○	○
(I)									○
(J)								○	○

※2026(令和６)年対応分は個別の内容に記載した。

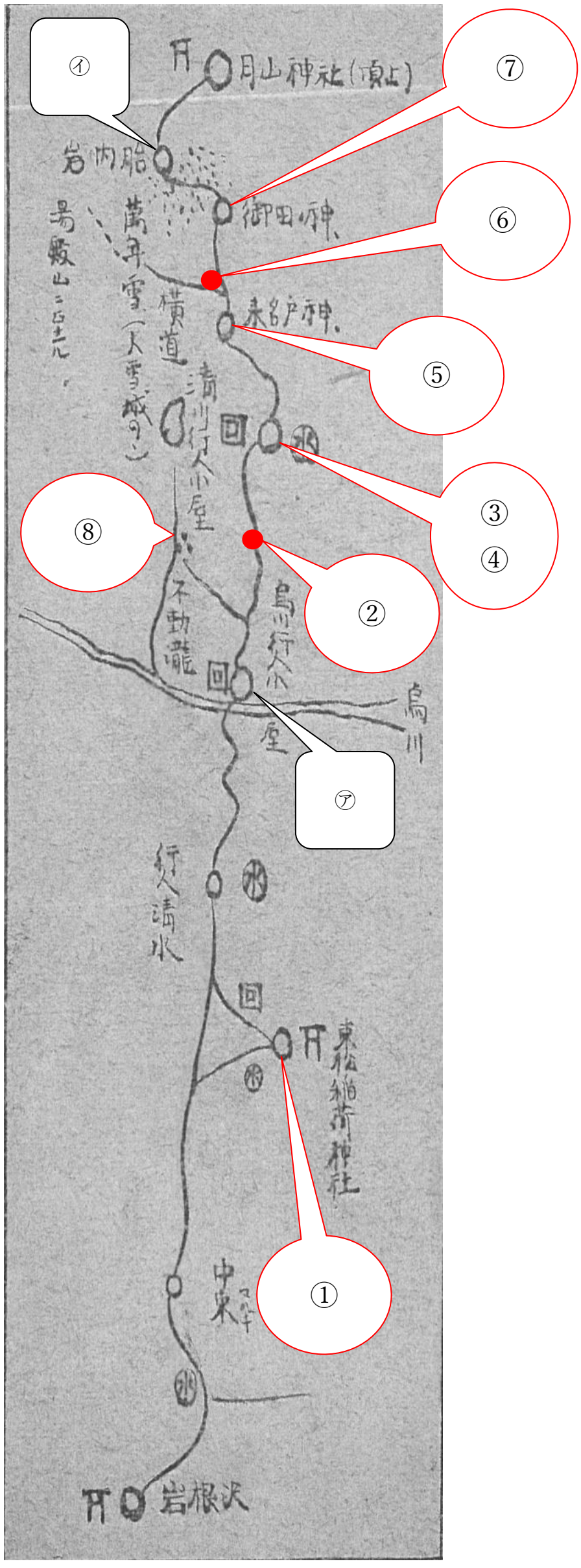
第　Ⅰ　部

清　川　道
沿い（周域）

調査対応トリガー中核的参考書籍

清川道に係る本件調査は次の郷土史３書籍が動機となった。

Ⓐ原田一男著「月山登山案内」（山形山岳　會・大正九年八月二十日初版発行）
Ⓑ丸山茂著「神都　岩根澤之面影」（同刊行舎・昭和十五年十二月二十日発行）
Ⓒ井場英雄著「岩根沢ものがたり」（岩根沢地区公民館・昭和五十一年十一月三日発行）



その中で原田一男著「月山登山案内」に記載の右図における史蹟・旧蹟に焦点を当て調査したものである。

①把松稲荷神社
②不動明王碑
③清川行人小屋
④清川御所王子社
⑤来名戸神
⑥「月山・湯殿山」追分碑
⑦御田の神
⑧烏川不動滝

なお、②⑥については同図に出て来ないが、一連の史蹟に入るものとして取り上げることとした。

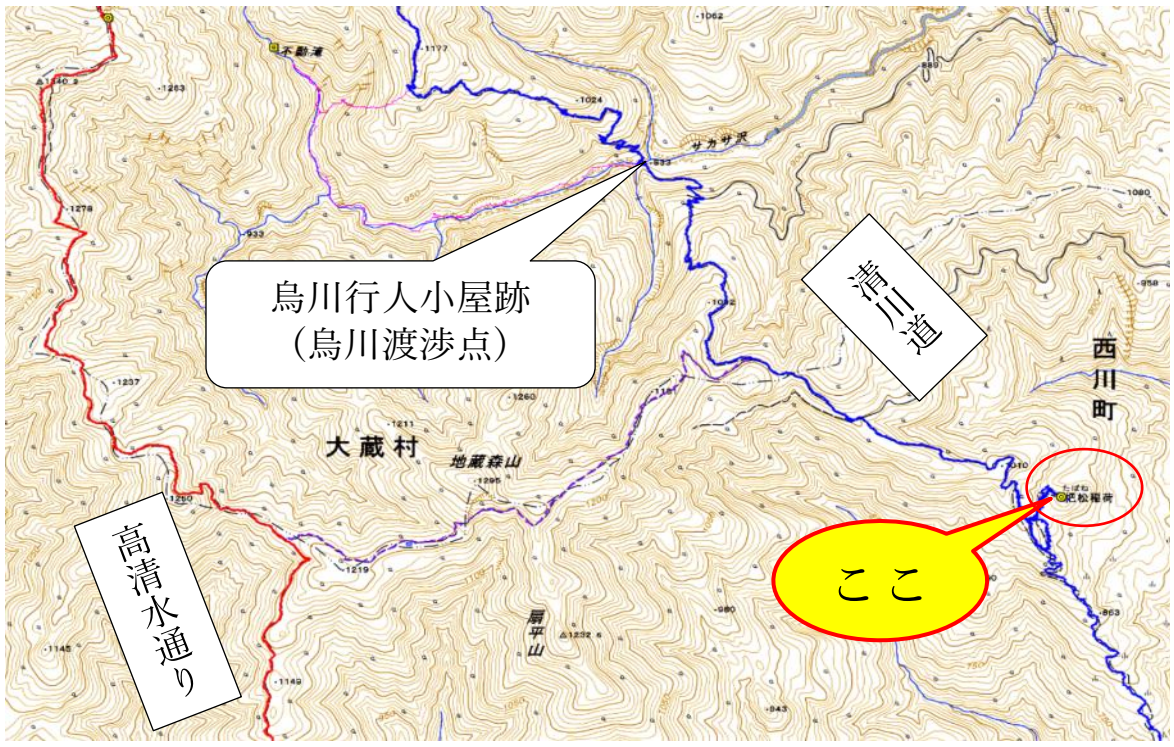
㋐「烏川行人小屋」周辺については未調査である。

㋑「胎内岩」については別記する。

前出３著書は往古の月山・湯殿山参詣の基点岩根沢と参詣道の繁栄ものがたりであるが、次頁以降の本件調査内容に記述した地点名称以外は、それらに不記載のまったく新しい発掘・発見に係る紹介である。他にも出羽三山に係る学識者の既販書籍本は多数存在するが、それらにもまったく記載されていない面を取り上げた内容である。

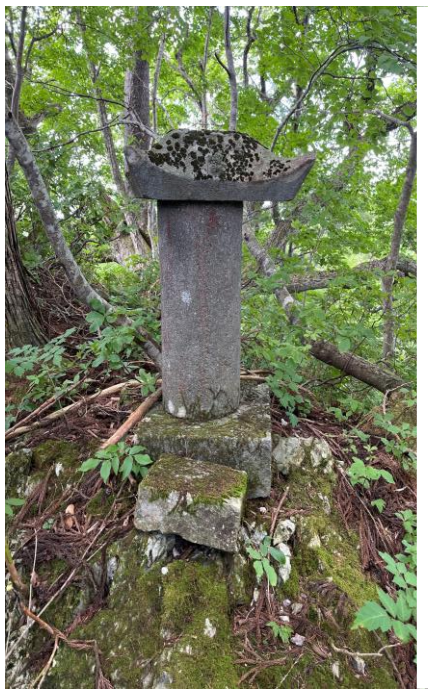
把松稲荷神社（たばねまつ）

特に養蚕農家等の熱い信仰を集めたとされる。



清川道から同神社に至る古道に入ると、池と傍に左下図のようなごっつい松（檜木？）の大木２本があり、鳥居（山門）を思わせる。

神社本殿



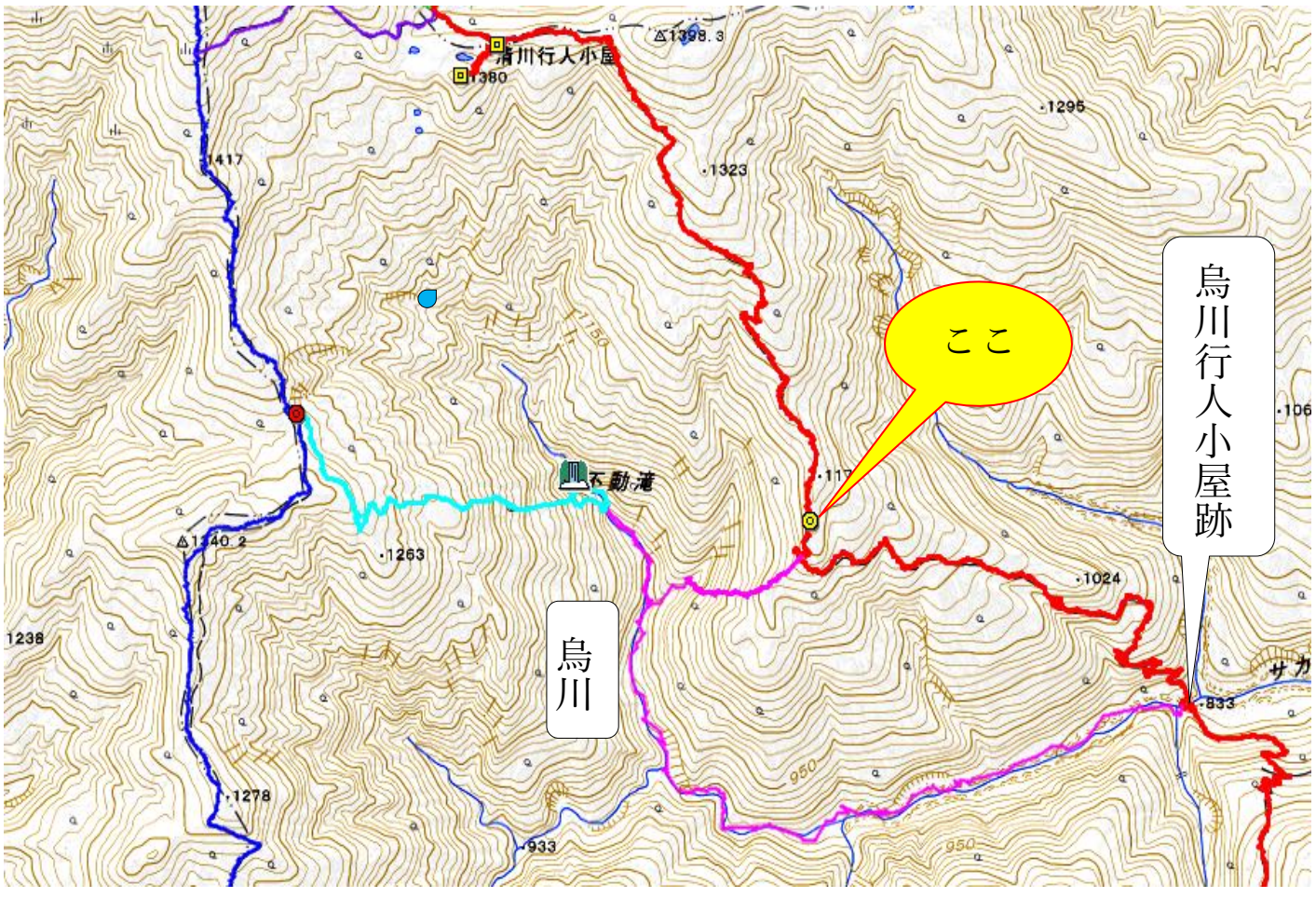
神社前に構える左右の石塔、前には鳥居はなく、石灯籠でもないことからは、石鳥居（山門）を模したものか？

神社内部

不動明王碑（カンマン碑）

ここより少し先で行き倒れとなった道者の供養碑として岩根沢の左門坊が安置したものとされている。大きくカンマン（カーンマーン）の梵字が刻されており、他にも文字が見えるものの摩滅が著しく殆ど解読出来ない状態にある、建立された所から真西に辿った烏川には不動尊（不動明王）を安置したとされる不動滝がある。これに向かい合うように設置されており、それを強く意識して安置場所を選定したのであろう。亡き人は一般道者なのか、先達クラスの山伏だったのか。

その後、地元岩根沢の方から「福島県の道者である、昭和38年頃に三階滝の当りで病死・・・」という話もあるが、今になっては、詳細は不明という。三階滝は烏川不動滝の上流部（清川行人小屋の南部）にあり、このカンマン梵字碑と合わせると、烏川遡上⇒同不動滝⇒三階滝⇒清川行人小屋に向けて、修行中ではなかったのかと推測される。



中央の梵字はアマゾン商店の「TOYO LABO」より拝借したもの。

不動明王の梵字「カンマン」について、サンスクリット語の「カーン（kṣaṃ）」は「火」の意味を持ち、また、「マン（ma）」は「水」の意味を持つ言葉であるとされ、その合成語だという見方もある。

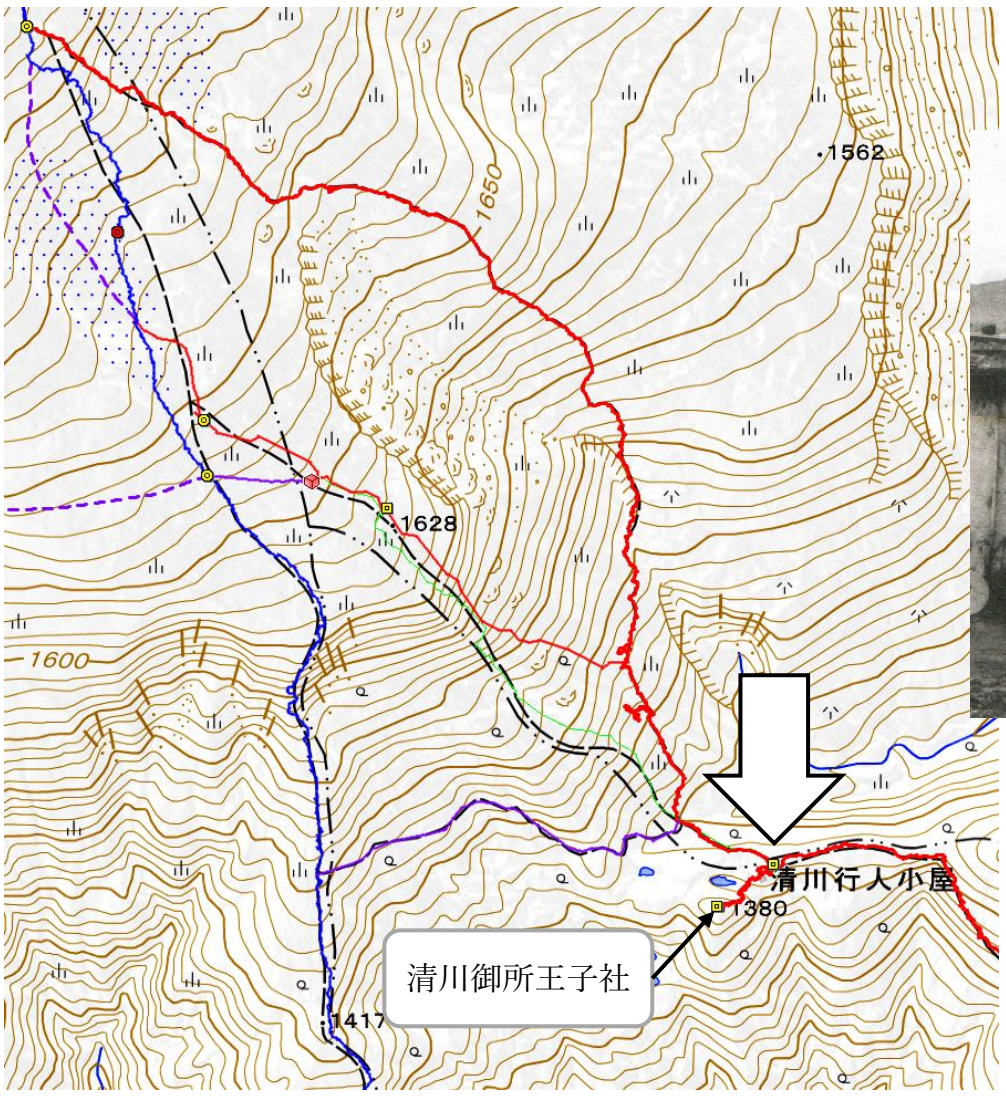
清川行人小屋

同小屋は、本件対象エリアにおいて唯一の山小屋（無人避難小屋）である。管理者は「清川仙人会」である。２階建で広く毛布などを完備している、また、薪ストーブもあり、無雪期は水を建物の中の台所まで引き込んでいる。

清川道基点の岩根沢旧日月寺は、嘉慶元年(1387)に出羽三山修験道拠点の１つ、本格的な根本道場の寺院として清亮により開山された（山形県歴史・観光・見所サイト）ことからすれば、その頃にはここに小屋（笹小屋と称したのか）を掛けたことだろう。

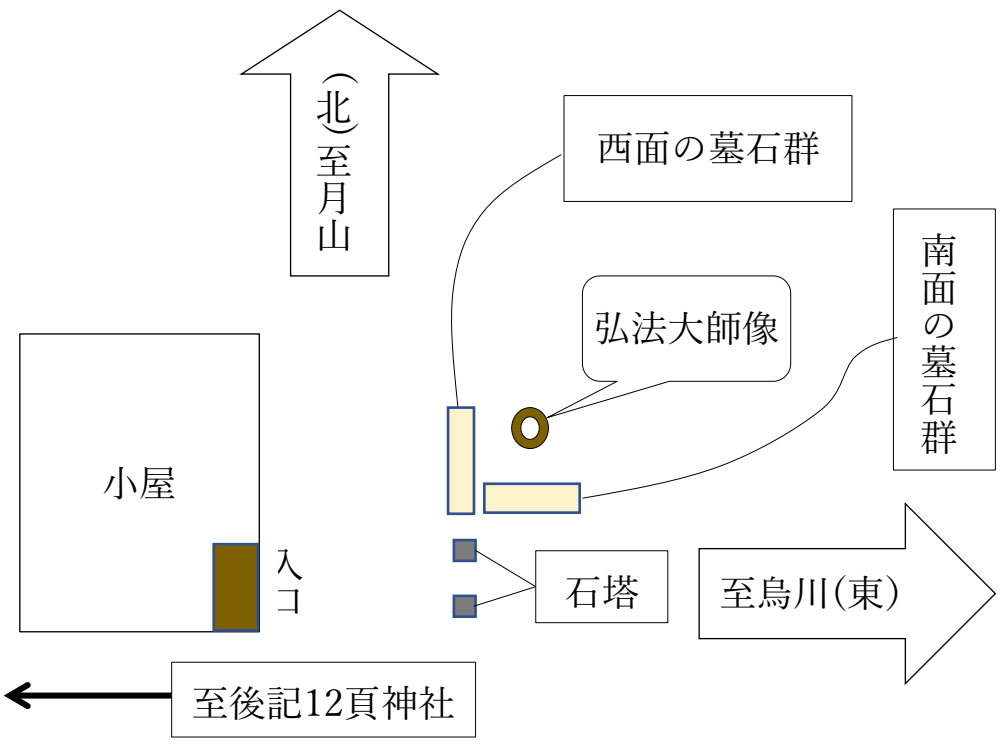
また、昭和30年6月4日、高松宮殿下が岩根沢から登られて夏山スキーを楽しまれたが、その前年昭和29年に同小屋は今の状態に大規模改修（建替え）したものである。

小屋西南角には後記の「清川御所王子社」に至る入口がある。



昔の清川行人小屋
「月山登山案内」より拝借
“梵鐘の行方知らず“

今の清川行人小屋（清川仙人会ＨＰより拝借）



同小屋前石碑群

2023(R5)年7月31日(月)阿部剛士と大沼は同小屋に泊まった際、大沼は道者が押し寄せた往時を偲ばせる以下の石碑群（弘法大師像、墓石、石塔）存在に気付いた、予想はしていたものの数の多さは想定外であった。引き続き9月23日(土)～24日(日)、宮林良幸と大沼は細部調査に出向き、殆んど地中下に埋もれていた墓石を降り起こし、これらの銘文刻字解読と活字化を図り、その内容を本報告書と「第４巻　月山東南エリアにおける女性戒名墓石と女人結界の係りを考察」に別記し、速やかに共有化を図った。　何と当地内の墓石10体中７体に女性戒名が刻されている、これは何を物語るのか。もう一つの特徴は、従来、間違って「姥」像であると解釈していたものは「弘法大師像」（安置趣意等の刻字が見当たらないのが残念）であることを突き止めた。これを女人結界説に結び付る一部の人が作った（それを鵜呑みにした）俗説もあるようだが、「姥」像でない訳だからここに係る女人結界説（女人禁制域）うんぬんは瓦解する、意味を為さなくなったのである。

同小屋玄関前（東方を望む）

左(北)側石塔

左面

正面

右面

頭部に真言宗のご本尊である大日如来を意味する「ア」の梵字が刻されている。1816年は、既に旧日月寺は天台宗に改宗（帰依）していたはずだが、内実は真言宗信仰だったのか？

文化十三子年(1816)
正月廿二日

實聞浄堯信士

仙臺名取郡中田町
佐藤義右エ門

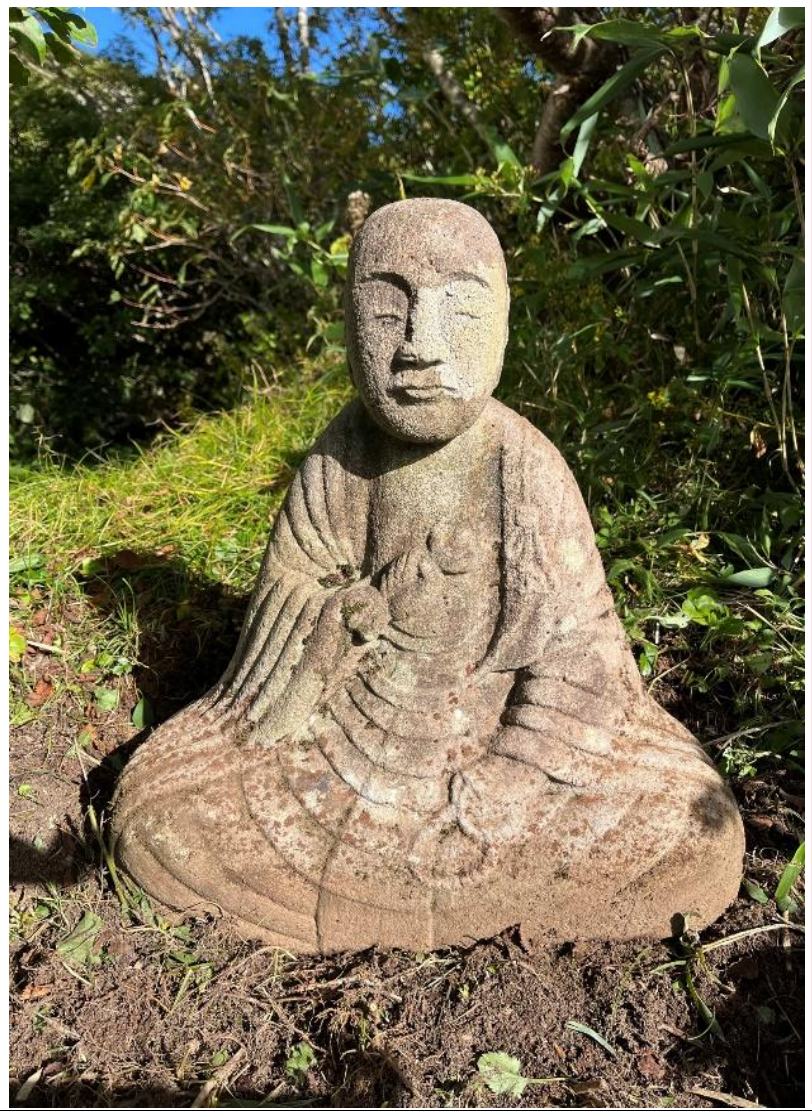
左上写真の右（南）側石塔には、後記「清川 御所王子 社」の建立趣意碑文が刻字されている。

同小屋前の墓石群（刻字は別記）

西面

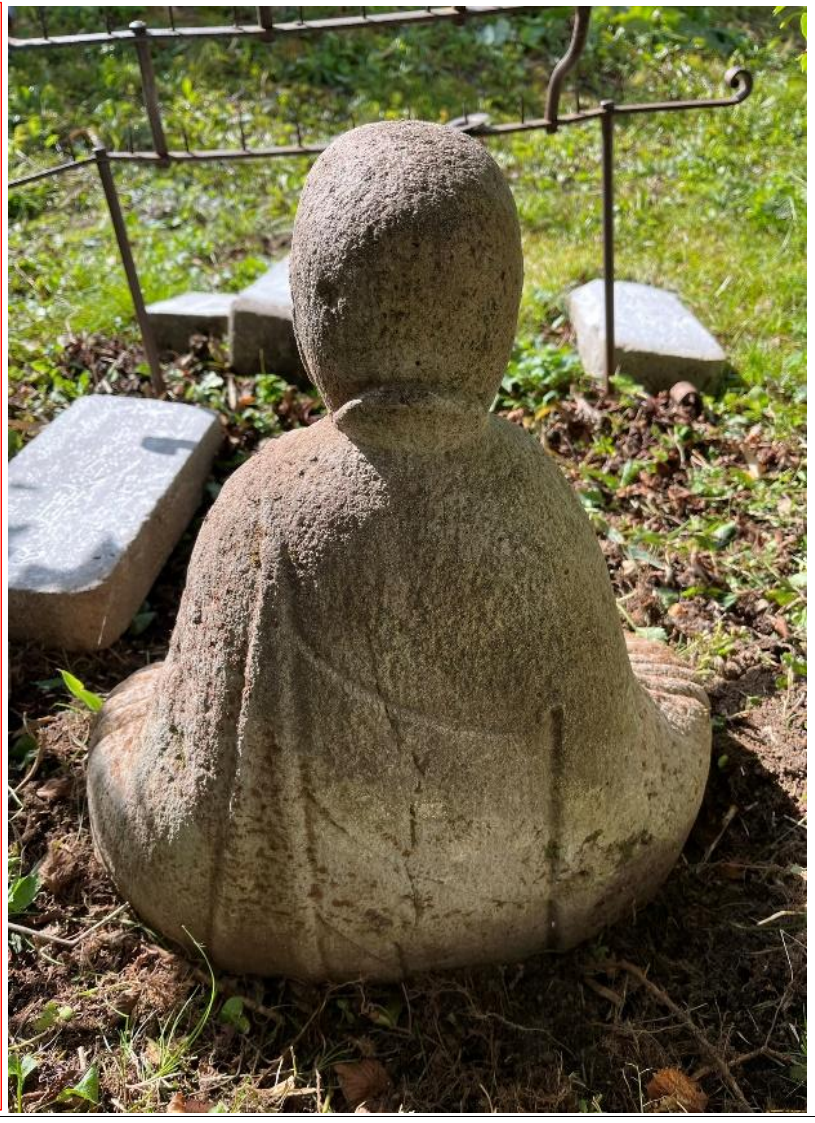
南面

同小屋前「弘法大師像」



これは「弘法大師」像なのだ。（姥ではない）

Ｎｏｎ



下二つは、上と同じ対象物であるが間違っている！　何を根拠に「姥・奪衣婆」なのか?!

鹿間廣治著「奪衣婆－山形のうば神」（東北出版企画）」P122-123に載っている写真と説明書きである。
しかし、**真実は「奪衣婆」ではない！**

行人小屋　大蔵村清川（月山）

・・・奪衣婆はここでは「姥地蔵」と呼ばれている・・・
この姥像と他の姥との違いは何と言っても胸のオッパイの形である。まるで、切れ目を入れて押しつぶし丸いアンパンを二つくっつけたみたいだ。・・

インターネットサイト「烏川経由清川行人小屋への道案内」に載っている。
しかし、**真実は「姥」ではない！**

■ １６．姥様像

女人禁制の時代にここまで入り込んだ女性が神仏の怒りをかい石像にされたとされる姥様、満月の夜に家さ帰りてえと泣きうめき声が聞こえると云う．

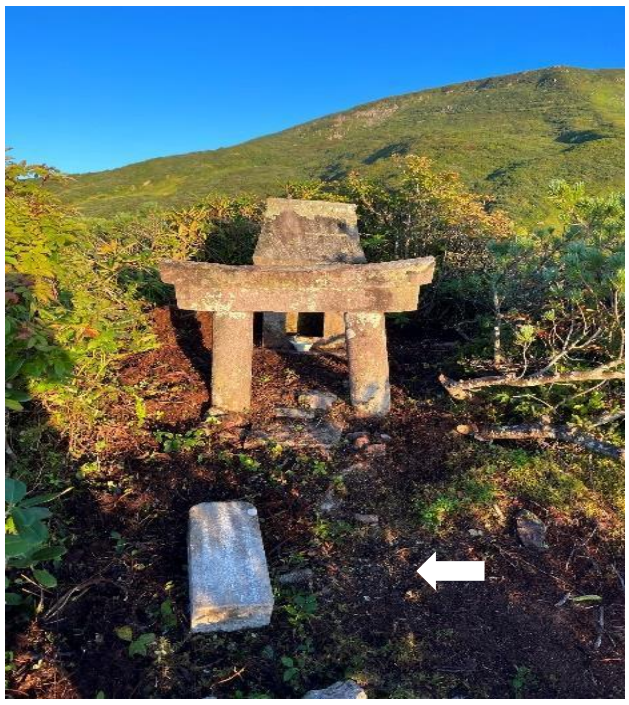
「清川 御所王子 社」

同小屋の西南方向約100先に小高い丘（小山）がある、**2023(R5)年7月31日(月)～阿部剛士と大沼は奇妙な神社（寸詰まり鳥居と石祠）の存在に気付き、細部調査の必要性を認識した。**引き続き、**9月23日(土)～24日(日)、宮林良幸と大沼はその細部調査に出向き、ハイマツと雑木に埋もれていた処を刈払い、本石造物の全容を明らかにした。**単なる見晴台ではなく、古来厚い信仰を集めて来た由緒ある神社（後記の古絵図等に登場する）であることを判明せしめた。

石祠の外寸　横 43cm×高さ 48cm×奥行 42cm
屋根部外寸 裾幅 58cm×高さ 43cm×奥行 57cm

上部笠木幅 100cm、下部島木 89cm
地上高約 55cm、鳥居脚直径約 16cm

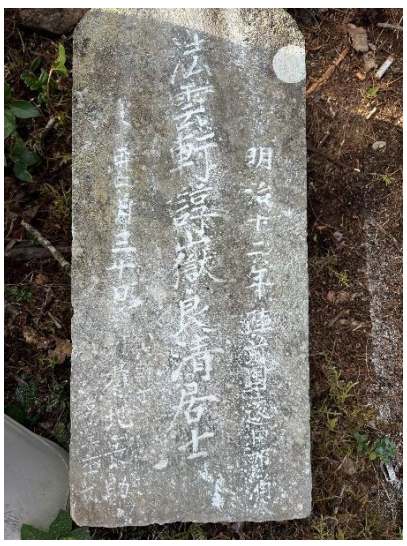
この丘から同小屋を望む



✓石祠四面と鳥居脚には何も刻字なし
✓向きは西北西
✓鳥居に貫がない、そもそも取り付けた痕跡がない。
✓鳥居の手前に墓石一体（下のとおり）

鳥居の前にある墓石一体の刻字

当初これに建立趣意が刻されているのかと期待したが、墓石であった。



正面

法雲軒諄嶽良清居士

明治十二年陸前国遠田郡□谷
六軒丁
□四月三十日　菊池長助
享年六十歳

左面

岩根沢
山先達
西蔵

「清川 御所王子 社」建立趣意石碑

左記を補完するが、神社の存在は小屋関係者はみな知っていたが、小屋前からここに至る参道は両側から雑木が押して歩き難く、かつ、神社の周辺も雑木が被さった状態にあり、関係者・一般の人から見れば、上方の一部は目に入るものの印象付けられる状況にはなかった。　その後も引き続き仮払いと道普請、神社周囲の整備を行って来た。

最大の課題は、このものの建立経緯（趣意、由緒）を知ることであるが、この鳥居と石祠には何も刻字はなく一端諦めることにした。しかし、諦め切れなかった。

そして、**2023(R5)月9月24(日)、宮林良幸と大沼は、同小屋前石碑調査に入った中で、下記のとおりの碑文刻字を発見した。**石正面に乾燥した苔類が付着し一見何も刻されていないように見えたが、凝視する中で匂った、そこで、予め持参したブラシとタワシで丁寧に除去した処、刻字が表れ、**ついに、この鳥居と石祠の建立趣意碑文を刻したものであることを突き止め、その解読・活字化を図ったのである。誰が、何時、何の目的なのかという建立趣意を初めて判明せしめたのである。**

干時　嘉永五年（1852）壬子歳八月□□
（左面）

湯殿山　清川御所王子社
正一位　稲荷大明神　籠堂
建立　発願主　荒木源兵衛拝碑
（正面）

大さ　横約38cm×縦約79cm×奥行約32cm

発願主の荒木源兵衛は、先祖が慶長十六（1611）年に永松鉱山を発見した荒木源内の分家（一族）である。西川町間沢地区小倉に居住（住家は隣同士）していた。なお、源兵衛家は岩根沢旧日月寺の住職を輩出していた名門である。源内との係りからは、この神社崇敬は烏川上流域の鉱山開発と密接な関係を窺わせる貴重な史蹟となる。山域における作業安全と鉱山事業の発展、さらには里域における五穀豊穣を祈願しつつ奉納したのだろう。これらは、このエリアはまさに信仰と鉱山の融合の時空を以って歴史を為して来たことの証左である。

その調査の中で次の７点の問題意識を持ち考察した。

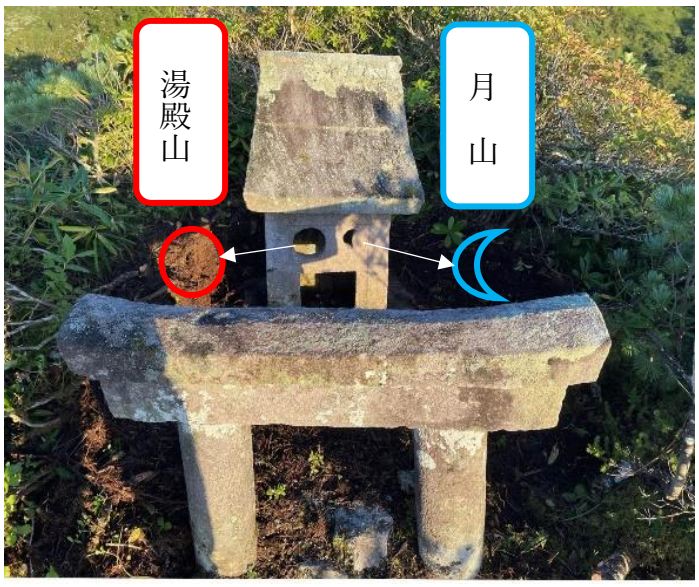
①同社石祠四面と鳥居脚には何も刻字はないことからは、その建立趣意の意味すること
②同社に向かう（拝礼する）と西北西を向くこと
③石祠に刳（く）り貫き彫刻している「日と月」は基本形と配置が反対になっていること
④鳥居の高さは寸詰まりの様相であること
⑤同社の名前が三通りあること
⑥鳥居前に墓石があること
⑦お札と義川版画（文政三・1820年作成）に描かれていること

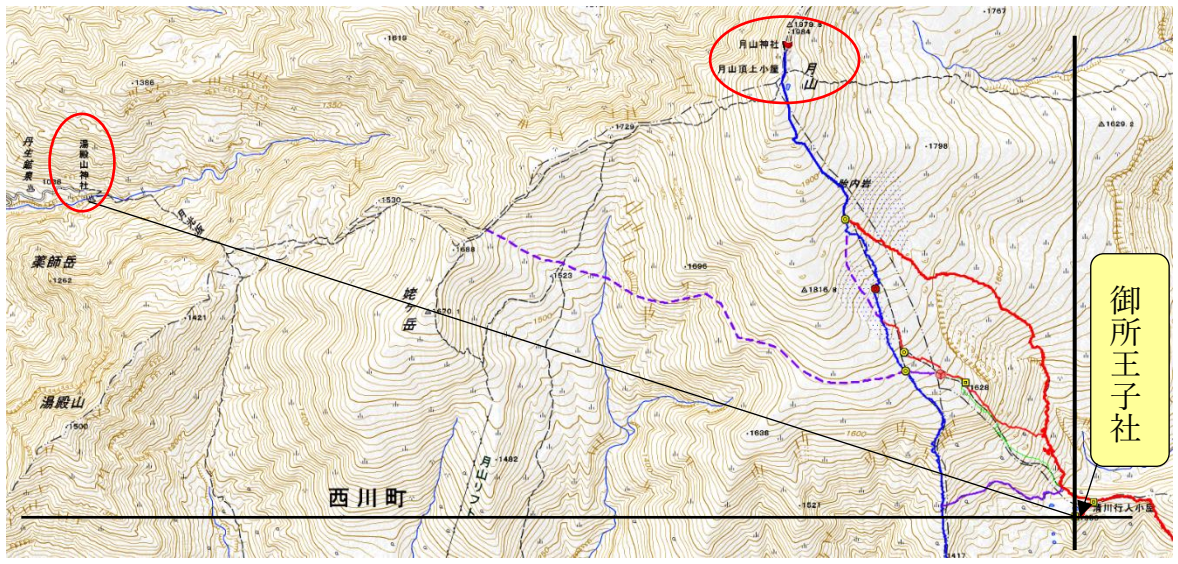
それらに対する見解については、一部は後記するが、細部は別記の報告書本体に記述する。

「湯殿山・月山」遥拝の向き

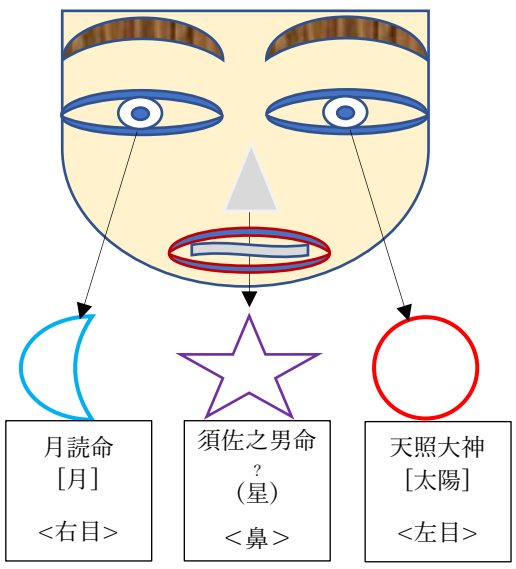
鳥居に向かい俯瞰すると下右図のとおりで、現地でコンパスを当てると西北西を指し、その先に湯殿山が位置する。また、石祠の『日・月』の刳(く)り貫き彫刻がある、ここの地理に鑑みて、ここで佇んだ時、左手には湯殿山、相対的に右手には月山があることを認知・分別していることからは、合掌・柏手の拝礼に当って、自然な向きで遥拝出来るように左側に日（湯殿山の象徴）を、右側に月（月山の象徴）を彫刻した、すなわち、**遠くの湯殿山・月山の地理的相対位置と手元・目前のシンボル配置を合わせたのだろう。このように明確な意図・企図を以って彫刻したということを突き止めた。**

したがって、「湯殿山」と「月山」の両方を崇敬の対象とし、両山を合わせて遥拝しつつ、五穀豊穣・子孫繁栄を祈った祭儀の場でもあったのだ。





記紀から生まれた「左上右下(さじょううげ)思想」は、中世の天皇礼服 （下中は吉野裕子著「大嘗祭」より）や庚申掛け軸等の『日・月』配置に応用されている、本体から見て、左上位に『日（太陽）』、右下位に『月（太陰）』を配置するが、これを基本型とすれば、ここは逆（本体から見て左に月、右に日）である、しかし、これは上記のとおりに繋がる。



日本神話（記紀）による日月配置

江戸時代までの天皇の礼服

某宅の庚申講掛け軸

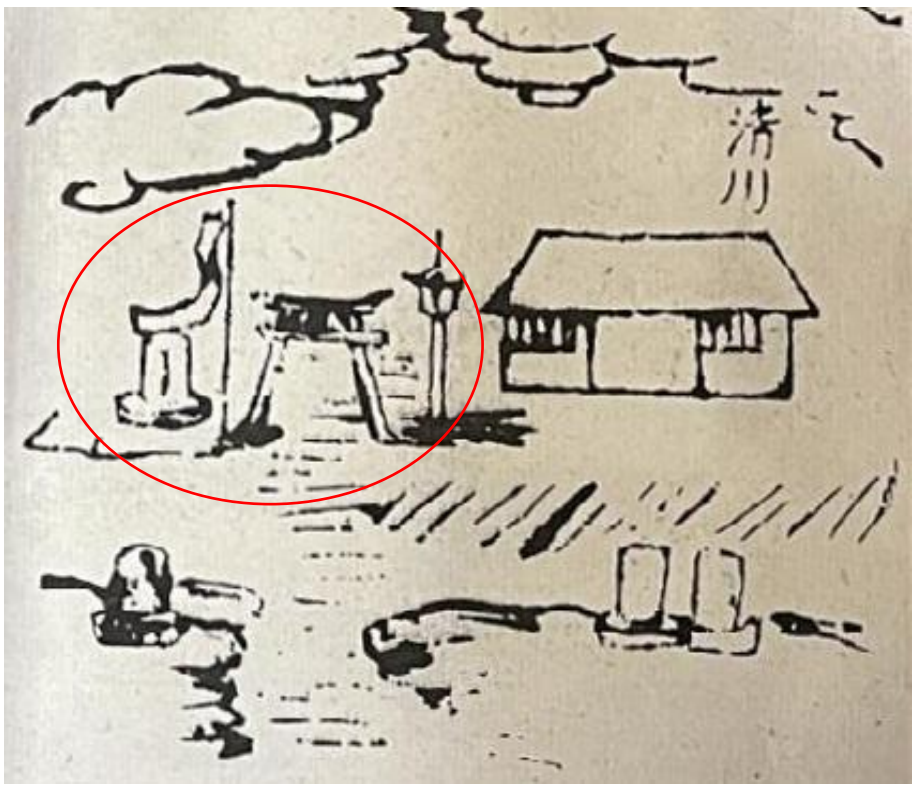
この神社には三つの漢字の当て方がなされている。		
(清川)御所王子社	**五所皇子（稲荷神社）**	**五所王子**
現地現物の石碑に建立趣意刻字 湯殿山論争絵図	「お札」や丸山茂著「岩根澤の面影」、および原田一男著「月山登山案内」	湯殿山道中絵噺(ばなし)

特に“五”には諸説あるが、天皇制皇統原初に繋がる天神地祇の代表格神々５柱を一括りで象徴した表現であり、企図した神の性格を踏まえれば「御所王子＝五所皇子＝五所王子」であり何ら問題はない、神威・神徳に変わりはないのだ。庶民に神名の何たるやの分別は問題外なのだ。

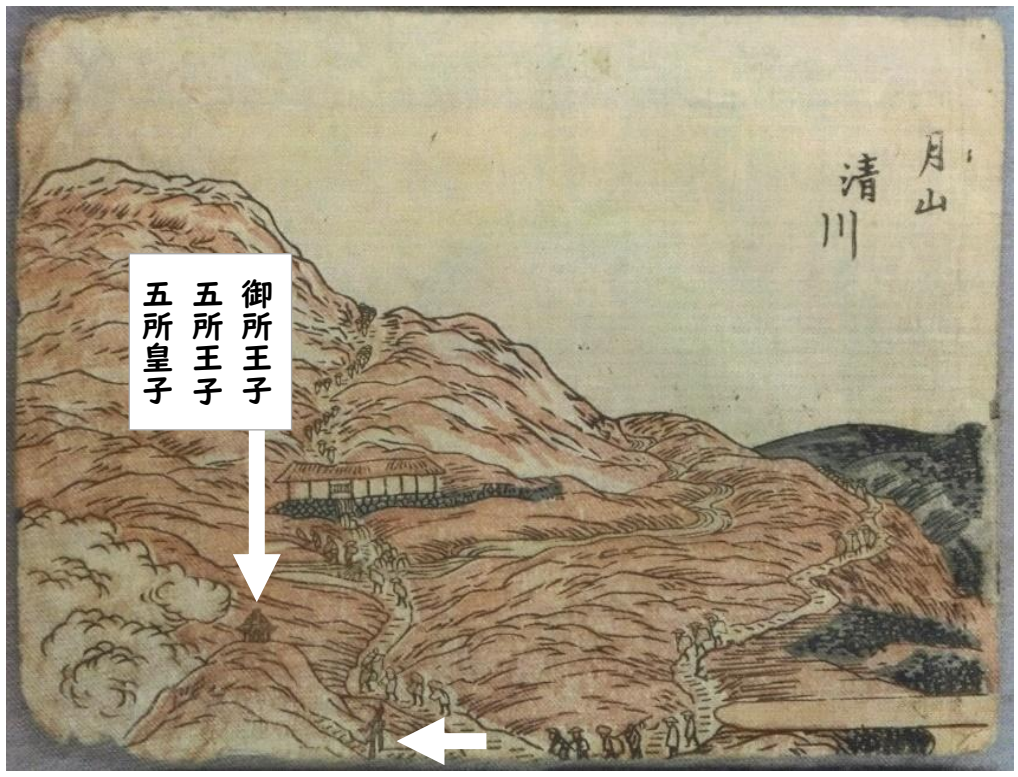
古絵図（歴史）に見る「清川 御所王子 社」

下図のとおりに古くから崇敬を集めて来た由緒ある神社である。左図は清川行人小屋内の神棚に祀られているお札であるが、古来、同社の社守を担って来た清川坊が版元である、これには「五所皇子」となっている。なお、下部に注目すると鳥居が描かれていることから、礎石がないか、鳥居隣の石碑がないか、現地調査したが、見当たらなかった。

前頁下段のとおり、名称の発音は“ごしょのおうじ”だろうが、漢字の当て方は時の人により揺れが生じていたようだ。

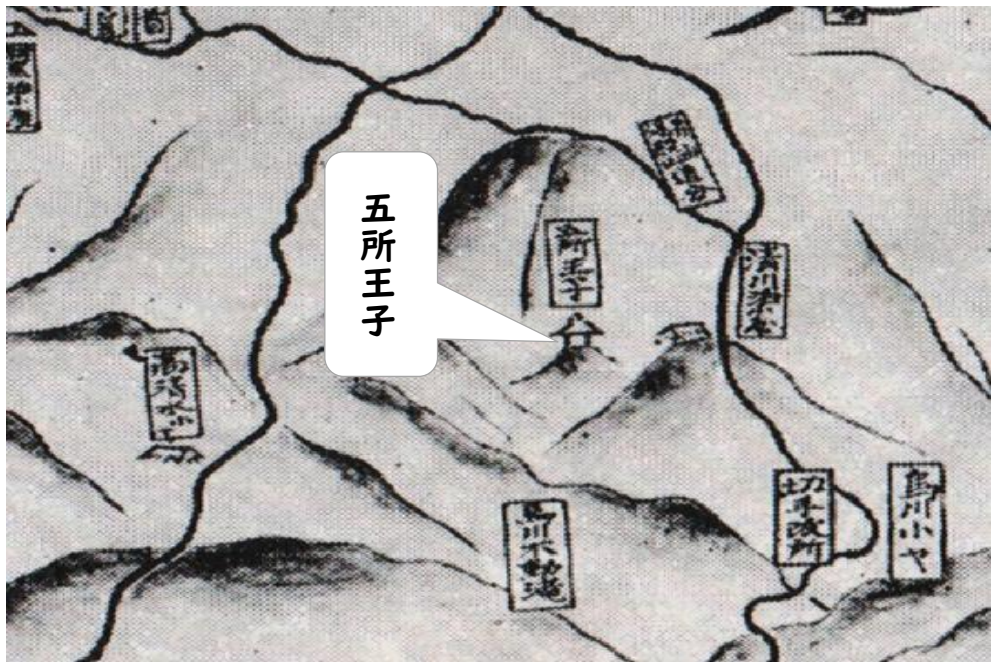


上お札の下部



義川筆『湯殿山道中一覧版画』より

両造法論関連『湯殿山論争絵図』より
寛政４（1792）年頃のもの



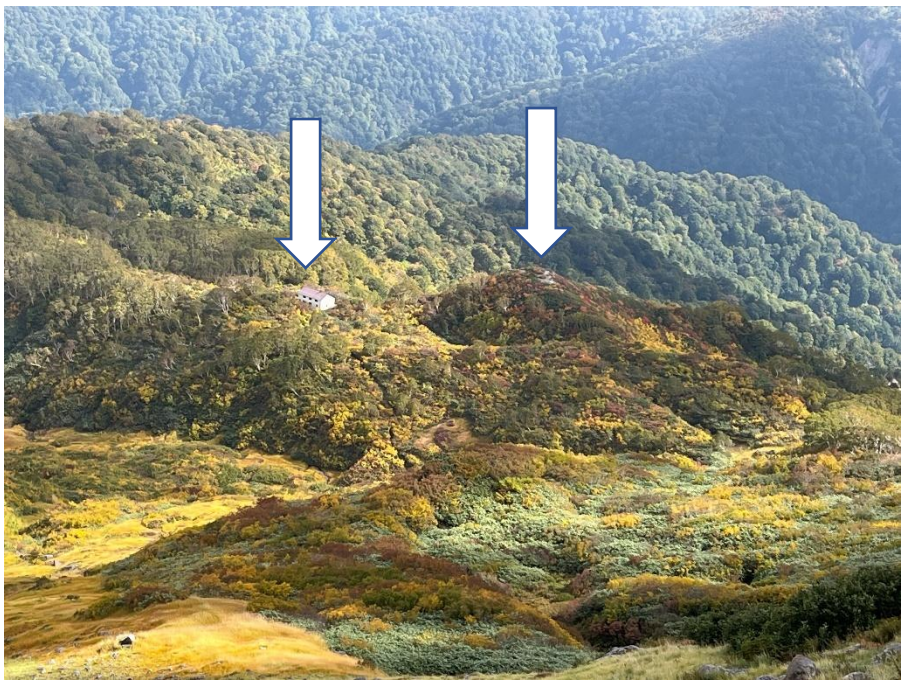
「湯殿山道中絵噺」より

石碑刻字の趣意によれば、今の石造社殿は嘉永五年(1852) 建立であり、すでに寛政４（1792）年頃にはあったことからは、建替え更新であろう、いずれにしても相当歴史は古いものと思われる。こうなると、元々の最初の建立の経緯を知りたくなるが・・・。

「清川 御所王子 社」周辺眺望

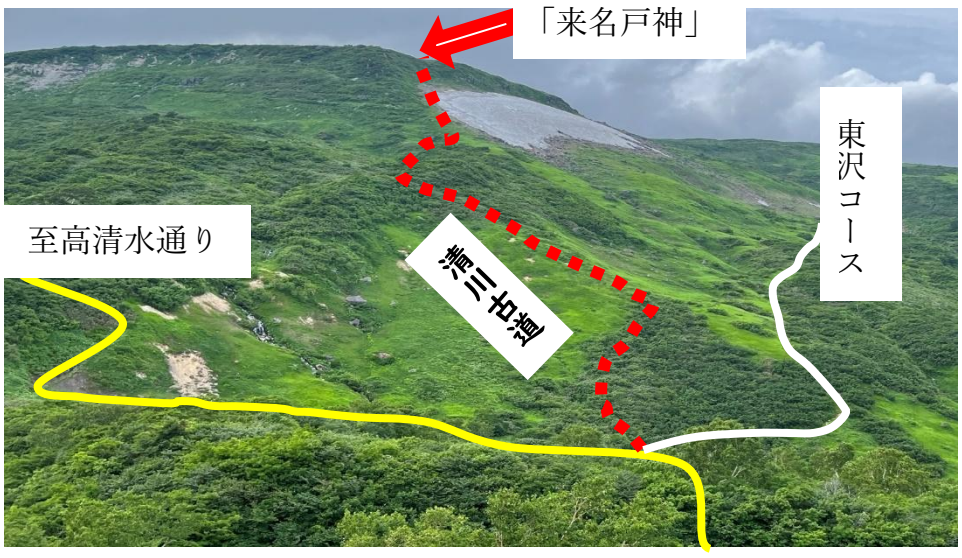
同社は清川行人小屋から西南に約 100m、標高 1380m の小高い丘となっている。月山頂上は見えないが、手盡坂(てづくしざか)の崖、遠くは東の葉山から奥羽山脈、南に朝日連峰等が望まれる。

同社から見た清川行人小屋



清川古道から見た小屋と同社

同社から見た高清水通り「高清水小屋」跡地



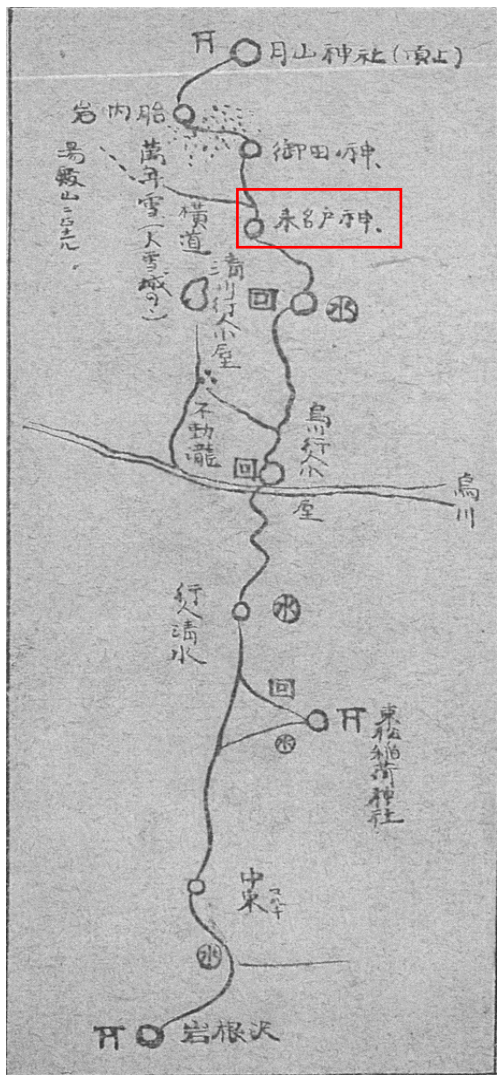
同社から見た清川古道
同古道の手盡坂を登り切った所に来名戸神がある

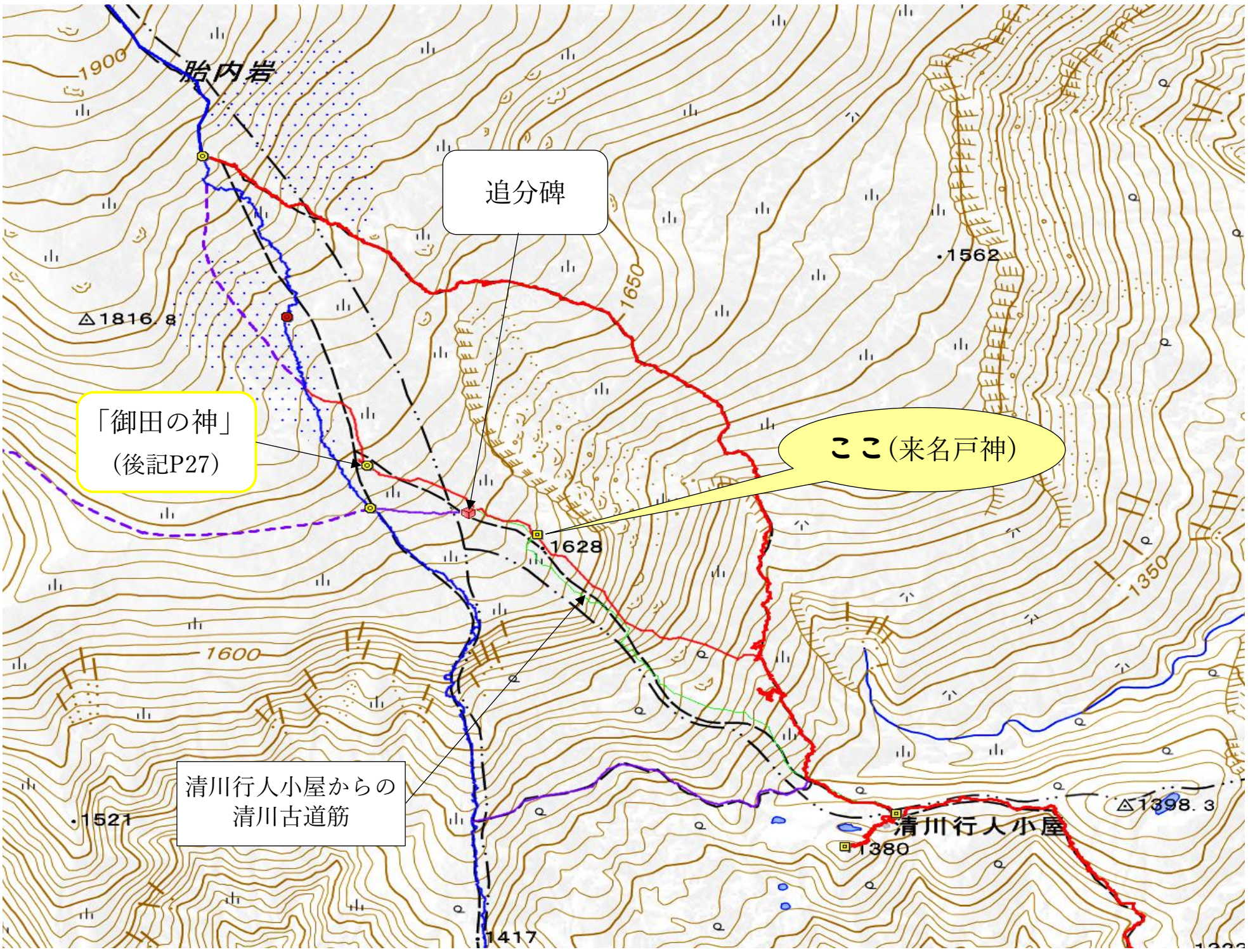
同社から見た北方向

「来名戸神（来名戸古墳）」

右図と下記説明は「月山登山案内」から抜粋する。類似のことは「岩根澤の面影」にも記載されている。なお、名称（地点名）はこのとおりであるが、石造物（墓石）の存在については一切触れられていない。

（説明）「・・・『手盡し』（急坂）に会う、急坂で手を盡して上らなければならぬのでこの名が起こった。・・・上り詰めて平坦な所に「**来名戸神**（くなどかみ）」の安置せられている処に出る。神霊の気分になって頂上へと向かう途中に「御田の神」の安置されている草木帯に出る。この處から灌木帯が過ぎて高山のお花畠の草木帯だ。この處で五穀豊穣を祈って頂上へと進むと途中本道寺からの登山口（高清水通り）に会う。・・・」





「来名戸」由来の霊気充満

2023(R5)年９月24日(日）宮林良幸と大沼は、前泊の清川行人小屋から清川古道に入った、繁茂した藪漕ぎのために旧道を少し南にずれて、草付きに出た所で、大沼は約35m北方に視線をやった時に気付いた盛り土に異様さを直感した、即刻、調査に入った。この時は倒れ掛かっていた**半地下状態の地蔵菩薩像を起こし、ほとんど地中下の墓石２体を発見・発掘した。**ここに何回行って見たが、とにかくも怪しげな霊気を感じる特異な場所だ。**後日同年10月11日(水)～10月12日(木)、片倉忠幸・松田秀孝・大沼香は再調査に入り、新たに墓石１体を掘り起こした。**標高約1,630mの高地に人工的盛り土があり、**しかも３体の墓石みなに女性戒名刻字（３体いずれも江戸時代のもの）があることを突き止め、銘文を解読し活字化を図った。**このような状況はまったく予想外で驚愕した。

全景（周囲より小高い）

盛り土は人工的な匂い、他にも墓石が埋まっている可能性が有る。

(六)地蔵菩薩　　膝幅38cm×胸幅23cm×高さ39cm×奥行25cm

像の背面を含めて調査したが、設置・建立年月の刻字は見当たらないのが残念である。

像と墓石３体

「・・・幼道**女**」のように読めた。
他は摩滅して判読不可
7歳以上15歳未満か

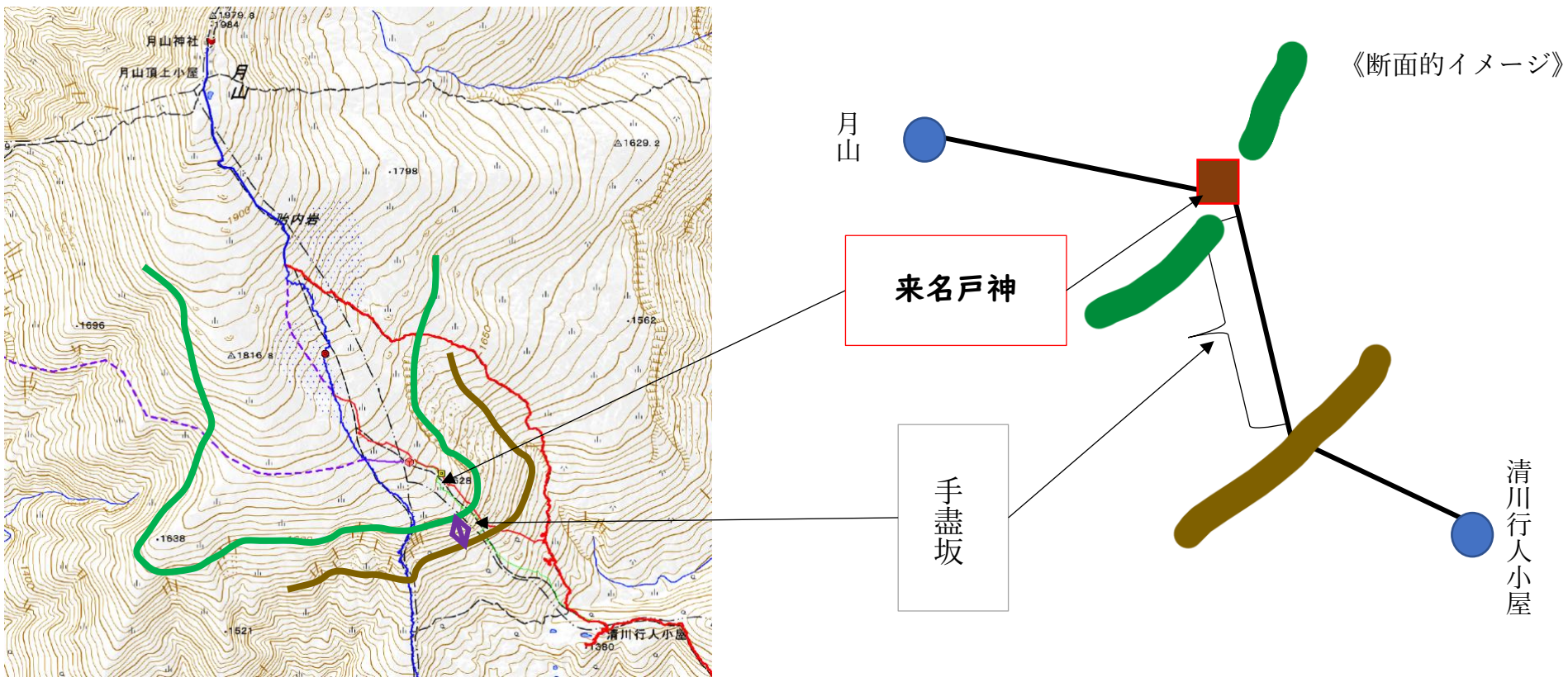
③

文政七八月十八日(1824)　仙台伊具郡
柱心宗香信士
春水妙杲信女
弘化二二月二日(1845)　藤田村　初吉

②右側面に「山先達　長甚坊」(岩根沢)

仙台□□名取郡鈴□町
嘉永□□年（西暦1848～54年）
菊庭露光信女
九月四日　喜太郎
□□

①

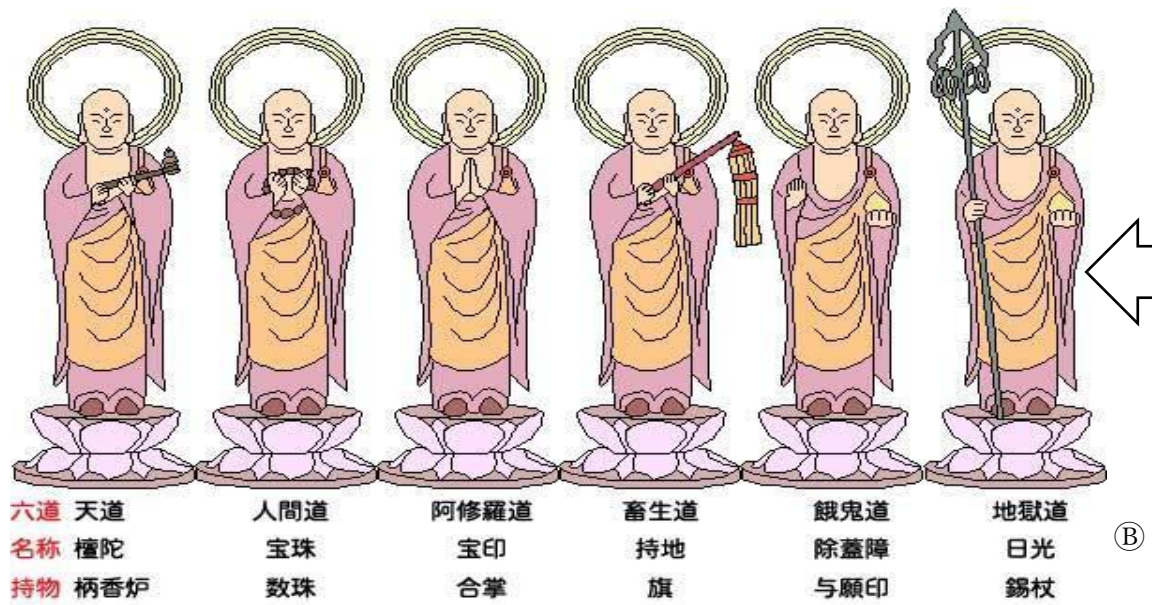


まずは月山の地形・地理構成は上図のとおり。境界（緑線）より上は森林限界を越えた草付き、その下方は雑木藪の急坂崖状（断崖絶壁状）になっている。地元では古来、地面に手を盡(つ)いて這いつくばる状態で登らなければならないことから、このバンドを「手盡坂(てづくしざか)」と称して来た。

先人はこの地点をなぜ「来名戸(くなど)（神(のかみ)）」と名付けたのだろうか。

ネットコトバンク等によれば、「来名戸」という語源は「日本書紀」にみえる神、「くなど」とは「来てはならない所」の意味。道の分岐点や村境などで悪霊の侵入を防ぐ神であり、道祖神の原型とされる。簡単にいうと聖俗の境界、あるいはそこに佇む神様という捉え方である。

ここを登って来た道者からみれば、喘ぎながら死に物狂いで登り切った途端に傾斜が緩くなり、見晴らしが効くようになったこの場所は、別世界に飛び込んだ気分になったであろう。今もまさにそのとおりである。それらをみんな合わせて「来名戸」の聖地(聖俗結界地)に来た雰囲気の所である。



Ⓐは円成寺（奈良県）HP、Ⓑは「高野山真言宗 やすらか庵」のHPより拝借

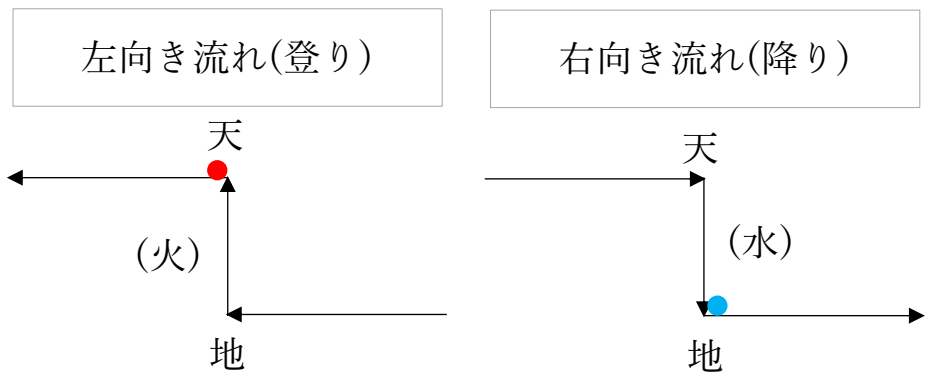
さてその像は何か？　「**左手に宝珠を持ち、右手に錫丈を持つ**、ものは“六地蔵［地獄道］守護の大定智悲地蔵(だいじょうちひじぞう)”、すなわち**『地蔵菩薩』**であることが分かった。錫丈を持って六道を巡り歩き、あの世の故人だけではなく、今世の苦しんでいる人をも――冥界で彷徨える人を救う役目を負っているという。

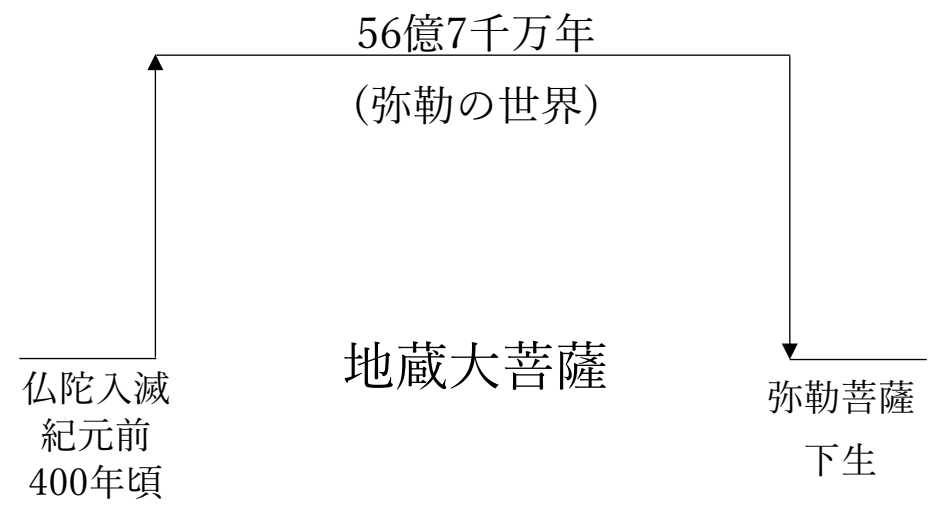
端的には来世・あの世は、極楽と地獄という対極的な世界が存在するという信仰が基層にあるのだろう。

また、ここには３体の墓石があって、みな女性戒名が刻されている。今においては仏の匂いプンプンだけど、古来、神の座(おわ)す場所なのだ。地蔵菩薩本願経・閻浮（えんぶ）衆生業感品第四において、釈迦（仏陀）は「地蔵菩薩の前身が女性である」と明言している。したがって、女性戒名墓石(霊魂)と地蔵菩薩の同座（親和性）は至極当然となる。また、里の墓地の殆んどに地蔵菩薩像が安置される。

ところで、錫丈そのものの姿としては、下は地に向け、上は天を指すように立てて持つ、横にしない。そこに道者の動きを重ねる、登りの場合は上昇指向の『火』の勢いに同化し、降りの場合は下降指向の『水』の勢いに同化し、その変曲点はこの「来名戸神」の地点なのだ。

仏陀入滅後、56億7千万年後に兜率天(とそつてん)から弥勒菩薩が救世の仏としてこの世に降臨・出現されるという弥勒信仰がある。弘法大師は、死の４か月前の11月15日に、弟子達を集めて「吾れ、閉眼ののち、必ず兜卒陀天に生じ、弥勒菩薩の御前に侍るべし。五十六億余ののち必ず慈尊の御供して下生しまい祇候(しこう)」と述べ、自身を弥勒菩薩の下生に重ねた。ここから真言宗開祖の空海こと弘法大師は弥勒菩薩とも重ねられて信仰されている。





地蔵菩薩はその56億7千万年の間、仏陀に代わって衆生を地獄の苦しみから救済・教導の役割を担うこととなっている。いわば、仏陀の死（過去）と弥勒降臨（未来）との間の無仏世界（現在）の救世主となる。ここの菩薩像の建立年は不明だが、墓石と合わせると江戸後期に、最初の墓石安置の時に建立した可能性大であろう、だとすれば旧日月寺は天台宗帰依なのであるが、寄進奉納者はあえてこれらを読んで、宗派よりも弘法大師（真言）の教えを尊重した上で安置したのではなかろうか。

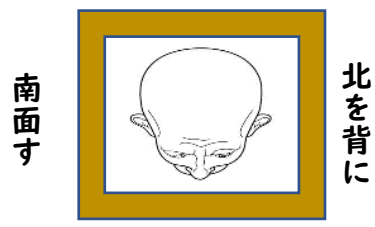
・信仰世界の精神性と地理世界の物質性、上と下、火と水、仏教を姿・形に求める仏教と、神教を姿・形に求めない神道世界という陰陽二元相対（待）性原理の厳しさと対極調和の統合性を教える空間であろう。

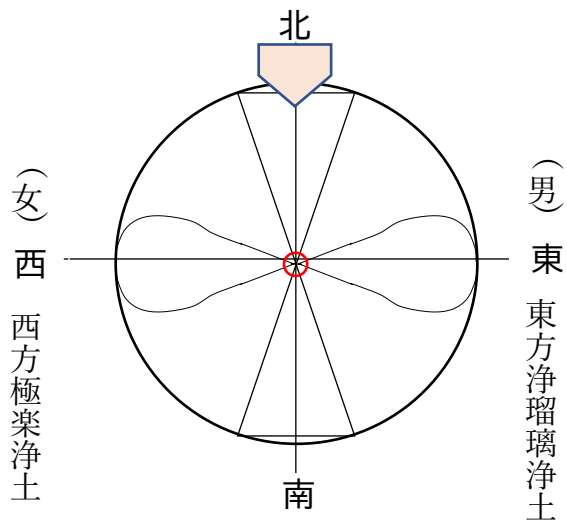
・静寂と沈黙を要求する空間である、以って密教の秘密性と、この地の神秘性が相まって特別な聖地と観想して来た空間であろう。

・「天地人」－天地に託した錫杖と道者（人）の三位一体による天下泰平を祈った舞台であろう。

地蔵菩薩の向きが気になった。目前の月山を向かず、西南方向の湯殿山向きでもない、現地でコンパスを当てると、ほぼ真南（やや西より）を向いて安置されている。その視線の先を追うと今は寒河江ダムの堰堤周辺に当る、水没した昔の集落を知る由もないが、いずれにしても、そこには大規模集落があったとは思われない。すると、限定された一定範囲の里の人々だけの平和・安寧を見守る願いを込めたというよりも、もっと広い意味合いを込めたものと推察するに至る。

その謎解きに**「北を背に南面す」**というキーワードが浮かぶ。陰陽五行思想等中国古典の影響下、中国伝来の東西軸・南北軸思想を交差させて意義付けが図られ、統治機構に活かして来たという歴史に依拠する。また、民衆から見た北方向への信仰という点では、北極星・北斗七星を神格化した妙見信仰との関係がありそうである。





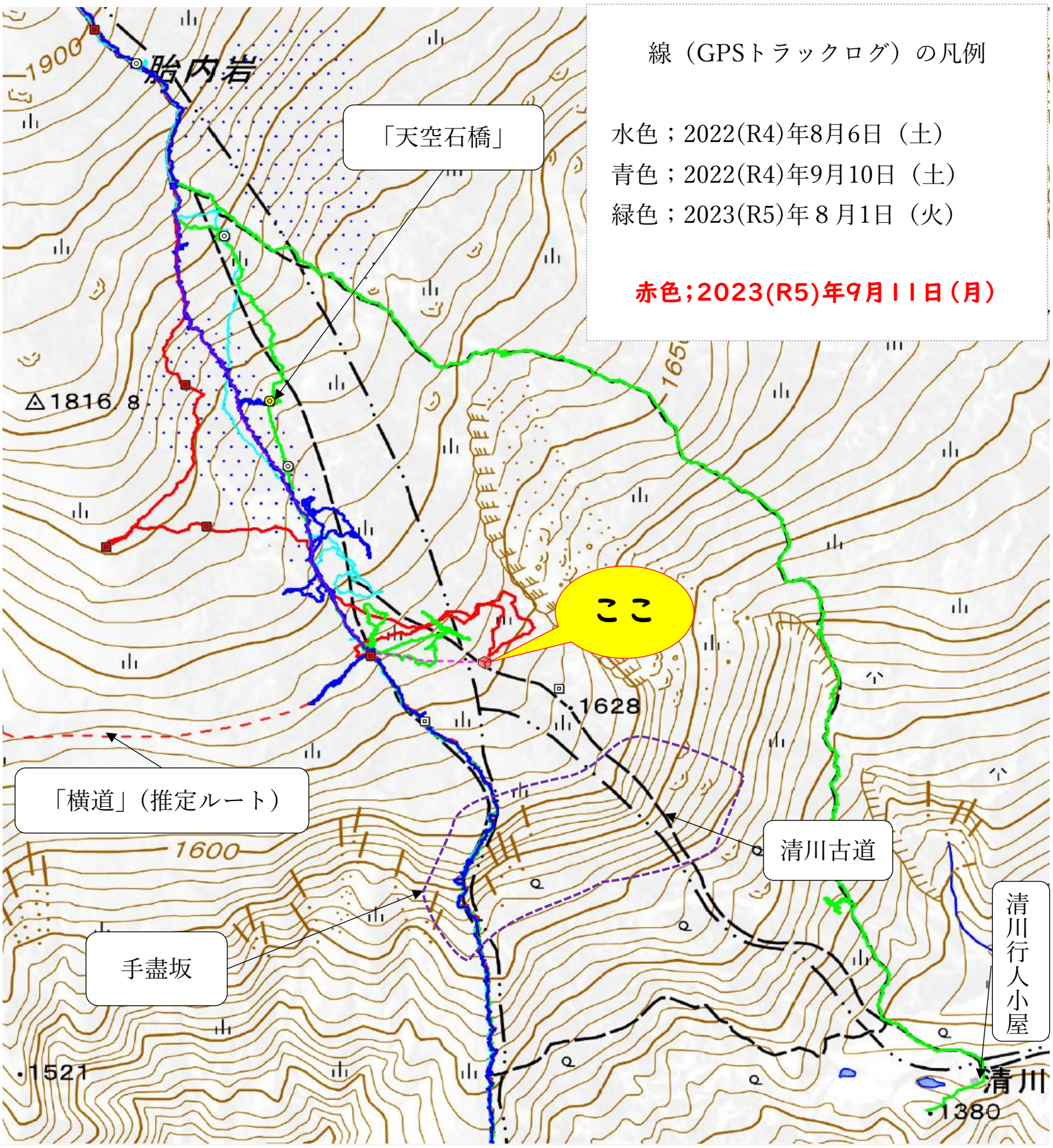
「月山・湯殿山」追分碑探査過程

2022(令和4)年、出羽三山「本道寺口」、登拝参詣古道「高清水通り」調査活動の中で、渡辺幸任氏著「出羽三山絵日記」同著旧版310頁（新版322頁）に記載の追分碑が目に止まりとても気になっていた、なお、この写真説明の註釈以外は何も記載なし。強い関心を持つに至った理由は、説明に「本道寺口」が出て来ることからは、「高清水通り」と関連があると察知したからである。これを探したく幾度となく現地に出向き、確認に挑戦して来たが、願いが叶わず時が過ぎていた。

写真 4
平成10年 9 月15日、月山山頂から万年雪を下り、本道寺に向かう神林千祥さん（右側）一行。岩根沢口と本道寺口の分岐点の岩（道標）に、左湯殿山、右羽黒山と刻まれていた

渡辺さんに聞き取る中で、月山頂上小屋管理人の芳賀竹志さんを紹介賜った。

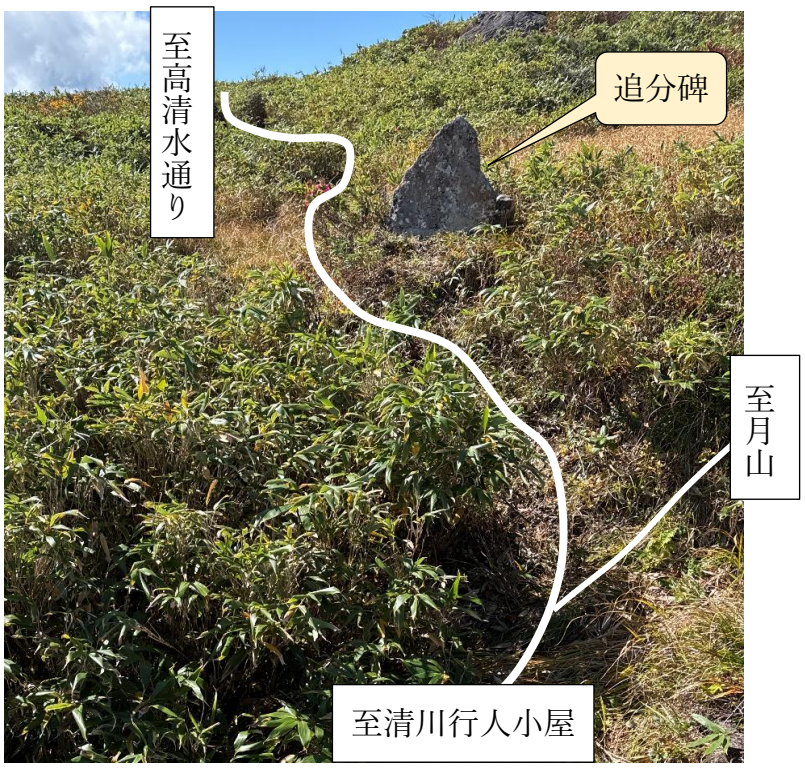
そこで、2023（R5）年9月11日（月）真鍋雅彦・阿部剛士・大沼香の3人は、月山からは頂上小屋管理人芳賀竹志さんの同行・案内を賜り、ついに念願の追分碑に対面することが出来た。その後も有志による追跡調査を行った。地理的位置・向きからして、岩根沢道者の案内誘導に供する追分碑である。



「月山・湯殿山」追分碑

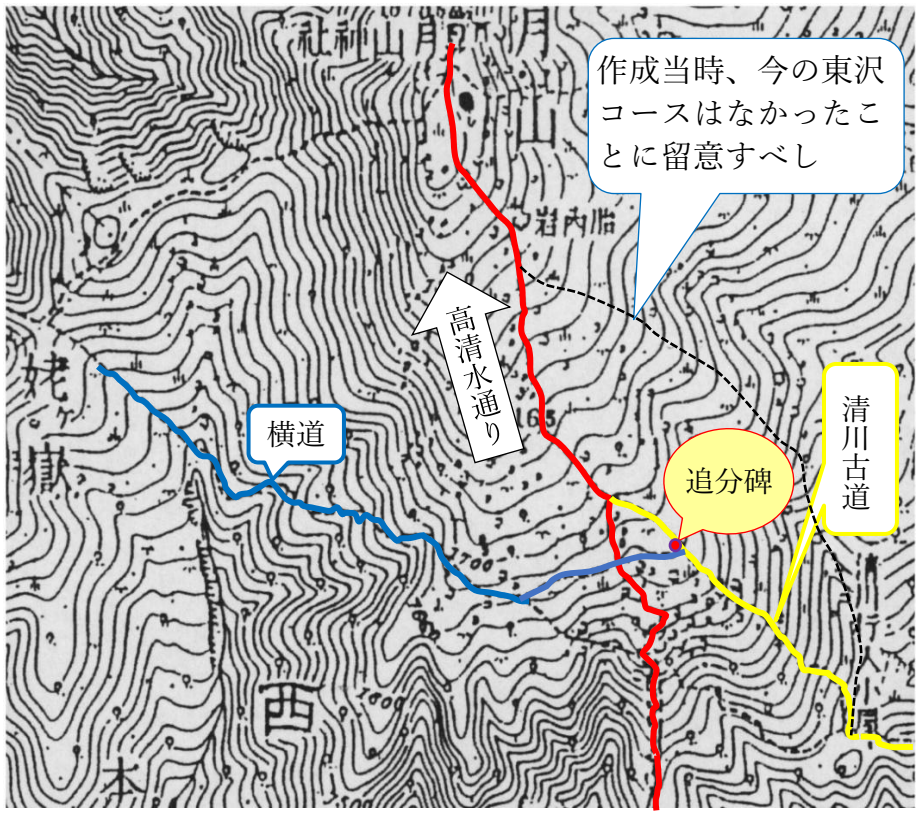
ふくしま
小□□町
弥作
右　月山　羽黒山
道
左　湯殿山　牛首
山先達
福□
長慶坊

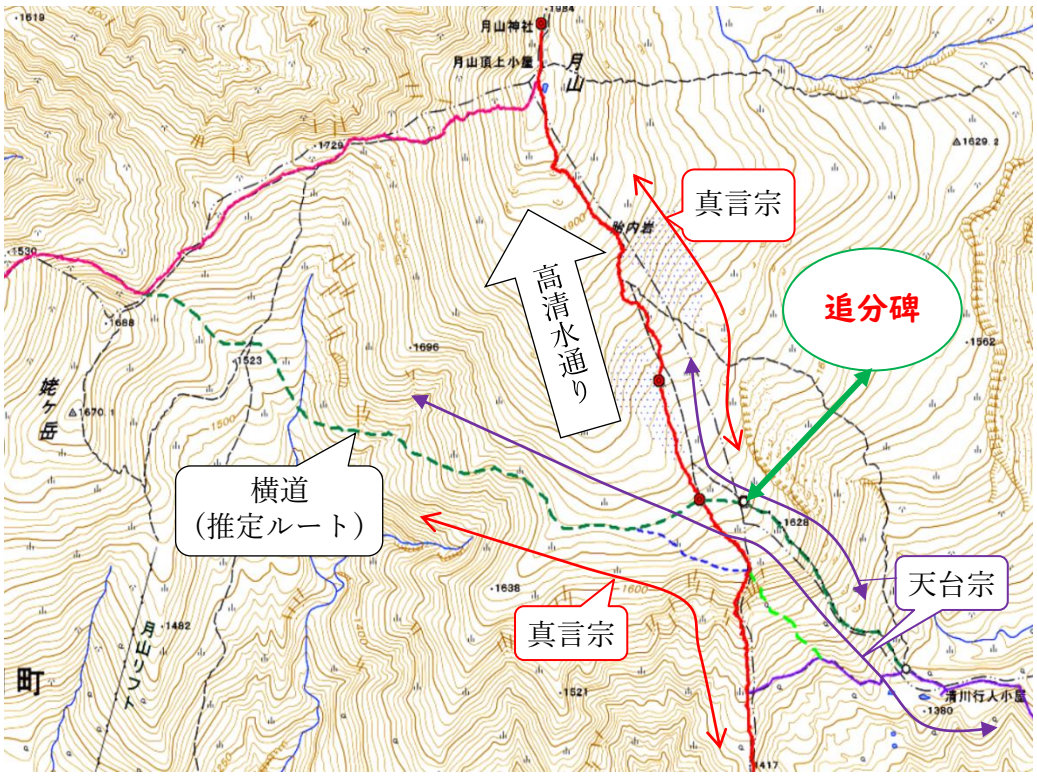
・外寸は凡そ、幅82cm×地上高さ55cm×厚み18cmである。
・刻字は明瞭である。
・**建立年は見当たらない。**（背面下部に固く埋まった石が当り、下部は確認不可）



・全碑文をこのように活字化し公開したのは初めてであろう。

・この碑文刻字の読み方だが、弥作と長慶坊の立場、関係性は様々想定できるが、さておいて、山先達「長慶坊」は岩根沢と隣接する本道寺にも実在した宿坊であり、どちらの人だったのか？である。現地で対面して分かる設置の向きからは、左図・下図における道の交差状況に鑑みて、本追分碑は、岩根沢から入った道者に対する案内誘導の道しるべであることを突き止めた。しからば、岩根沢在住の長慶坊であったことだろうと推察するのが自然である。

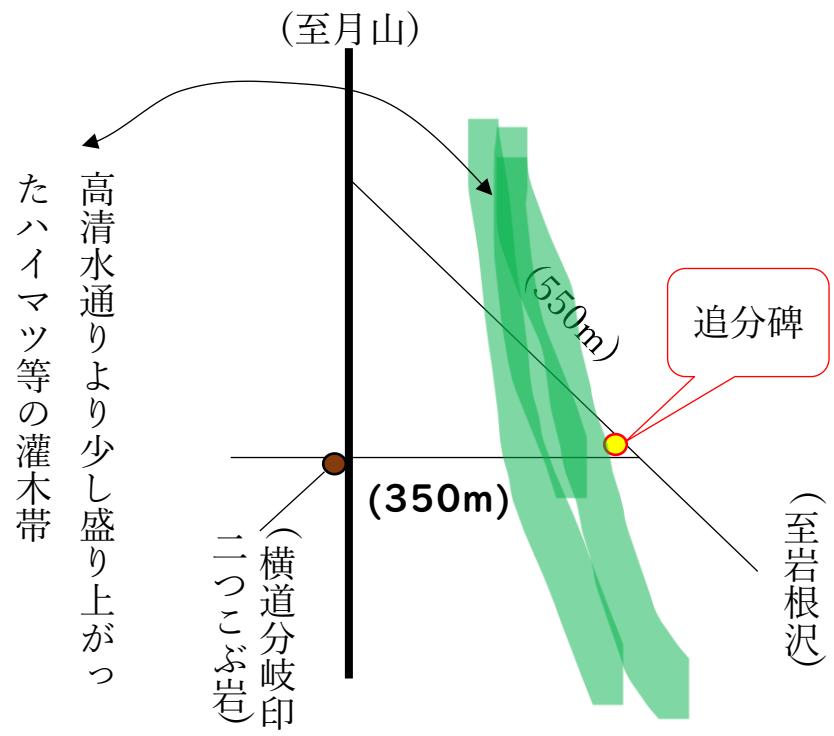


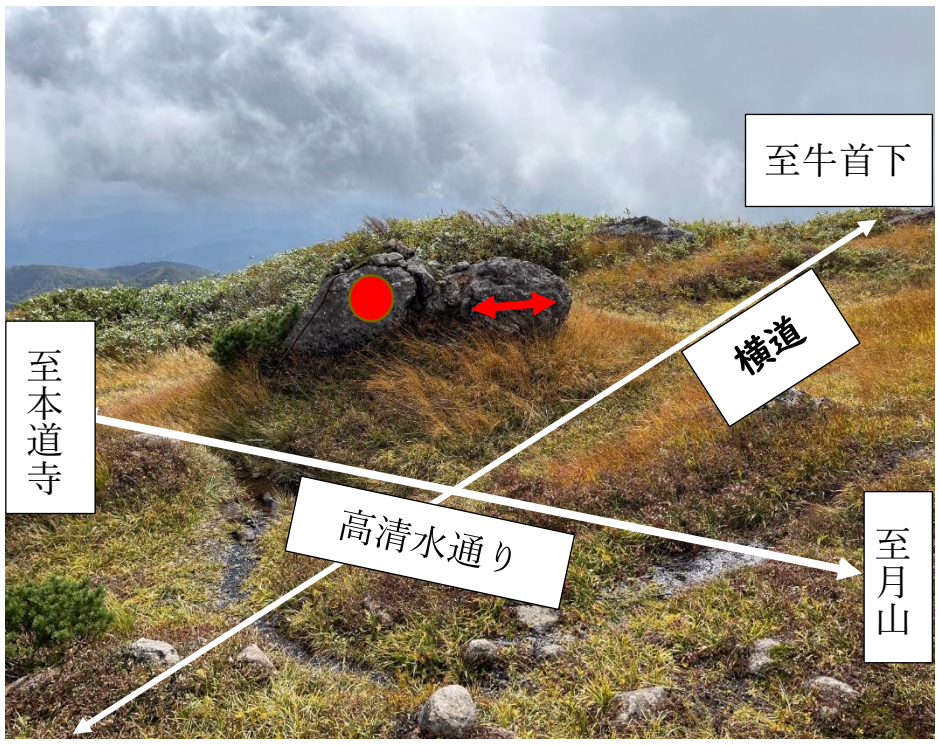


・左図は大正二（1913）年一月二十五日印刷、国土地理院地形図に加筆したもの、右は現在地形図に加筆したもの。
・往時（ある期間）は、真言宗帰依本道寺行者と天台宗帰依岩根沢道者が交錯・交流したエリアであった。

３回の探査挑戦で見付けられなかった理由は、前頁中段の写真および右図のように追分碑に向き合って見ると、「高清水通り」は、盛り上がった灌木帯の先、約 350m 西側なのでまったくルートは見えない。逆に高清水通りからは約 350m 東側、灌木帯奥の下った場所なのでまったく見えないのである。

なお、横道分岐目印二つこぶ岩の所の交差状況は下図のとおりである。「牛首下」の方向に進むと、点々と”道しるべのケルン石”が点在し、踏み跡がしっかり残存している。





ここで、一つの疑問が持ち上がった。

国土地理院地形図には昔も今も記述はないが、古来、下図のとおりに牛首と牛首下と通称された地名はあった。横道は牛首下に至り、その先は金姥経由で湯殿山に通じていた。この追分碑にある「左　湯殿山　牛首」の順序に従えば、左手の道を辿るとまずは湯殿山に到着し、その先に牛首が存在することになる。本来、地理的遠近を踏まえた道案内ならば、「左　牛首　湯殿山」となるはずが、逆に表示したのはなぜなのか？　地理的条件よりも目的地の湯殿山を強く意識させたかったことの証であろう。先に『**牛首**下』を通過するのは間違いないが、初めての人に対しては、そこはどこであろうが分からなくても支障はない、この追分碑の先には必ず湯殿山があると強調・明示したかったのだろう。

同追分碑探査検討過程

芳賀竹志さんの案内を賜る前に試行錯誤を繰り返した検討経緯を記録しておく。

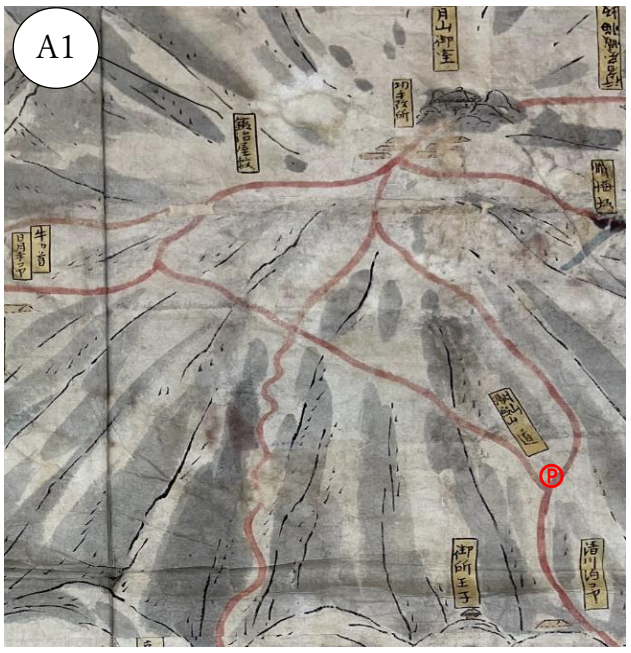
A2は西川町史（上巻）P1013『図50　湯殿山論争絵図トレース図』より抜粋・拝借したもので、A1古絵図－寛政４(1792)年頃のものに対応する。

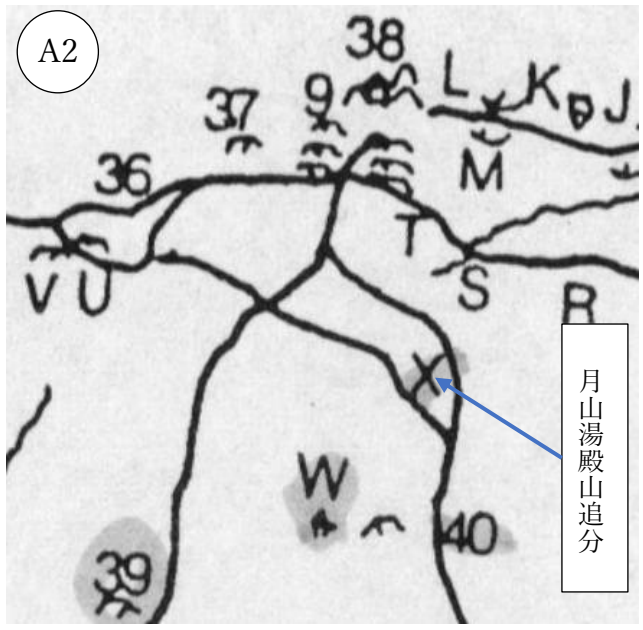
まずは、A2「X」に「月山 湯殿山追分」の記述があることからは、その位置はA1「Ⓟ」地点だろうと見えた。なお、凝視したら、縦文字で「月山湯殿山　道」とあり、**「追分」の文字はない。**

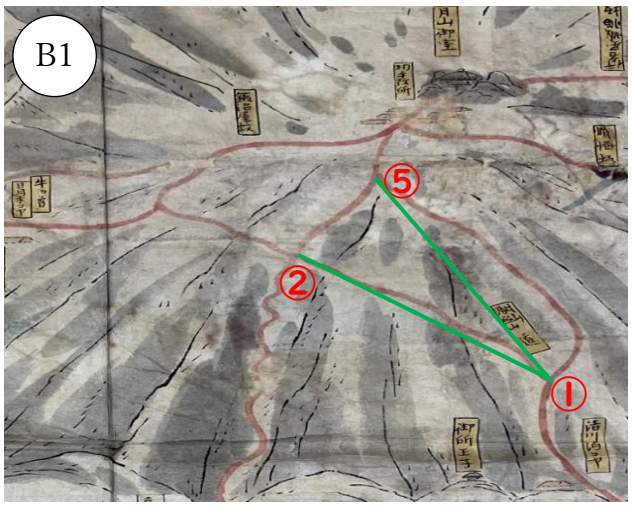
しからば、その点は地形図上のどの位置に対応するのか、二つ想像した。

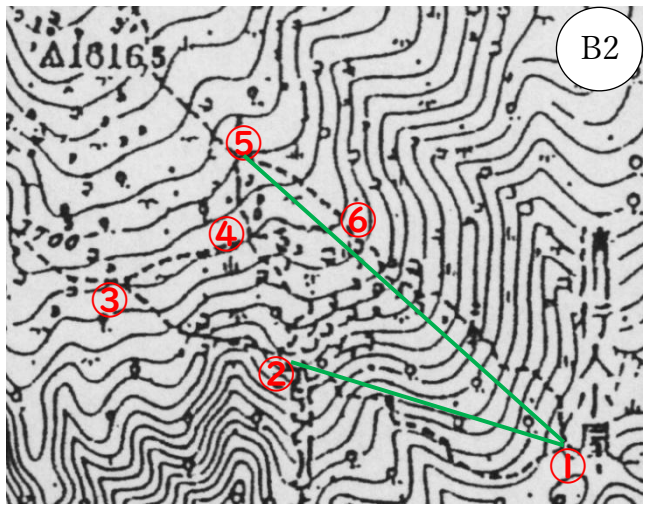
一つ目はB1とB2の関係、つまり、追分（分岐）点は清川行人小屋近くの①地点と見た。

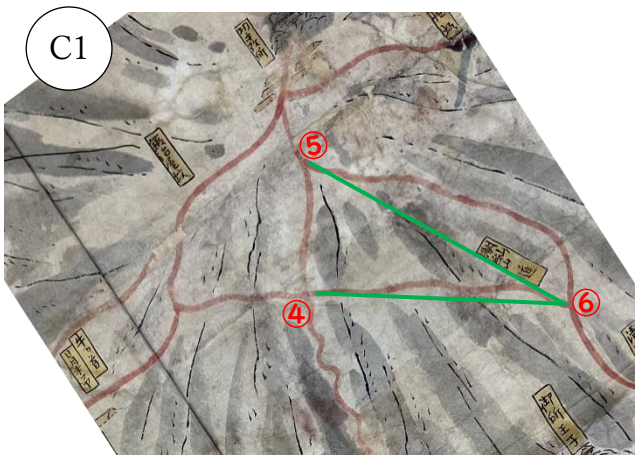
二つ目はC1とC2の関係、その分岐点は手盡坂を登り切った⑥地点と見た。

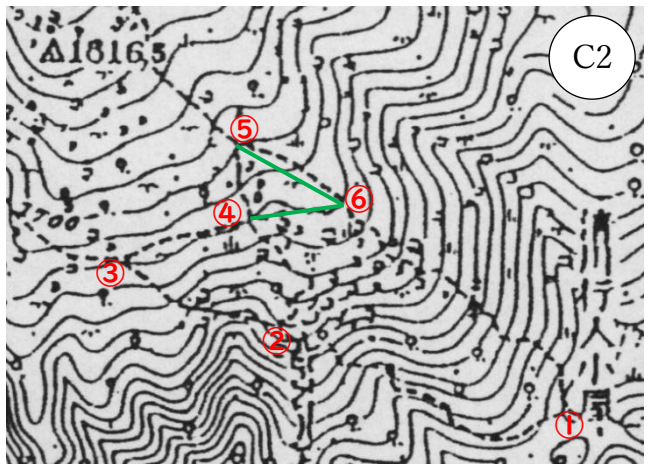










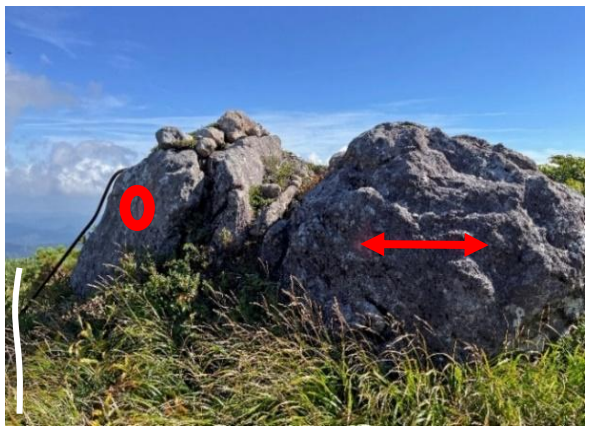


はて国土地理院地形図Ｂ2①なのか、Ｃ2⑥なのか、そのどちらだろうか、一時、悩んだ。しかし、**C1とC2対応の⑥地点と睨んだ。**その理由は次のとおり。

１）高清水通りに幾度となく通い詰める中で右下図「横道分岐目印二つこぶ大岩」の④地点存在が頭にあり、赤い○印は高清水通りに直面し、赤い⇔印は西方向「横道」誘導であろうと読んでいた。したがって、追分碑があるとすれば⑥であろうと睨んでいた。

２）渡辺幸任さんが行った時の道沿いカラー写真提供を賜り、同碑前後の風景からして、地形的に清川行人小屋当りではないと見た。

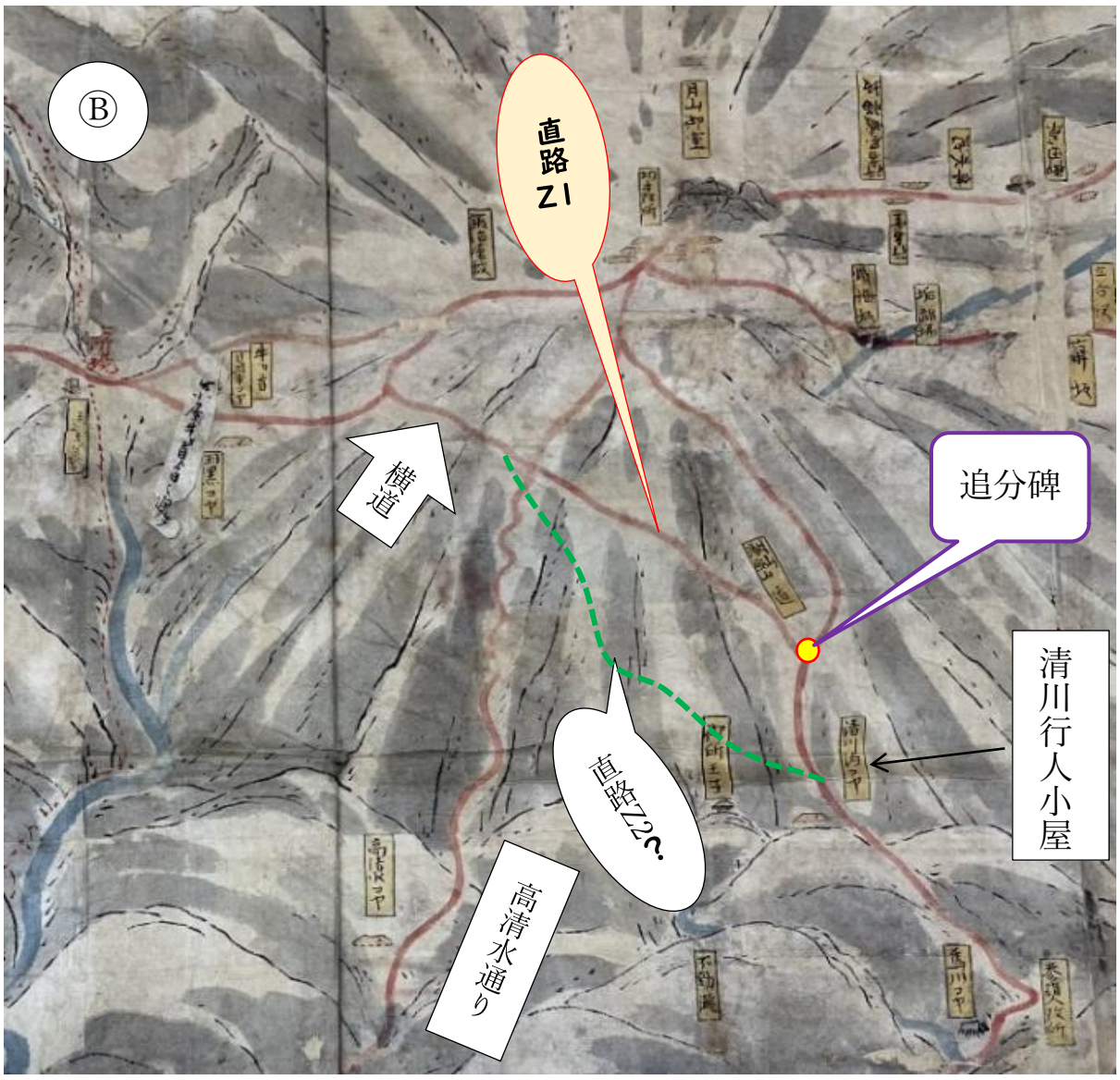
結果して、この追分碑がある現地（ポイント）はC1とC2対応の⑥地点に在ったことを突き止めた。



しかし、前記21頁に記述したとおりに３回も探査挑戦したが、結果、もう一歩というところで、発見出来ずにいた。そして、前記のとおり叶ったということだが、古絵図－地形図－現地の絡みに様々揺れ動いた経過を顧みて、現場での察知力の限界を、吾が身の不甲斐無さを痛感した。

同追分碑と直結の「直路」

西川町史編集資料　第八号（三）のP128文書――寛永十六（1639）年頃のもの――を取り上げる。「一　月山之腰手つくしと申処を岩根沢より湯殿山参詣之**直路**を切開候得共、本道寺より度々相留堀切候而、 今に道者一人も通し不レ申候、・・・」 前後を含めた文脈から要約すると、“高清水通りから湯殿山へのバイパスルート「横道」は、既に開通している処において、岩根沢旧日月寺側が清川道（今の清川古道）から横道に繋ぐ直結道路を開削したことから、本道寺側は直ちに止めるようはっきりと告げた処、一人も入らなくなったという。いわば、本道寺側は、“横道は我々の湯殿山行き占有道であり、岩根沢側の通行を許さない”と、意思表示を図ったものだろう。これは旧日月寺側が旧本道寺側に仕掛けた一騒動であったのだ。後記の秘連古道騒動においては、逆に旧本道寺側が旧日月寺側に仕掛けたのだ。



前頁で追分碑の位置が確定したことからは、これを前提に考える。Ⓐにおいて、緑色の実線直路Z1（追分碑～q）と点線直路Z2（p～q）のルートが考えられる。様々なパターンを想定されるが煩瑣になることからは単純化して考える。

寛永十六（1639）年頃の追分碑存置有無によって次のように考えられる。

当時既に有った場合はZ1の可能性が高い。前記のとおり、Z1を開削したからこそ追分碑が必要だったとも言える。

当時無かった場合はZ2の可能性がある、この場合はⒷにおいては緑色点線のルートに成り得る。なお、Z2ルートは格別に急峻であり、道路開削には多大の労力を、あるいは一定の作業期間が必要となり、高清水通りからは目に付き易いが、事実はどのような経緯があったのか？

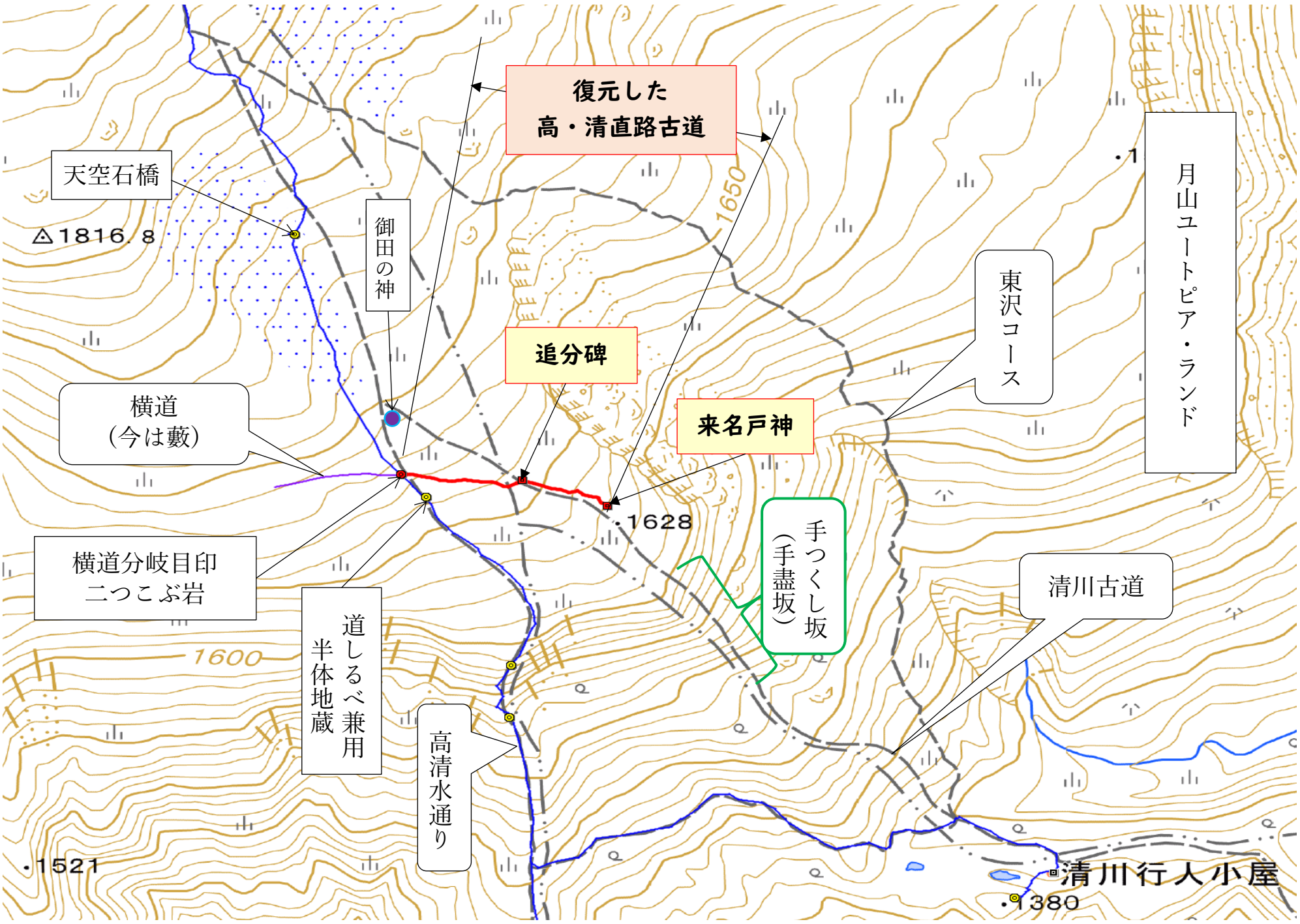
現地追分碑の位置とⒶ・Ⓑの地図と総体的に判断すれば、追分碑から横道に繋ぐZ1の方を直路と見なすのが適切であると判断した。

なお、前記追分碑のこと、および横道・直路のことは、前出三書籍には一切出て来ない。

「高・清直路古道」復元（旧道修復）

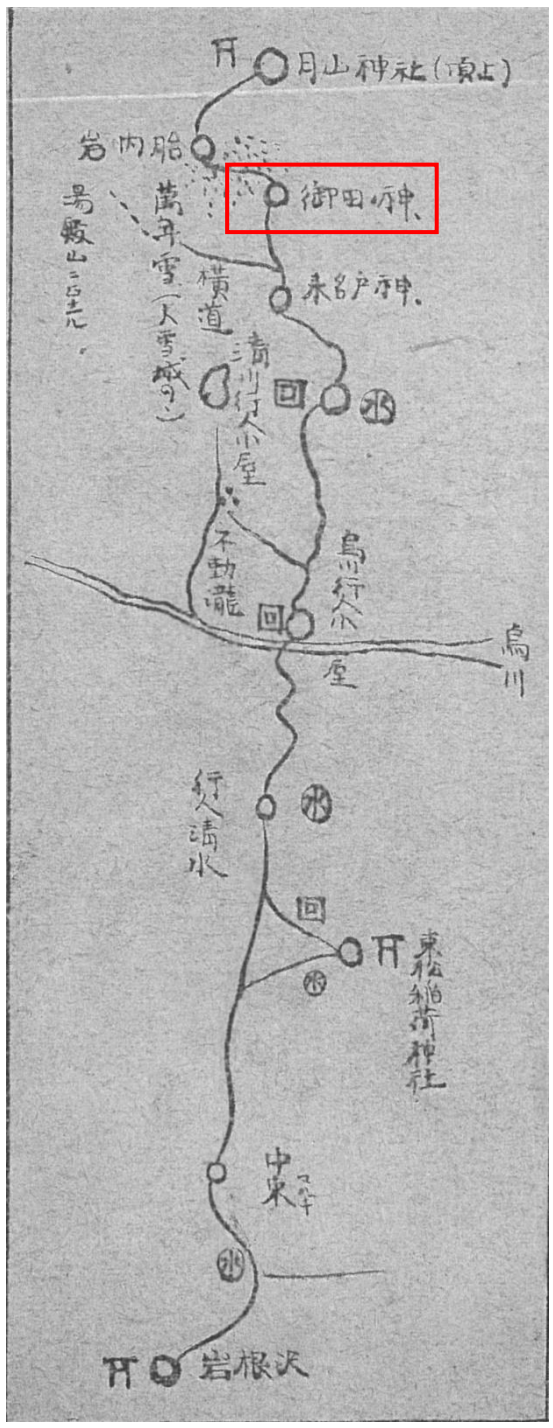
課題としていた高清水通りから来名戸神までの直路古道の復元（旧道修復）を成し遂げた。旧道ルートは明瞭な道型が残っているものの一部笹竹の繁茂で歩き難かったことから歩かれる幅の刈払いにより道を確保した。“当該ルート（旧道）を外れるな”という強いメッセージ表現のために５・6m 間隔に目印用ピンクテープを付けた。

日　時	主な作業内容（起点は二つこぶ岩）	対応者
2024(R6)年9月24日（火） 10:30～12:00（１時間30分）	起点から来名戸神までの旧道ルート全般調査 起点から追分碑までの旧道ルート確定 起点から追分碑までの一部笹竹刈払い	阿部剛士 大沼香
2024(R6)年9月26日（木） 13:15～14:05（50分）	追分碑から来名戸神までの旧道ルート確定 起点から追分碑までの笹竹刈払い	片倉忠幸 大沼香
2024(R6)年10月11日（金） 10:40～12:50（2時間10分）	追分碑から来名戸神までの笹竹刈払い	大沼香
2024(R6)年10月12日（土） 9:15～13:45（4時間30分）	起点から来名戸神までの笹竹刈払い	大沼香
2024(R6)年10月17日（木） 9:40～12:00（2時間20分）	起点から入り口部分のルート再調査と確定 起点から追分碑までの笹竹刈払い	大沼香
延べ５日間／通算作業時間11時間20分		延べ７人
（註）「起点」とは「横道分岐目印二つこぶ岩」を指す。		



右図と説明は「月山登山案内」から抜粋したもの。類似のことは「岩根澤の面影」にも記載されている。なお、名称（地点名）はこのとおりであるが、ケルンや石造物の存在については一切触れられていない。

（説明）「・・・『手盡し』（急坂）に会う、急坂で手を盡して上らなければならぬのでこの名が起こった。・・・上り詰めて平坦な所に「来名戸神」の安置せられている処に出る。神霊の気分になって頂上へと向かう途中に「**御田の神**」の安置されている草木帯に出る。この處から灌木帯が過ぎて高山のお花畠の草木帯だ。この處で五穀豊穣を祈って頂上へと進むと途中本道寺からの登山口（高清水通り）に会う。・・・」

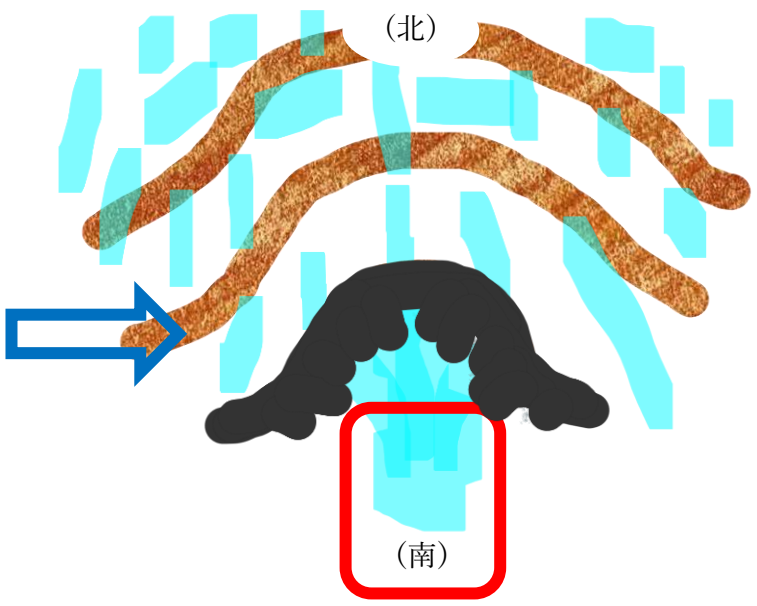


2023(R５)年10月8日(日)大沼単独と、2023(R5)年10月11日（水）～10月12日（木）片倉・松田と大沼の３人による調査を踏まえて、「**御田の神**」の場所を特定出来たと思っている。近辺状況は写真のとおりであり、場所は前26頁のとおりである。この当りには夥しいケルン状目印岩が連担・散在している。ここは窪んで比較的平坦と見做される、草木帯の中に池塘・水溜りもあり、田んぼに見立てられる地形にある、ここのケルンは米粒を模したものではないか。ここに３回行っているものの、「御田の神」を直接的に象徴する何らかの具体的な像、石碑類を確認出来ずにいるが、五穀豊穣を差配する神が座（おわ）す神聖な場所の雰囲気があり、「**御田の神**」を喚起させるに十分な場所である。

「御田の神」で南方を望む

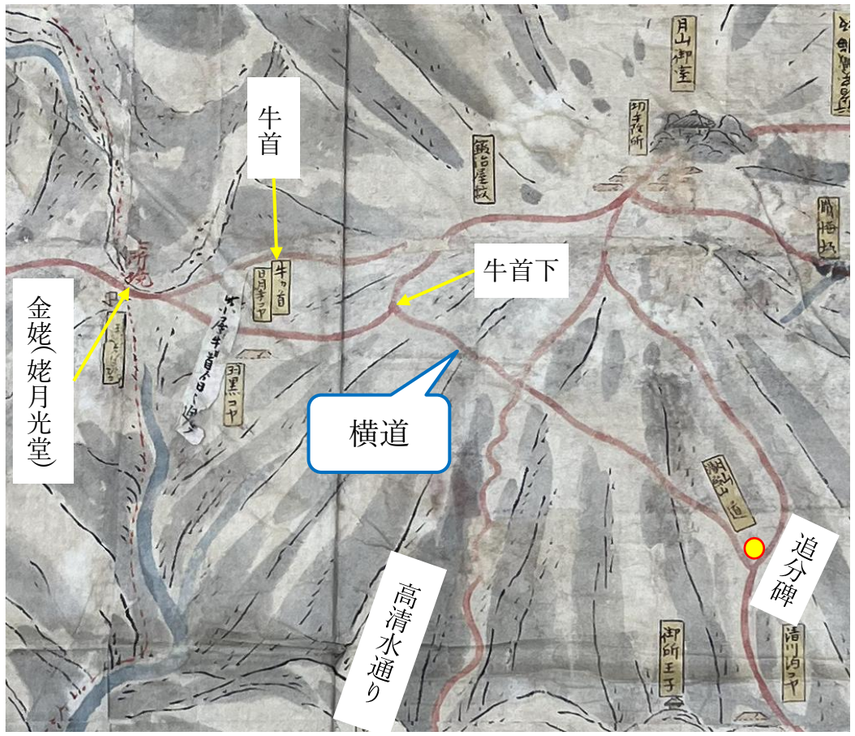
二人の後方突き当りを下図にデフォルメ

このエリアを南側から北方向を見ると、右図のように突き当り・壁状の地形であり、まさに、田の神が山の神になって籠る場所を想起させる。むしろ「山の神」の名称に相応しいが、「田の神が（山の神となって）籠っている霊地」と観想されて来たのだろう。遅い雪解けを待って顔を出す地形であることからは、「田の神」の方が印象深かったのかもしれない。なお、この地は人間姿形の陰部を観想させる。山の神（女）と田の神（男）が入れ替わるという信仰は全国的に見られ、最も一般的な時期は旧暦の３月３日と云われている。



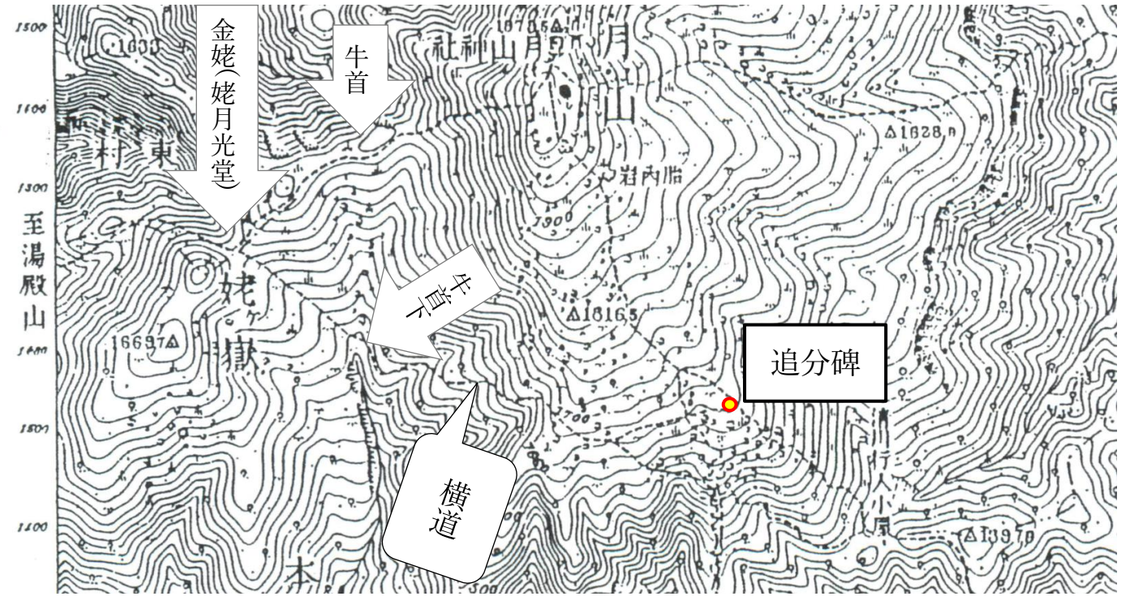
使われた横道／東西連絡古道

前記のとおり、古来、東西連絡道として使われて来た証の関連地図を並べて見た。

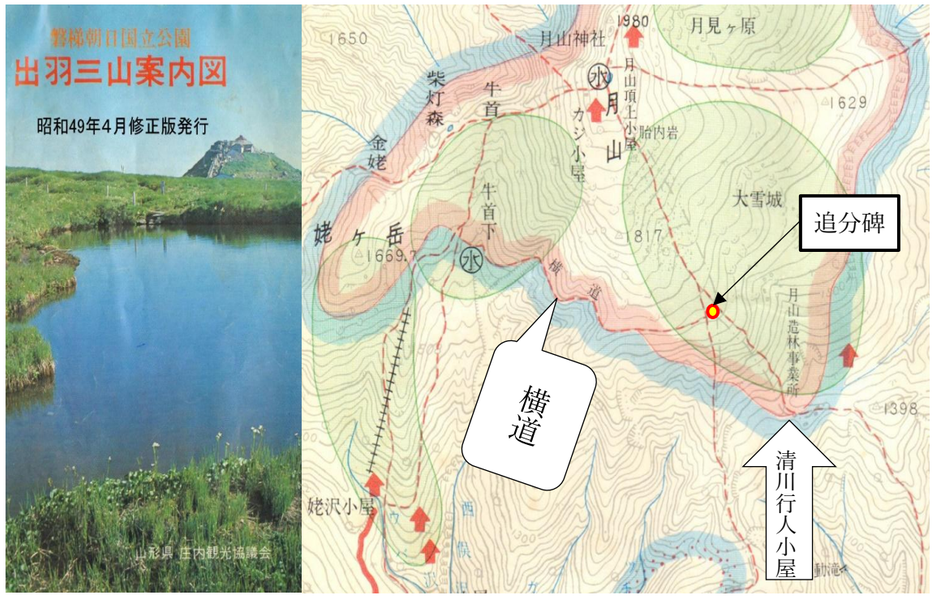


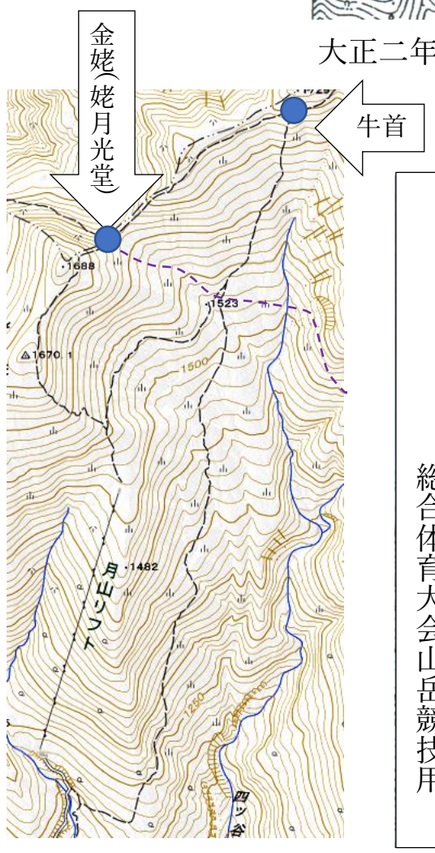
湯殿山論争絵図―寛政４（1792）年頃のもの
牛首と姥沢を直接繋ぐ道は、当時はなかったのか？

このように、昔から「横道」は重要なルートの一つであったのだが、近年は、歩かれなくなった。

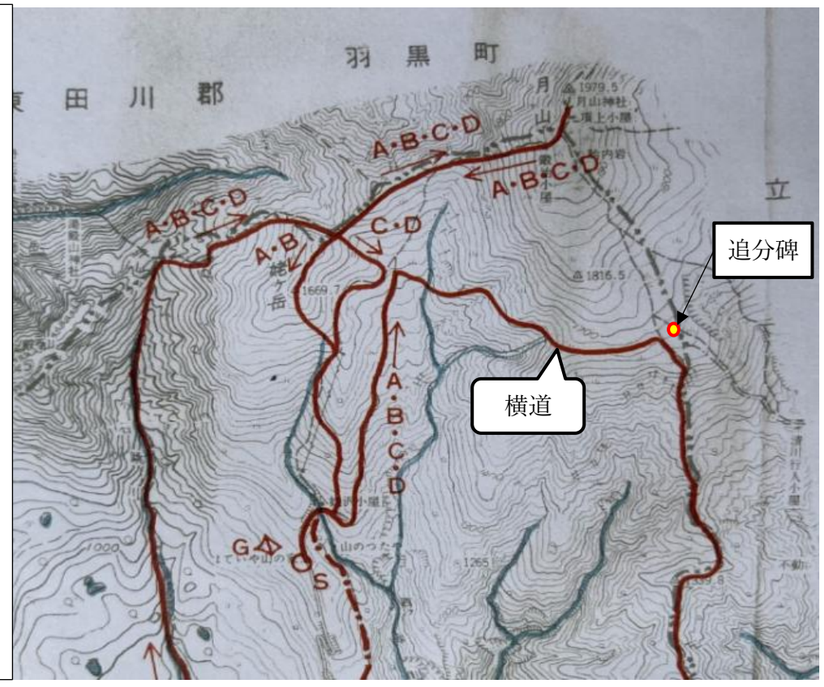


大正二年作成の国土地理院地形図、牛首と姥沢を直接繋ぐ道は当時はない。





昭和53（1978）年開催高校生第5回東北総合体育大会山岳競技用



第　II　部

不動滝と秘連古道

「烏川不動滝」と「秘連古道」

本件ものがたりの発端は、岩根沢旧日月寺側が旧本道寺側を相手に新庄藩・寺社奉行所へ訴えたことから始まる。烏川（からすがわ）（正式名称を銅山川、サカサ川ともいう）の上流部烏川不動滝と称する所を同旧日月寺を「奥の院」と定め「不動尊（不動明王）」を祀っていた。いわば、日月寺の関係者（修験者、先達、道者）だけが崇拝出来る特別の秘所地であると設定していた。ところが、隣接する本道寺口の関係者（寺・宿坊・先達等）は、「高清水通り」からその不動滝に、日月寺に無断でこっそりと連絡新道――いわば秘密裏の連絡道（裏ルート）を伐り開き、行者を案内して同不動尊を礼拝させ、賽銭を得て、案内料を徴収するなど、いわば、日月寺の権益を侵犯したと主張した。

そこで、その抑止のために日月寺が取った行動と対応関係を記録した寛政八(1796)年十月文書があることから紹介する。原文は、丸山茂著「神都　岩根澤之面影」・井場英雄著「岩根沢ものがたり」にあり、前者は日月寺から寺社奉行所へ、後者は日月寺から新庄藩へ差し出したと読み取れる－私は浅学に付き判断が付かない－が、いずれにしても、最終的には寺社奉行所から裁定のお達しが出た。

粗筋を簡単に平易な口語体にして見た。なお、同不動尊を奉る烏川不動滝の場所は昔から新庄藩（今は大蔵村南山地区）の土地であり、今も同村行政区域内である。

「烏川不動滝(不動尊)」は日月寺の「奥の院」であって、岩根沢別当のみが奉仕するものであるから、同所の祭祀権限・帰属を明らかにしたお墨付きを頂きたいという願書である。

・・・當御領主様御領分之烏川之儀ハ　當山湯殿山参詣往来ニテ　同所不動瀧拝所ノ儀　是迄余山ゟ参詣等無之　當山掛参拝所ニ御座候テ　烏川之儀ハ往古ヨリ幾百年来當寺ニテ支配仕来候　同宿夏中ハ小屋等相掛け　道者止宿等仕　猶又夏中道者ニ不寄　何者ト申事無之往来仕候間　番所相立置通路之者當寺より通判差出シ　相改之上相通申儀ニ御座候　其儀者山中當世乱暴之者入込ミ　立木毛猥(ミダ)りニ伐リ　不申候様相防申候然處當夏中ゟ**本道寺ニテ新道ヲ切開き　烏川不動瀧へ　本道寺山先達共道者致案内参詣仕候**儀ニ御座候・・・

（簡単意訳）

・・・貴藩新庄領内にある烏川に係る件のことです。恐れながら書面により謹んでお願い申し上げます。その烏川は当山（日月寺）の湯殿山参詣で往来しているエリアであります。その烏川の不動瀧という拝所について、これまで、他の山門（他の寺門）から参詣に来たことはなく、当山だけが係る（当山専属の）参拝所であります。本件（烏川に係ること）は、昔のその昔から当寺が支配し仕切って来ました。当寺関係宿坊は夏の期間中は小屋を掛け、道者を宿坊に泊めています。なお、この小屋掛けをする夏季期間中は、寺門差配の道者に限らず他の者も往来させ、参詣者が往来している間は、監視番所（切手改所）を置いています。そこを通行するものは、当寺発行の通行手形を差出して、相改めの上（調べて）通行を許している現状にあります。その状況下、このところ、この山中に乱暴者（狼藉者）が入り込み、立ち木等を猥（みだり）に伐採し、かつ、その状況をしゃべらないように口止めしているようであります。しかる処は、この夏より**本道寺において、無断で秘密裏に新道を切り開き、烏川不動瀧へ、本道寺山先達共が道者（行者）を案内し参詣させている**ことであります。・・・

そのような経緯があり、１年後、次のような寺社奉行所の判断とそのお達しを以って「烏川不動滝・同不動尊」は日月寺の「奥の院」として公的に確認・認知されたものである。

（原文）

新庄領　銅山續（続き）不動院瀧之儀　古来ヨリ貴寺奥院ニ致シ　参詣彼致候處　近年脇ゟ新道付ケ参詣先達等致候ニ付 貴寺願之趣尤之事に御座候間　往古ゟノ譯（役）方掟ト致候事毛不相聞（不聞相）候ニ付　篤ト致吟味候處右瀧ハ一筋道ニテ當領分ニ無相違候間　往古ゟノ通リ貴寺支配ニ不苦候ヘバ　得其意候　　以上

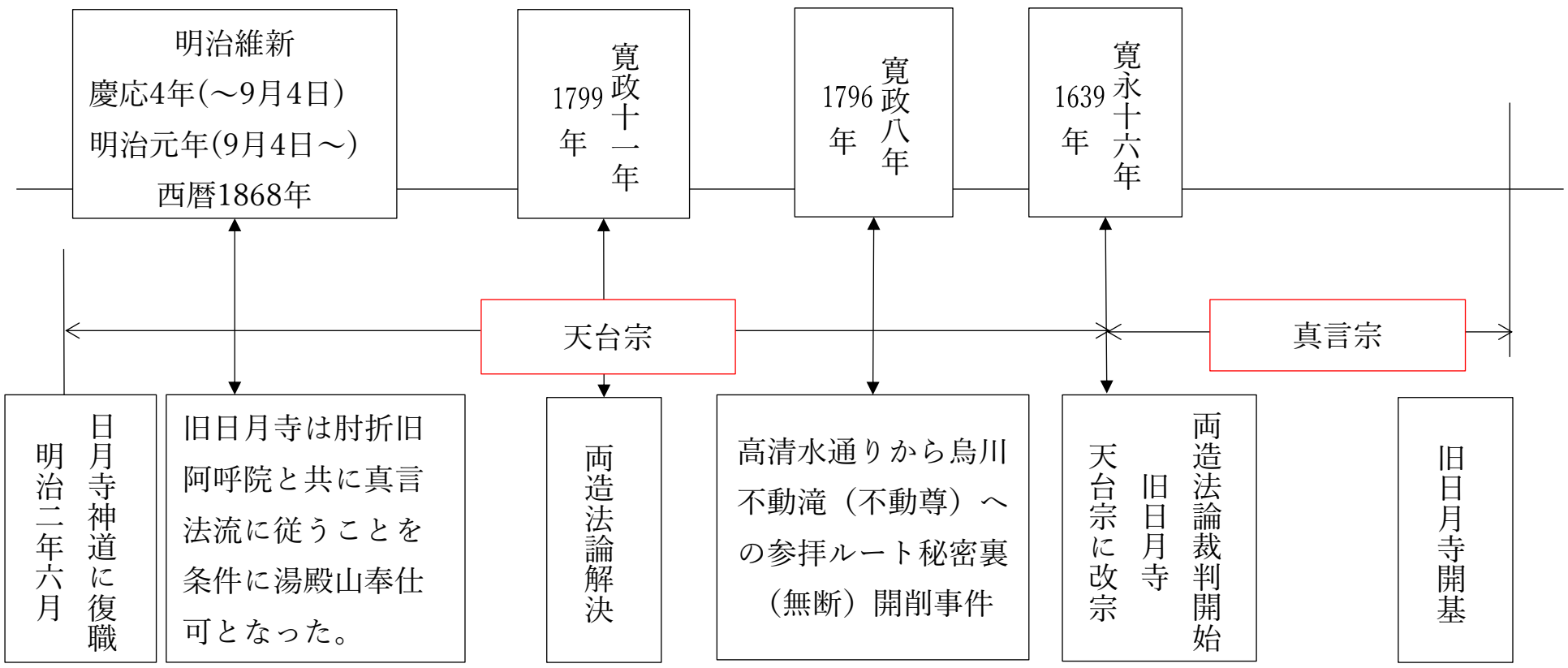
寛政九巳(1797)年十月　　井関蔵之助　（寺杜奉行係）

（簡単意訳）

新庄領に在って銅山川の上流にある不動院瀧に係る本件について、昔から貴寺奥の院に属し、参詣させていたことについては了解した。近年脇より新道を開削し、参詣を案内する先達等がおり、貴寺から願い出された懸念の趣意はもっともな事である。昔からの役所規則の有無は聞いていないことから、あらためて、特別・念入りに調査・検討した。その結果、その本件不動瀧に行く道は一本道で当領分内にあることは間違いない。よって、昔から対応して来たとおり、貴寺が支配・監理することに支障・問題はなく、この上申どおりにされたい。　　以上

そこで、私の関心は、しからば、今となって、旧日月寺の奥の院と称して不動尊を崇め祀った烏川不動滝とはどこか？　どれほど素晴らしい所なのか？　他に類を見ない特別の秘所・霊地なのか？　さらには、そこに至るように秘密裏に切り開いた連絡道とはどこを通したのだろうか？　　探査の結果を次頁以降に記載する。

参考的に記述する。本滝に至る道者・宿坊・先達を統制・総括した旧日月寺の開基時は真言宗、途中で天台宗に改宗したという特異な面を持つとされることから、丸山茂著「岩根澤の面影」を参考に要点を整理して見た。同書81頁に「両造法論が終結して公に湯殿山奉仕権を認められてから山号を（日月寺は）湯殿山と称したのであった。」とある。



烏川不動滝（位置）

緑色・赤色トラックログ
2023(R5)年10月12日(木)実査

「高清水小屋」跡
九十六丁(石)
「元高清水」

「清川行人小屋

「秘連古道」

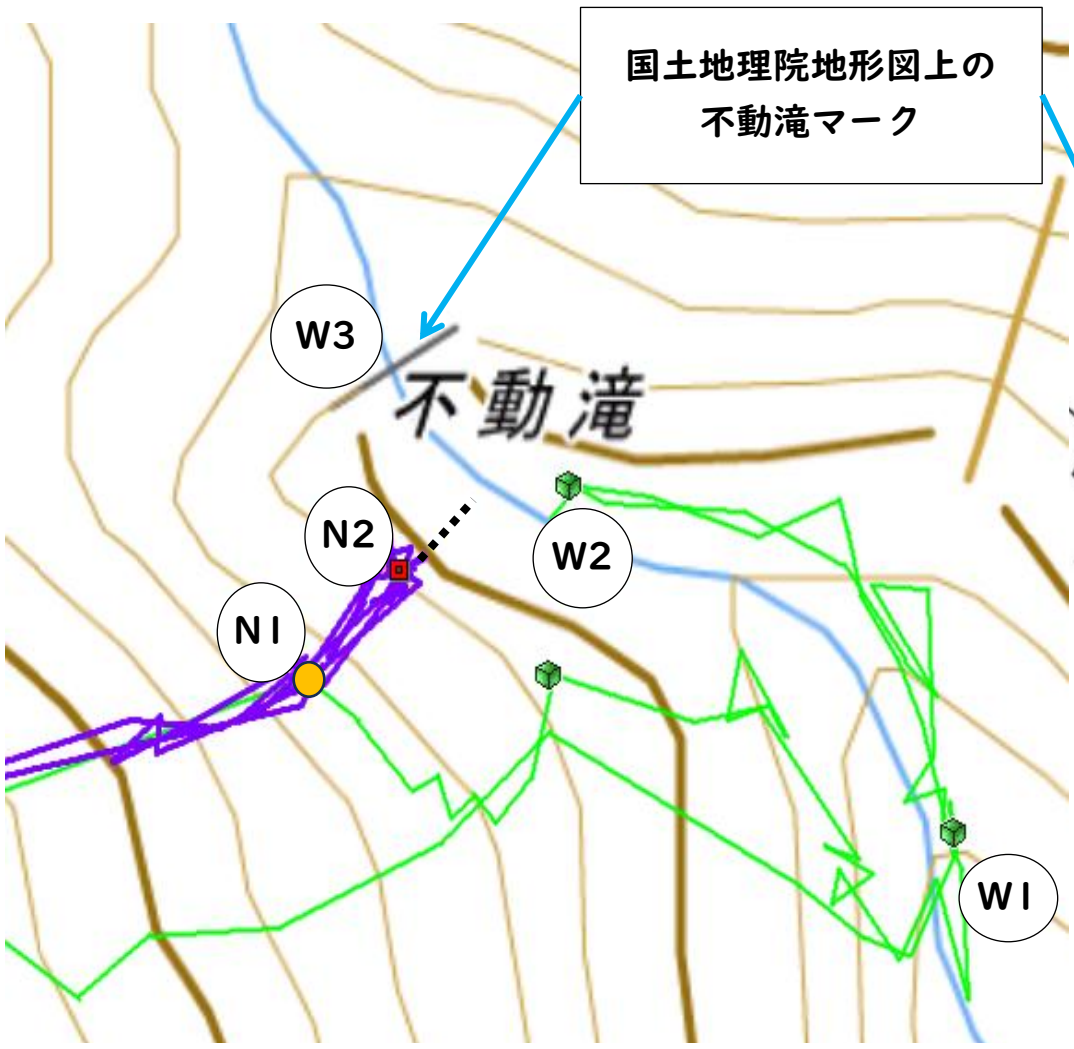
W3 上
W2 中
W1 下

「烏川行人小屋」跡

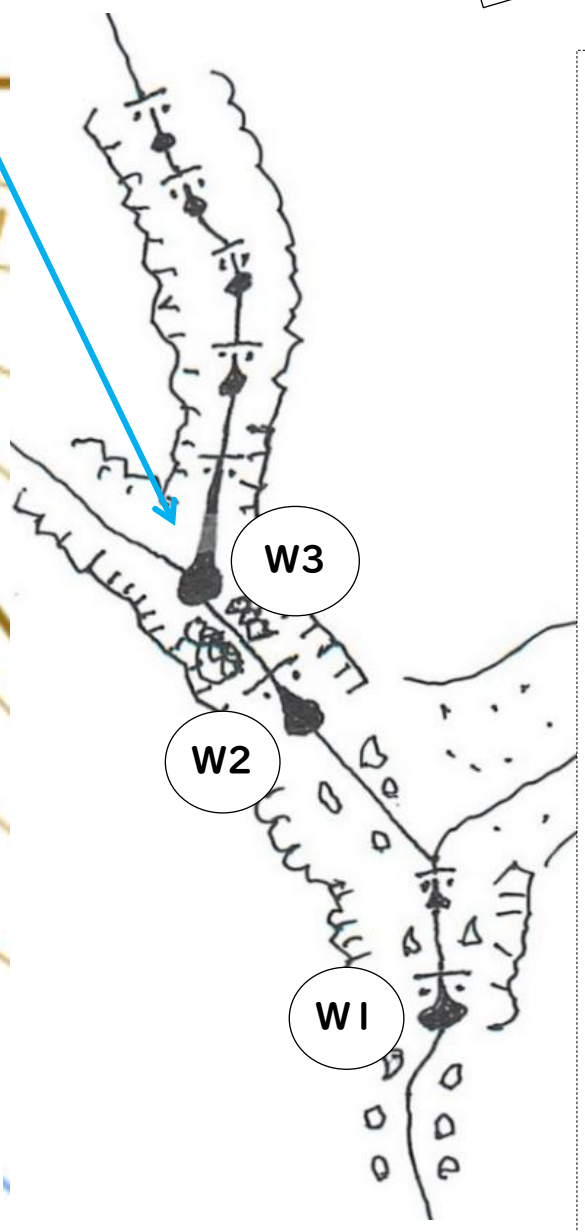
烏川不動滝
（不動尊）

昔のルート02

昔のルート01

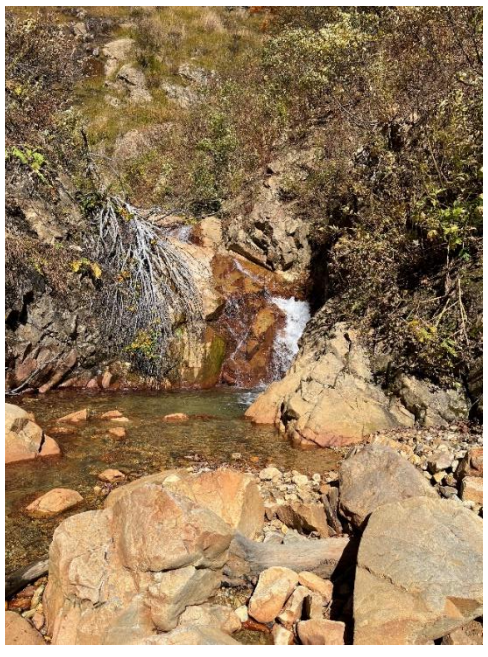
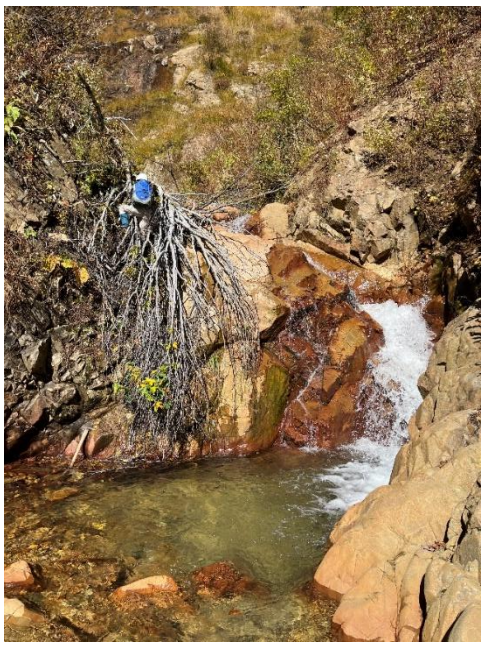
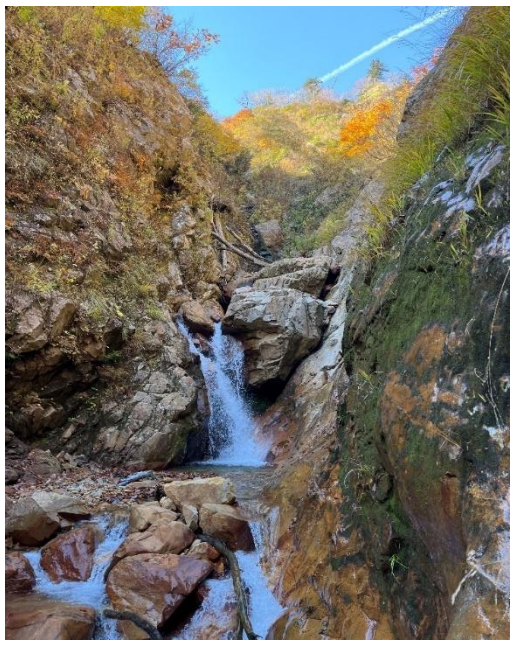


緑色トラックログ；2023(R5)年11月１日(水)実査
紫色トラックログ；2023(R5)年11月９日(木)実査

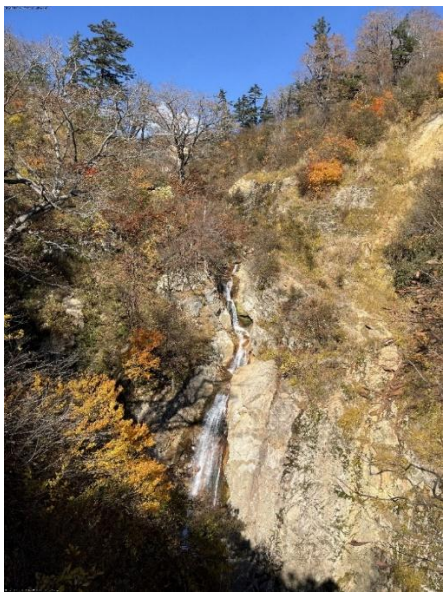
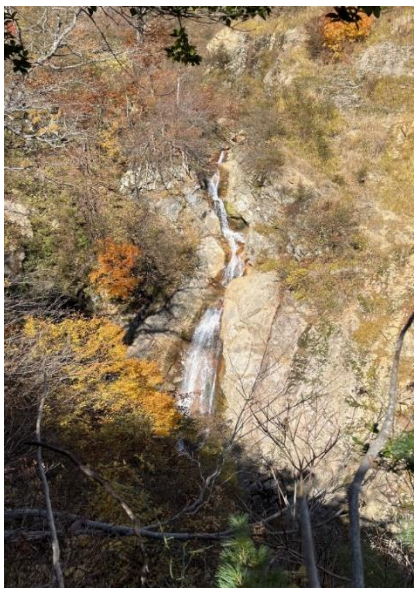
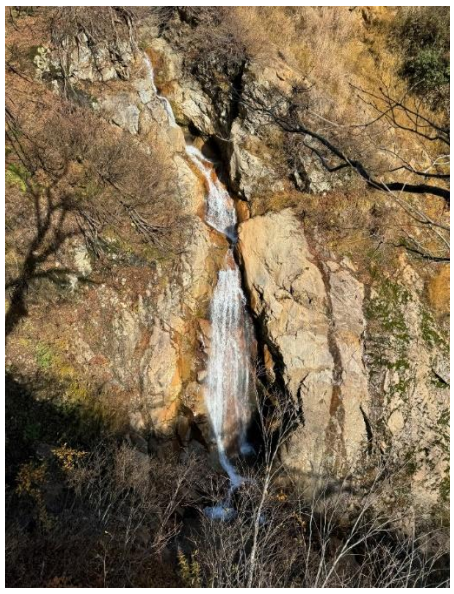
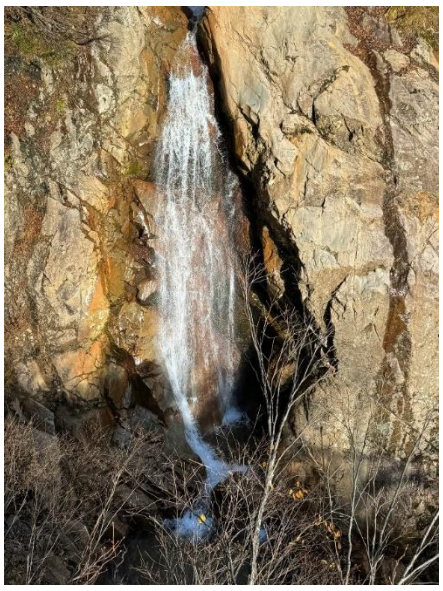


一般的な「烏川不動滝」とは１０段くらいの全体を指すだろうが、象徴点は国土地理院地形図上の不動滝マークの所を指す。
果たして、問題は「不動尊（不動明王）」を崇め祀ったとされる「烏川不動滝」とはどこを指したのか？

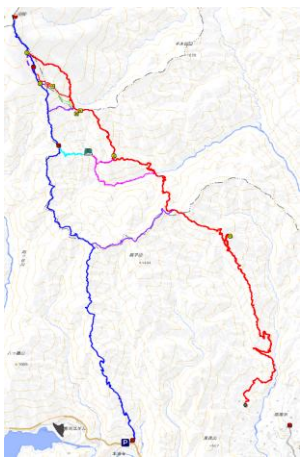
烏川不動滝（現況）

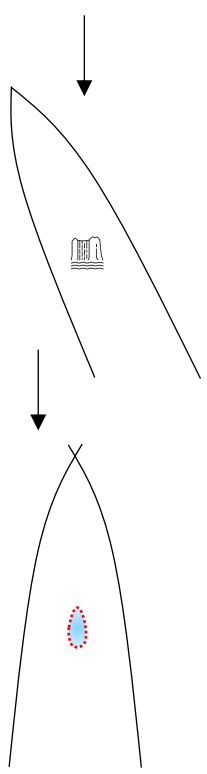




Ｗ１　　Ｗ２

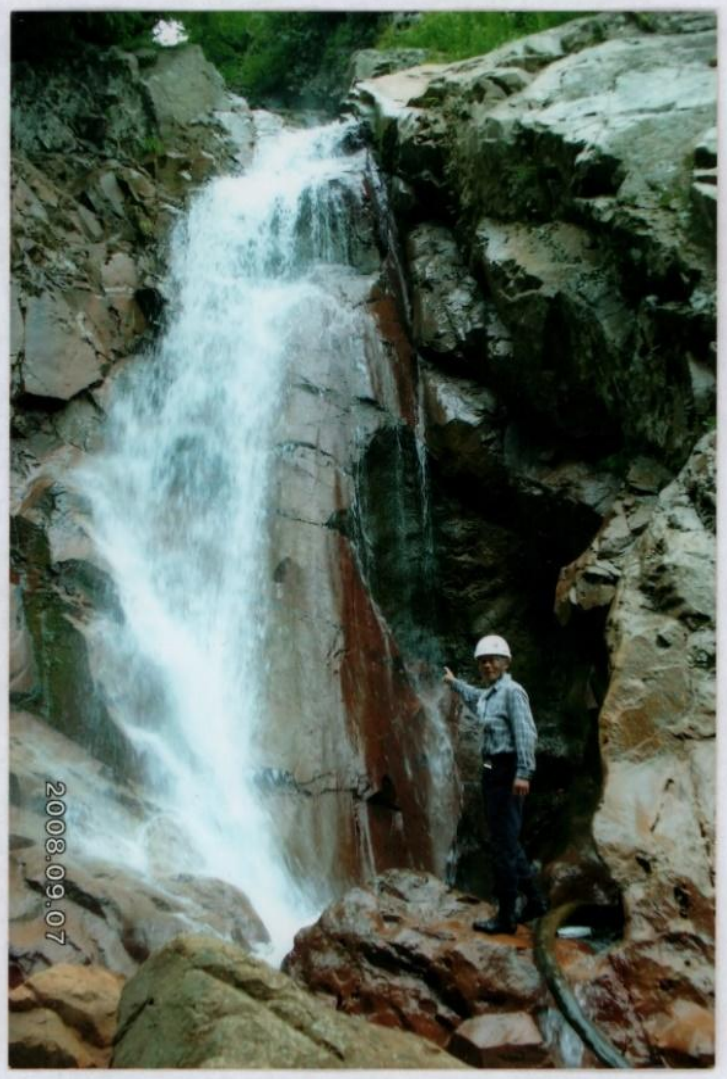
Ｎ１から遥拝のＷ３　　Ｎ２から遥拝のＷ３

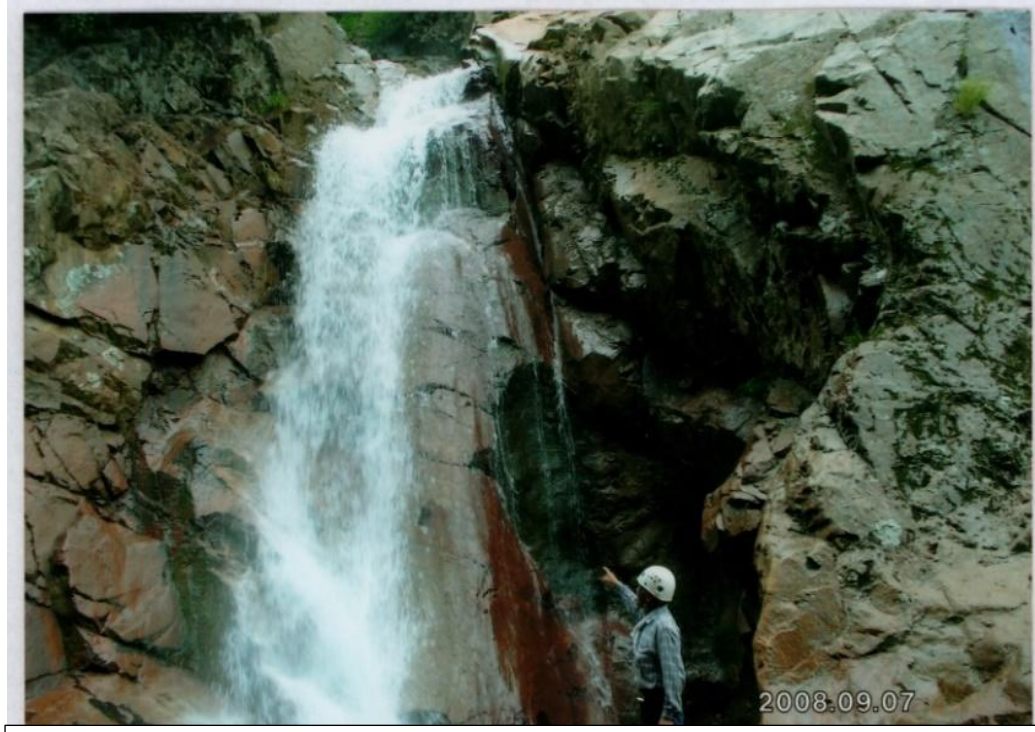


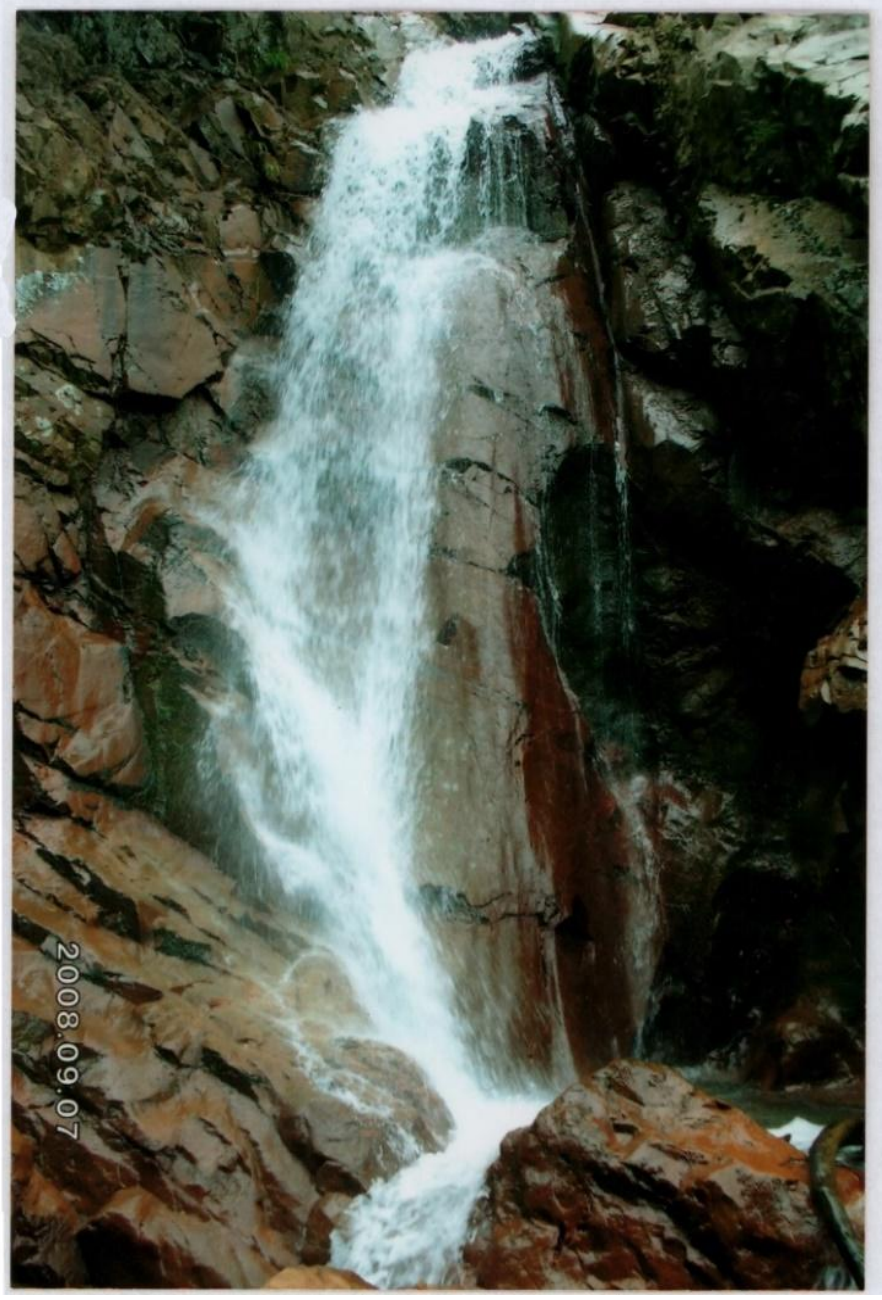


「烏川不動滝」探検勇者

とうの前に、烏川を遡上し、ここに立入り、さらに上流に進み、清川行人小屋まで上り詰めた勇者がいたのだ。　（しかし、Ｔ・Ｋ－ friends の仲間はここＷ３には到達していないのである。）



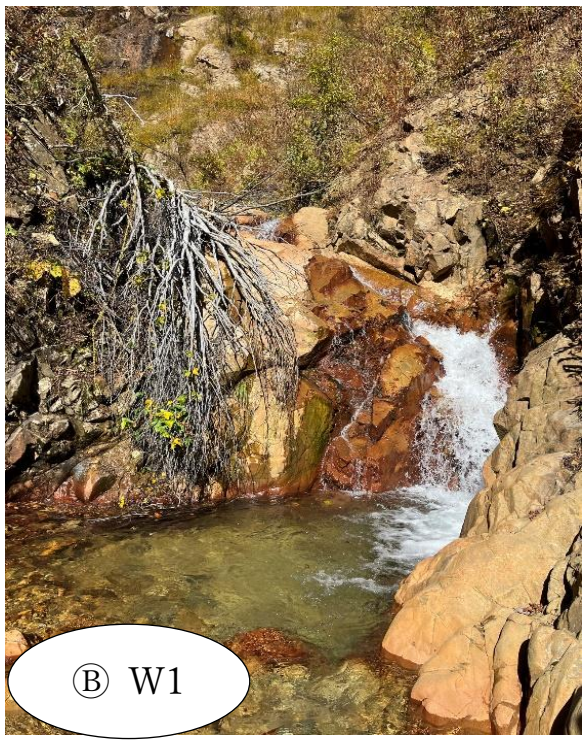


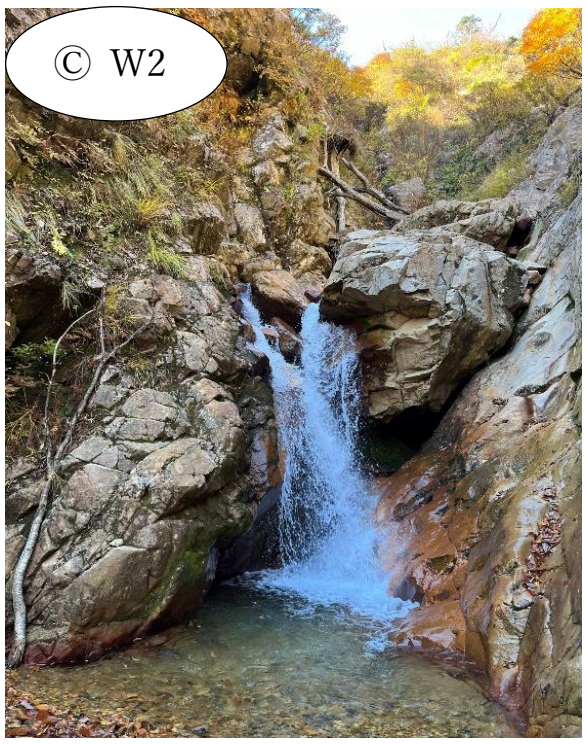


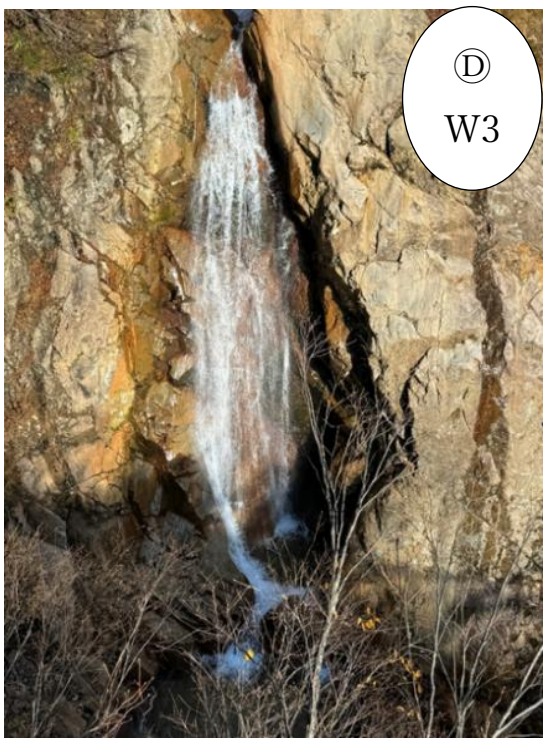
Ⓐ撮影日は2008(H20)年９月７日、佐藤辰彦さんが撮影、写真人物は布施昭太郎さん。写真は前記W3地点の滝　(昭太郎さんから提供)

右下写真を見ると、頭に頭巾を乗せ少し舌を出し、両腕を広げたこわい人間模様、あるいは、神職の装束を纏ったこわい形相の不動尊のようにも見える、見方様々・・・。　これが古来旧日月寺奥の院として崇め祀って来た不動尊なのかもしれない、これだろうと確信に至っている。

「烏川不動滝」様々







Ⓑ
W1

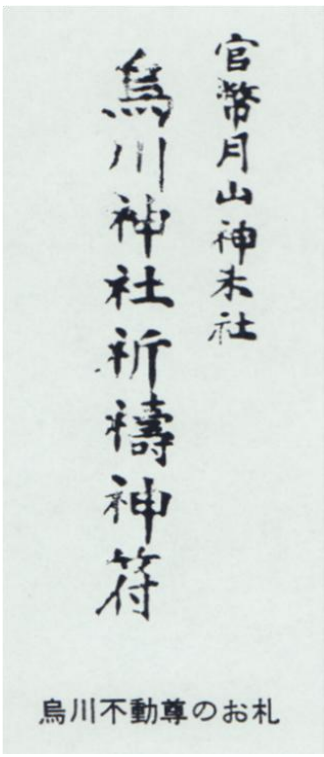
2023（R5）年10月11日(水) 阿部剛士が、同年10月12日(木) 片倉忠幸・松田秀孝・大沼香の3人が**折り返した地点**である。（烏川遡上時突き当りの小瀑布）

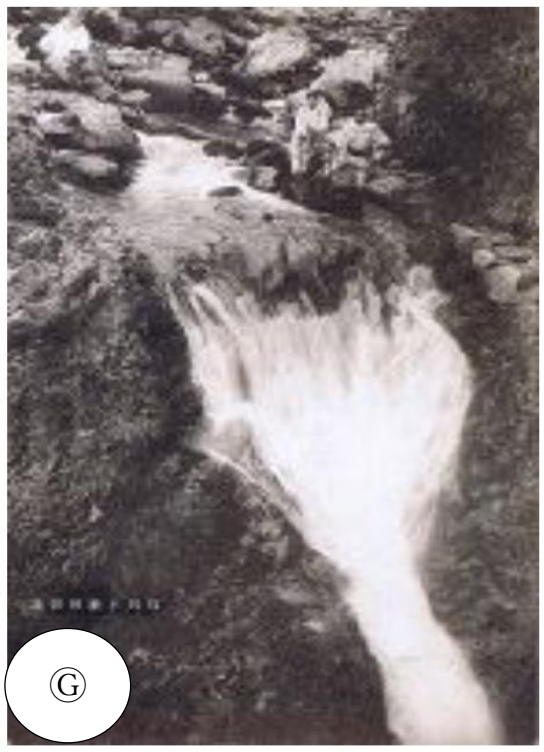
Ⓒ
W2

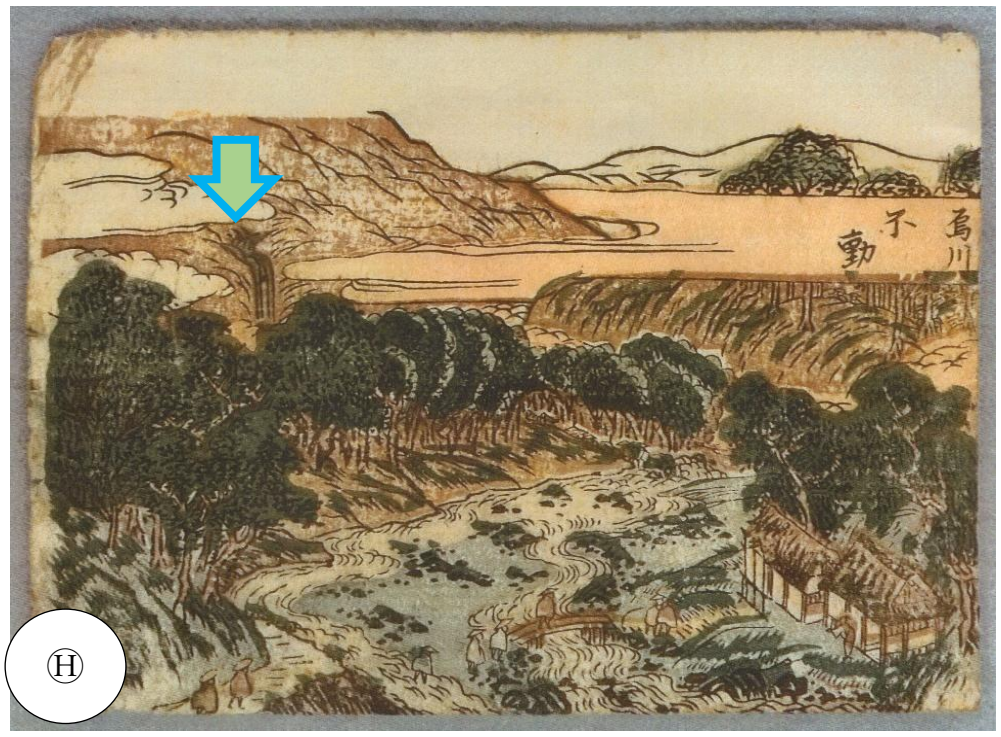
2023（R5）年11月1日（水）宮林良幸・阿部剛士・大沼香の3人が探査時に**折り返し地点**、Ⓔと同じ滝であろう。

Ⓔ

Ⓕ







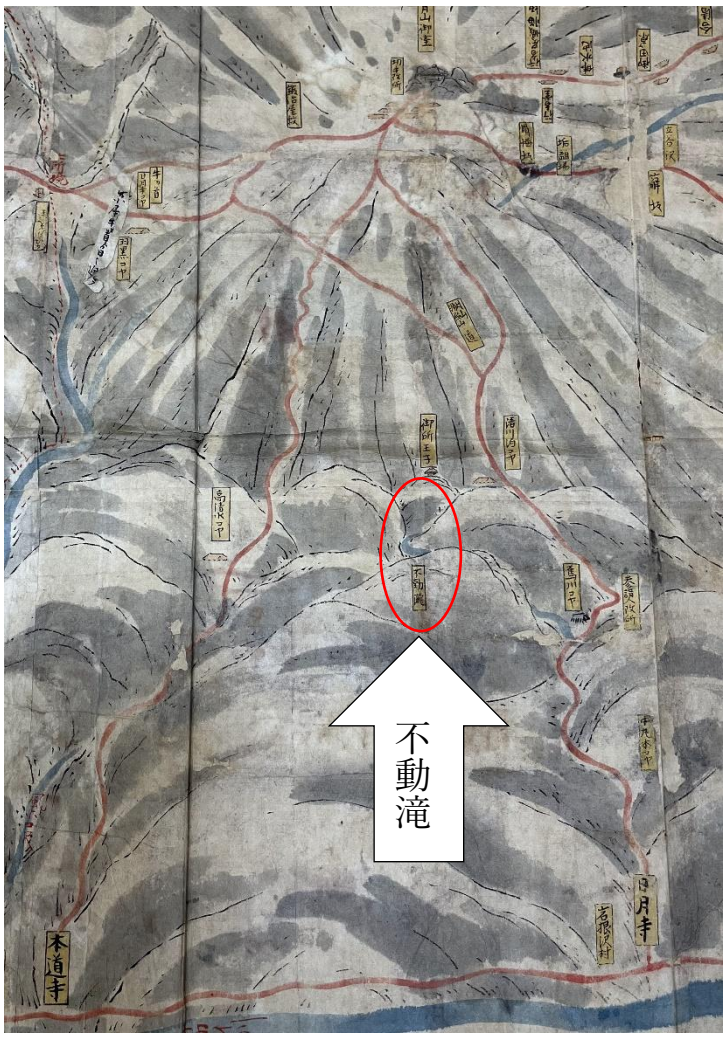
ⒹW3　2023(R5)年11月９日(木)、大沼がN2から上空目線で撮影したもの。

Ⓔ・Ⓕ　井場英雄著「岩根沢ものがたり」に掲載されているもの。

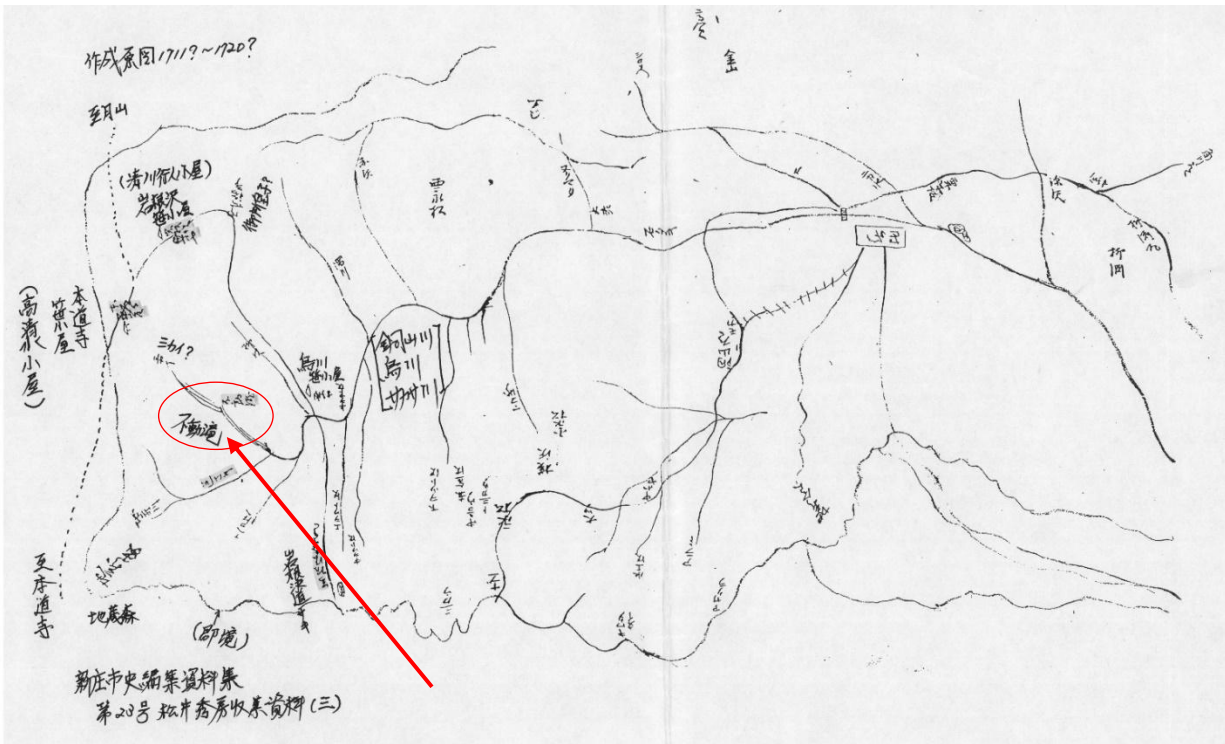
Ⓖ　ネット月山・朝日やまだより(清川仙人会)に「烏川不動滝」と掲載されているもの。

Ⓗ　郷土画家「義川」の版画－「烏川　不動」より拝借したものにも描かれている。

昔から注目された「烏川不動滝」

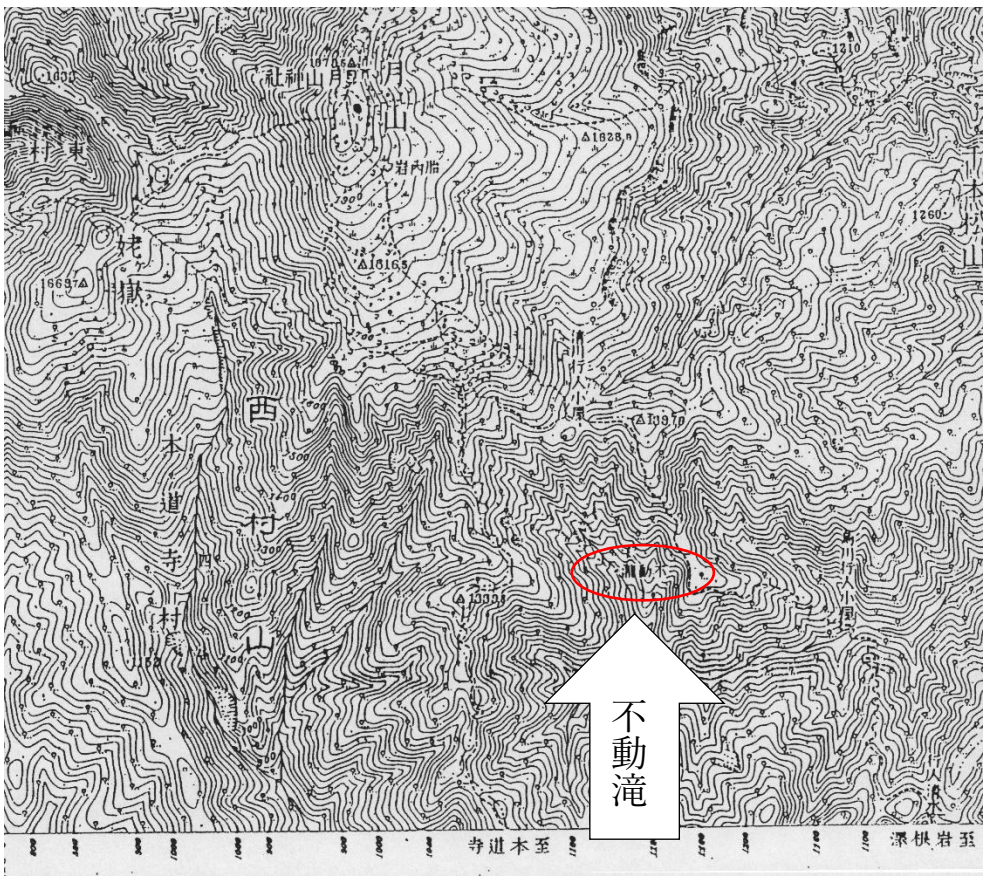


両造法論争関連古絵図―寛政４（1792）年頃のもの

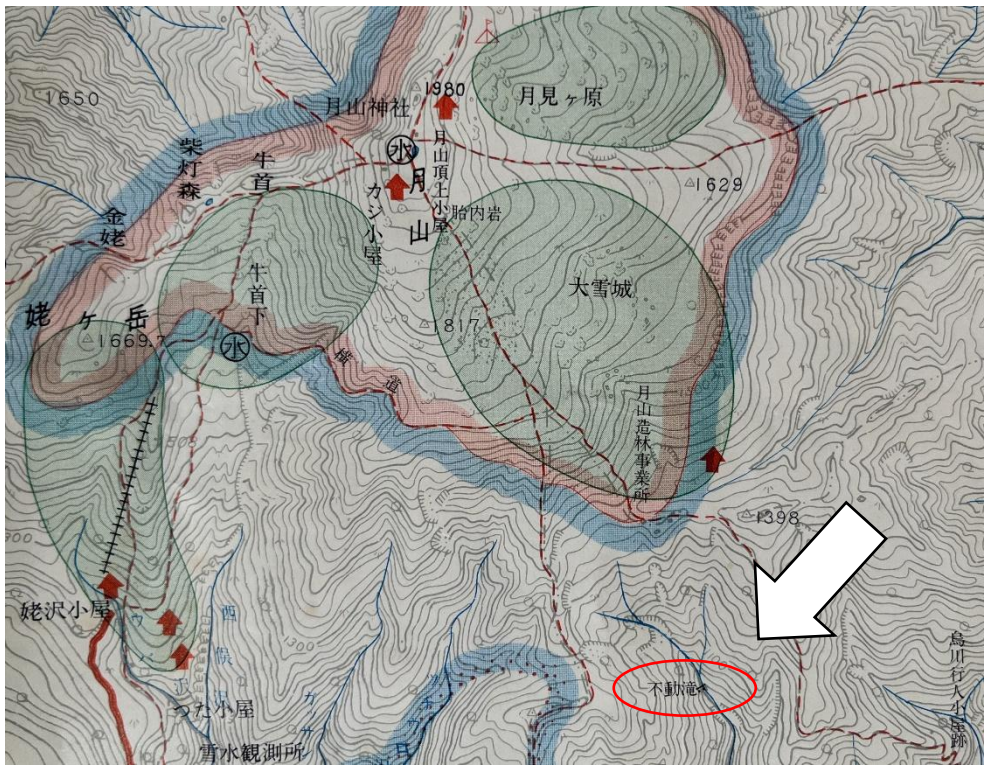


新庄市史編集資料集第 23 号／鉱山開発関連古絵図
（1711 年－宝永８年・正徳元年－より後のものか？）

この烏川不動滝は、今回の調査を踏まえてクローズアップさせたものではない、古来、信仰面・宗教界、鉱山開発関係者から熱い注目を集めて来た名瀑なのである。それを裏付ける歴史の一つに、後記のとおりに本滝を巡っての「秘連古道」騒動がある。



大正二（1913）年一月二十五日印刷、国土地理院地形図



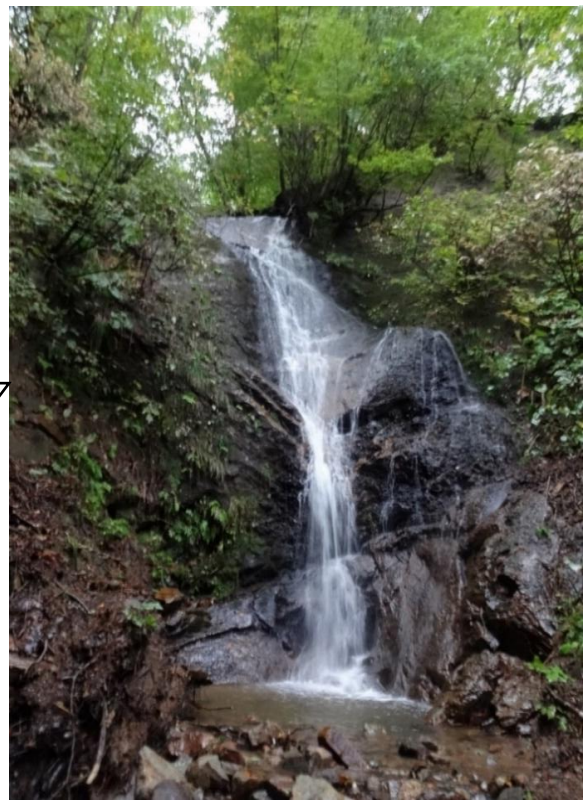
昭和 49 年４月発行出羽三山案内図より抜粋

出羽三山聖水信仰三大滝行場

三山それぞれには行場とする滝は他にも存在した（する）が、羽黒山については阿久谷の滝、湯殿山について仙人沢御滝を代表格とすれば、月山はどうだったのか。烏川不動滝を対応させたい、能徐太子も空海もここを中間修行地としたのではなかろうか？　同時滝行？

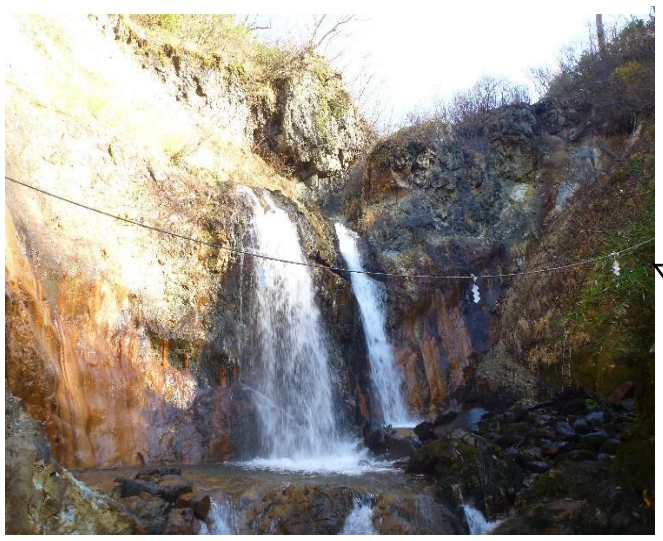
（羽黒山）阿久谷

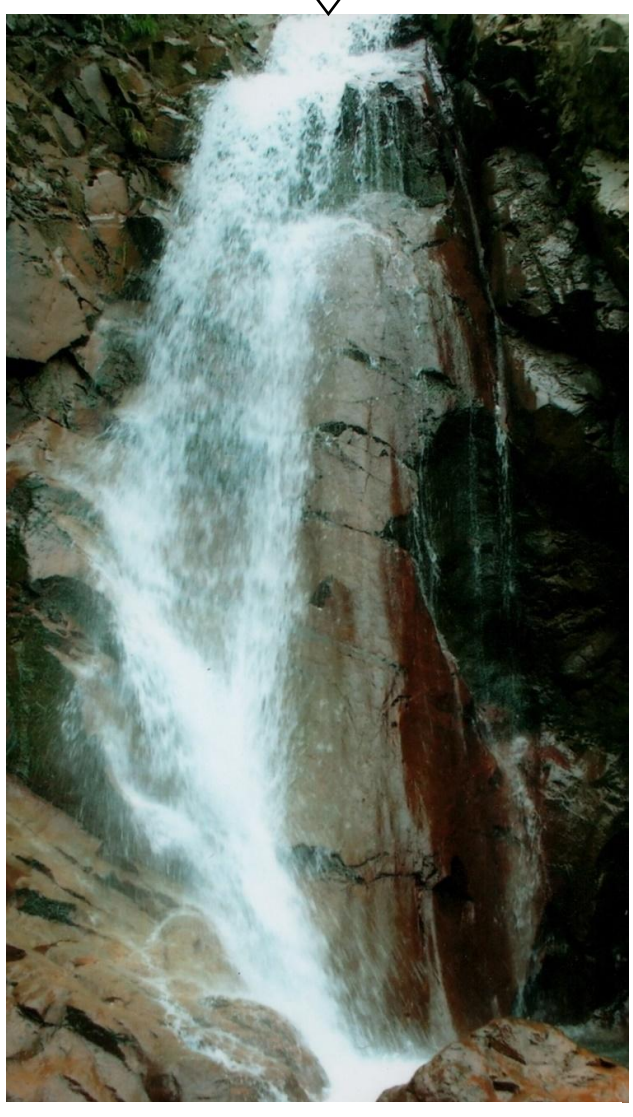
能徐太子修行の地



（湯殿山）仙人沢御滝

空海修行の地





（月山）烏川不動滝

空海修行の地？

能徐太子修行の地？

共に修行か？

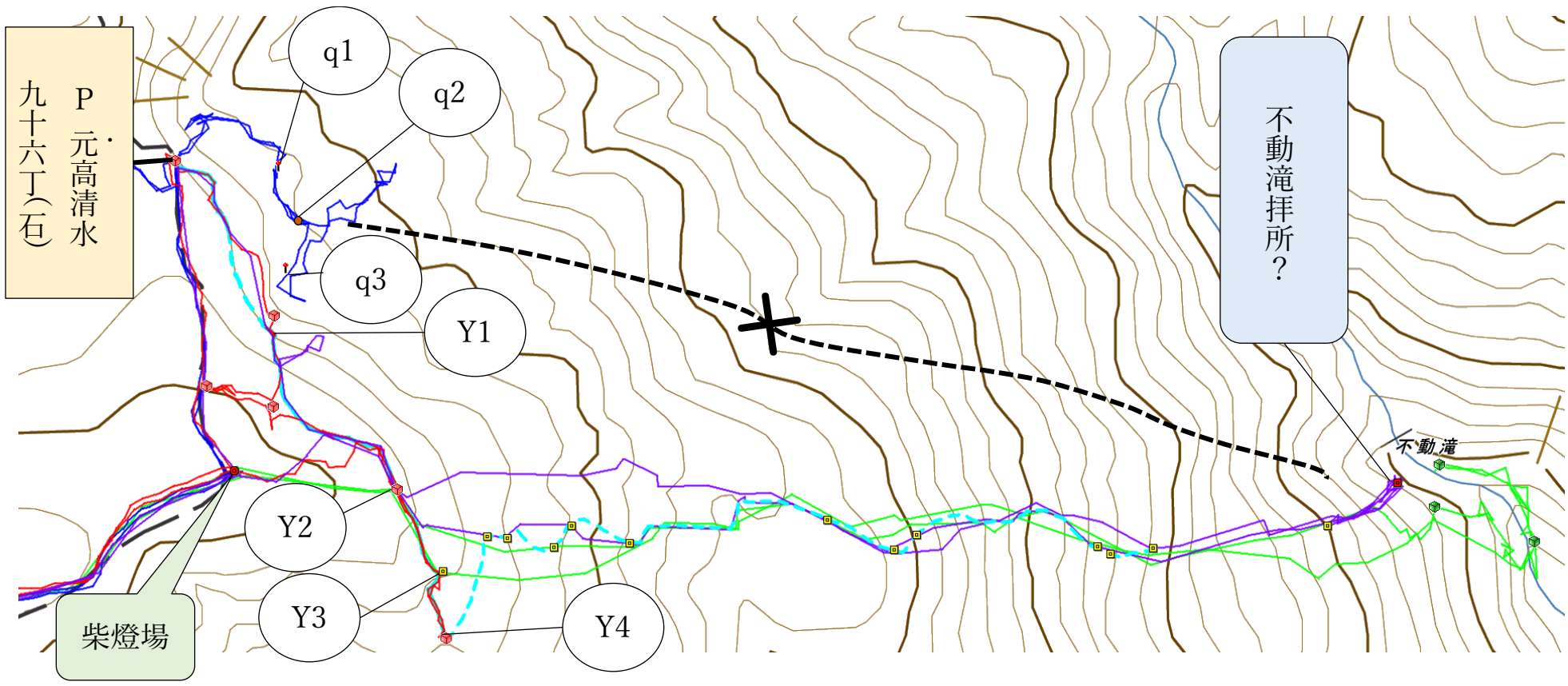
もちろん、空海と能徐太子が一緒に修行したということはあり得ないかもしれない。しかし、過去のことであり、可能性ゼロとは言えない。これほどの異様さを誇ったのであれば、空想（物語創作）も面白いではないか。

［結論］烏川不動滝に祭ったと云われて来た不動尊は、夏の開山期間のみ、不動明王を里から背負って置いたという想定もあったが、前記 P37 写真と P38Ⓕを合わせ考察すると、W3 滝そのものに現れた自然造形を不動尊と見なしていたのかもしれない。

「秘連古道」探査

「高清水通り」から「烏川不動滝」に向けて、秘密裏の連絡道を伐り開き、行者を案内したとされる古道について、**秘密裏に開削した連絡古道を以下「秘連古道（秘連古道）」と称して調査した。なお、“秘連”は“悲恋”――求めた恋（求めた願い）は長く続かなかった――に重ねている。**

・トラックログ凡例；青色＝2022(R4)/11/26(土)宮林・大沼、**緑色＝2023(R5)/11/1(水)宮林・阿部・大沼**、赤色＝2023(R5)/11/3(金)大沼、紫色＝2023(R5)/11/9(木)大沼の探査足跡



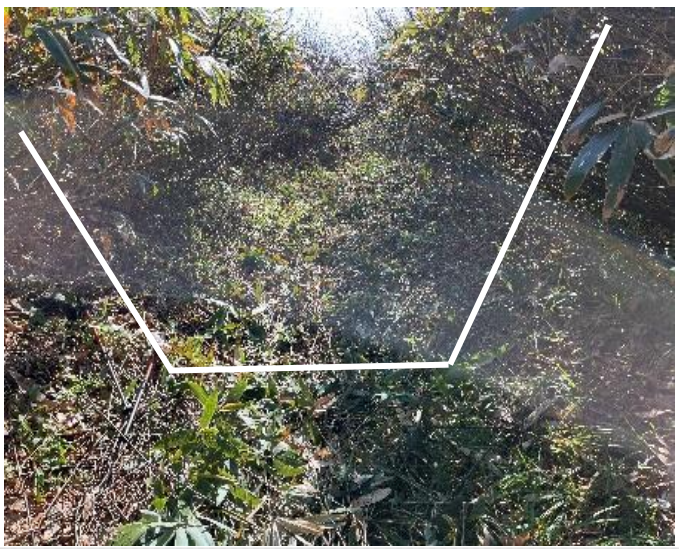
水色の実線は実査した秘連古道筋、水色点線は同古道の想定ルートを表す。

烏川不動滝を求めて、柴燈場から藪漕ぎ直下のルートを取った際に、この古道を偶然発見したものである。まったく、予想外の偶然の出来事に驚いた。（この直下ルートに入らなければ発見不可）　当初は、秘連古道は「高清水小屋」から一気に烏川に下るルート（×印点線）を想定したがそれは外れた。

Y2付近に古い切り株

Y3付近に古い切り株

Y2から北方を望む

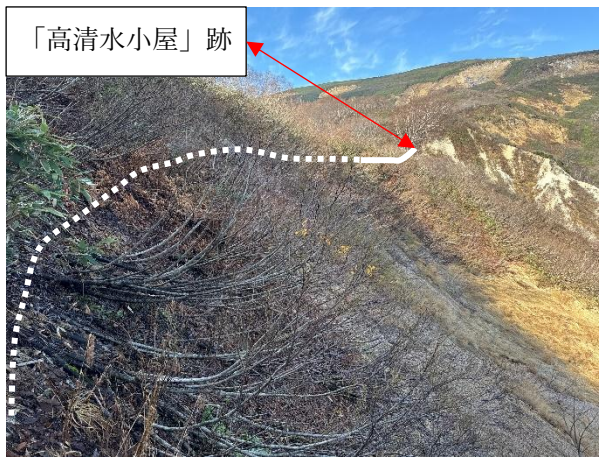


Y3から南方を望む

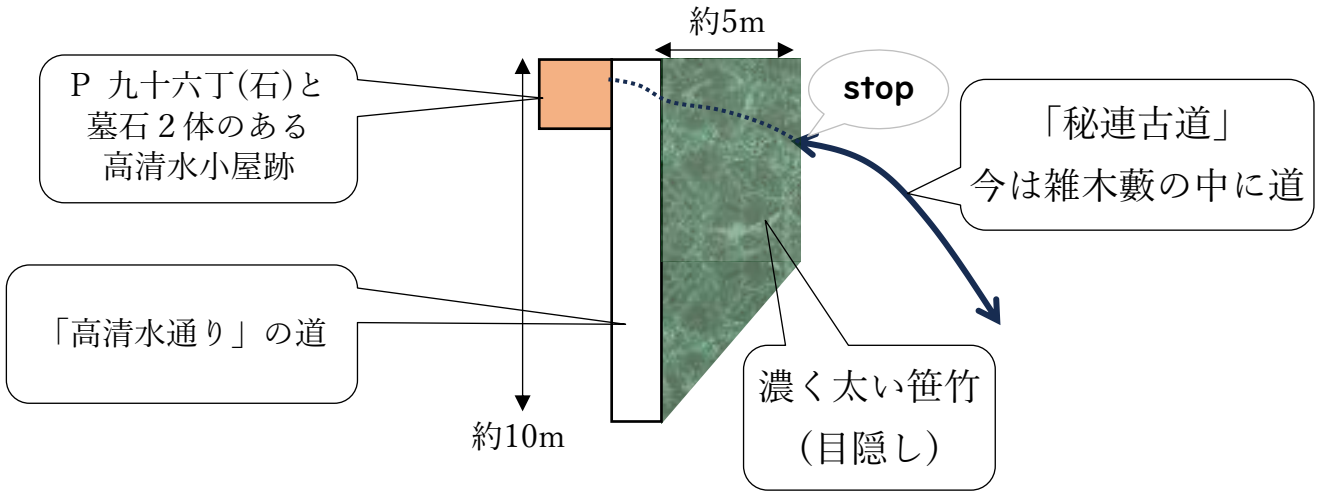
上のトラックログ（水色）上の所々にこのような人工開削道型があることと、古い切り株が点在していることを突き止めた。

同古道は、不動滝参詣行者だけを案内誘導するための道ではなく、鉱山開発関係者も歩いた道である可能性大なるものがある。山師（鉱山師）や鉱夫も行き来し、活用した秘密裏の裏街道であったのだ。

下図－Ａルート

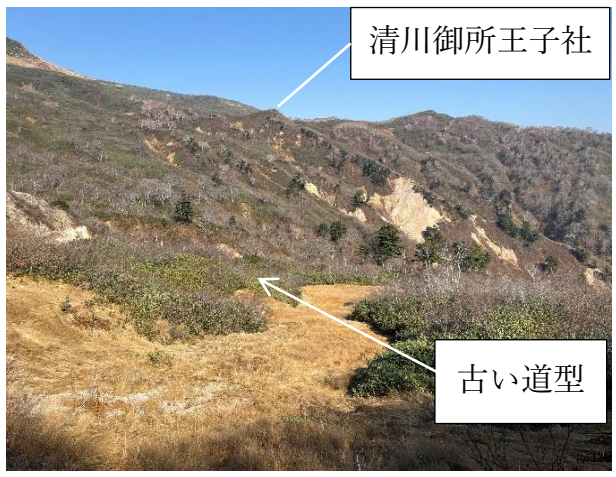


Ｙ１から北北西方を望む



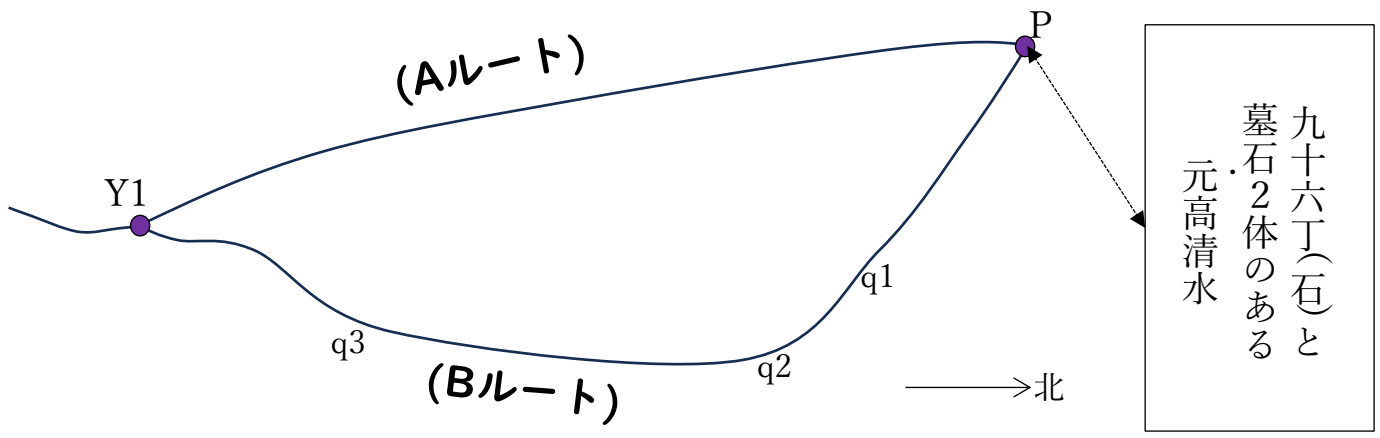
下図－Ｂルート

Ｙ１から北方を望む



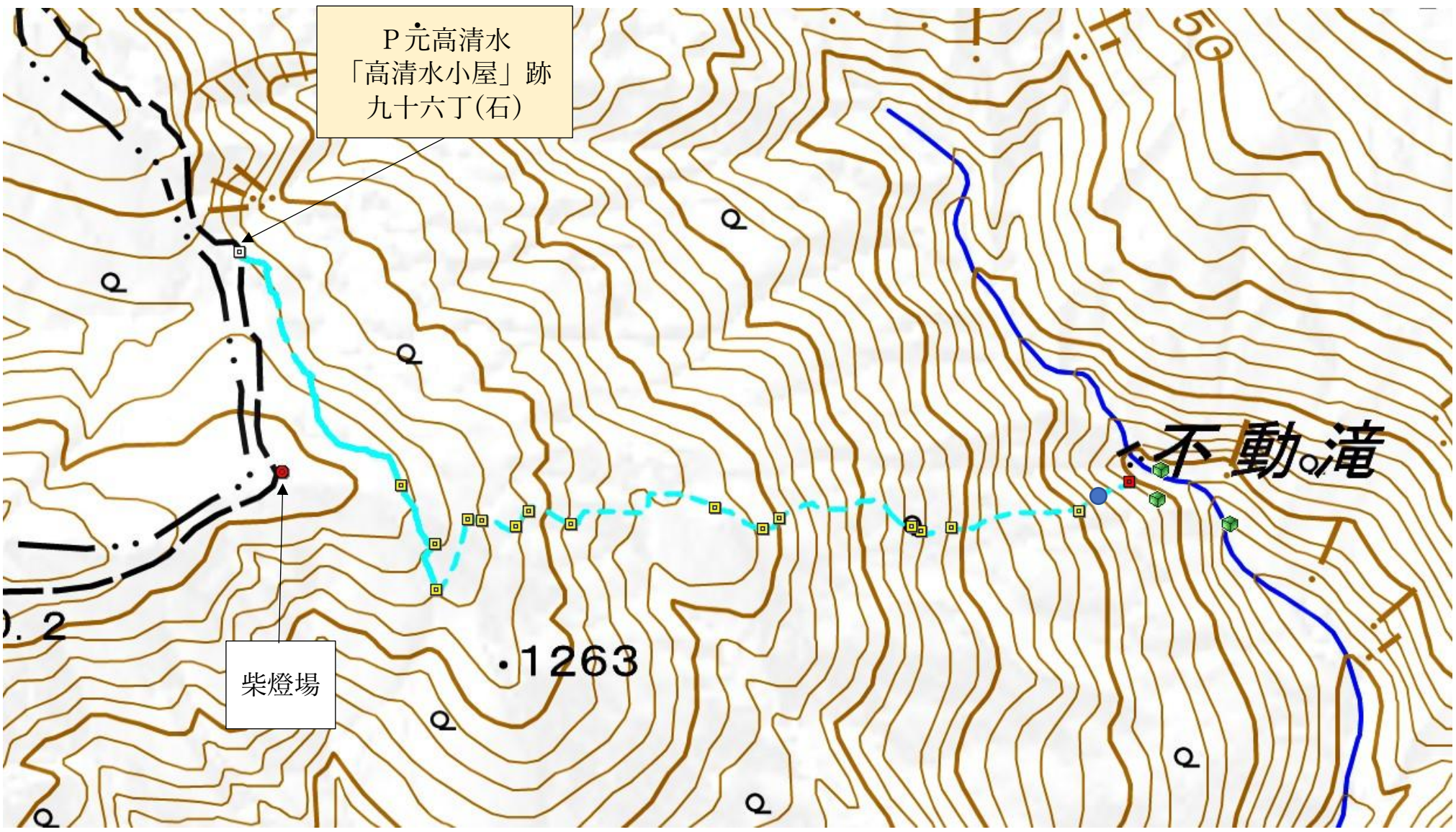
高清水通りの下り、北から南を望む

この道の末端は下図のとおり、人工的削平加工地になっており、烏川不動滝（不動尊）の遥拝者集合の地だったのではないか。その下方約30m先ブナの当りに行くと不動滝が見えるようになる。



左図は断面である、「高清水小屋」（元高清水）から烏川不動滝に至る山道はＡ・Ｂの２ルートがあり、前者は主に行者が、後者は山師が主に利用したのではなかったのか。

- **秘連古道筋には、所々に明らかに人工的に造成した幅１m超のＵ字状道型が明瞭に残存**している。笹竹を借り払った後の道の状況を観察すると、**その道幅内には樹木は生えておらず、しっかり踏み溜められた状態で残っている。**長い間、延べ多くの人が入った状況にある、数年で廃道化した道ではないだろう。
- 古い切株は道の際にあって向きは明らかに中央部に向いており、対歩行者支障木除去処理の跡である、焚き木用に伐木・伐採が行われたとすれば、付近一帯に切り株は多数あってもいいはずですが、そんな様相はまったくない。筍採りで散発的に切るなどということは無意味で有り得ない。
- それらの状況からして、**無断開削騒動が表沙汰なる以前から、そして収束後も、こっそりと行者や山師が、その不動滝を目指して、あるいは鉱石を求めてかなり入ったのではないか。**
- **往時、江戸幕府まで巻き込んであれだけ大騒動を起こした烏川不動滝遥拝所に至る「秘連古道」を突き止めたこは、誠に意義深いものとなった。**



上図の水色（実線＋点線）ルートは、下図グーグルアース地図の白色ルートにほぼ対応すると思われる。この秘連古道は、再掲するが**2023(R5)年11月1日(水)宮林良幸・阿部剛士・大沼が、柴燈場から不動滝探査のために道なき道を藪漕ぎしながら往復した時に、偶然に発見したものである。**こんな雑木林の中に人が切り開いた古道があるとは想像し難い。上の四角マークは、前41頁のとおりの古い道型や古い切り株を確認した地点である。ルートは想定を含むことからは、今後、細部調査する計画である。

〖しめくくり〗

１．本件成果の特徴を列挙

仲間の協力を賜り、７月31日(月)に着手し、11月9日(木)までの４か月足らず（３か月少々）の短期間で一通りの調査を終えることが出来ました。「はじめに」に記述したことのみならず、その後においても**2024(令和６)年12月現時点まで、「高・清フレンドリー古道」域に係り本調査に勝る史蹟調査とその文書化と公表・公開は、どなた様も成されていないと思います。**

この清川道に係る記述としては、井場さんの著書発行の昭和51（1976）年依頼、47年振りの出来事となりました。前記報告のとおり、新情報を付加し新しい頁を開いたことと思い、率直に申して矜持とする処であります。

２．今後の新展開を大いに期待

Ｔ・Ｋ－Friendsはここまで掘り下げましたが、素人の域でありまだまだ不十分であります。深堀りに値する大きな余地が残っています。

体力のある若い研究者にエールを贈りたいと思っています。この高・清フレンドリー古道エリアを、新たな視点で解体・解剖・解明を図り、隠れた魅力を引き出して欲しい。本域、ひいては出羽三山全体の観光資源拡充に資する新しいステージに引上げて欲しいと願うものであります。今後の新展開に大いなる期待をかけるものであります。

・先行研究の諸書は閉じろ！
・デスクワーク・机上論の文献知に溺れるな！
・現地に肉眼のサーチライトを当てよ！
・三現智（現場・現物・現実、so　知行合一）で深化実践！
・真白なキャンバスに自らが書け（描け）！

３．課題と提案

（１）今後の課題

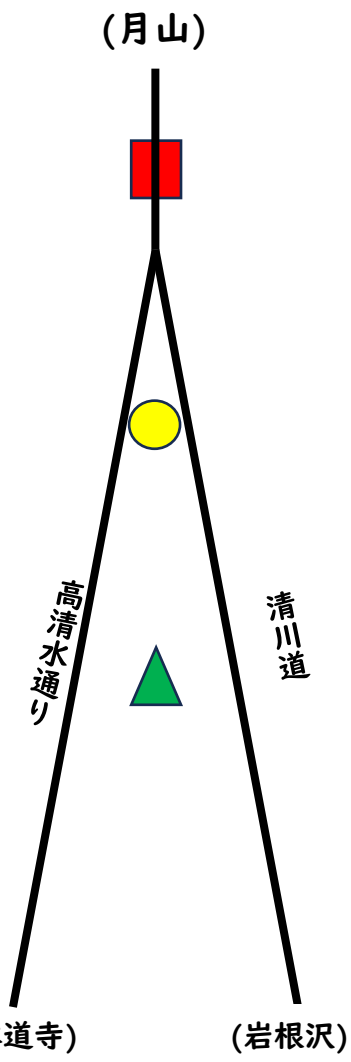
①清川行人小屋周囲のさらなる調査
②烏川行人小屋跡地周辺の新規調査
③秘連古道の全容把握
④烏川不動滝全容調査と不動尊安置場所の探査

烏川不動滝は、「日本の滝 100選」・「日本一の滝王国　山形」には登録されていないので、ランクインを訴求したいものです。

（２）提案

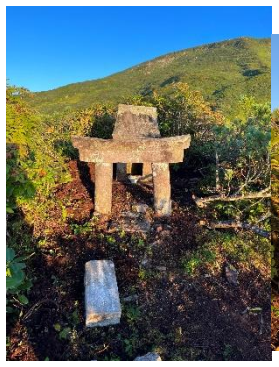
得体のしれない正体不明三つのミステリアス・ポイント出現として、次の個所においてドローン撮影による動画コンテンツの掲示や観光ポスター化を提案するものであります。

人型神足の「頭・へそ・生命起源聖地」　大事な急所３点セット



①□天空石橋

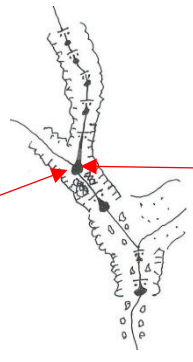
②○清川　御所王子社

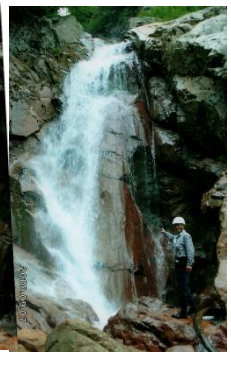


清川古道から見た
清川行人小屋

御所王子社から見た
清川行人小屋

③△烏川不動滝





2008（平成20）年9月7日、撮影者は佐藤辰彦さん、写真人物は布施昭太郎さん

〖 付　録 〗

2024(令和６)年１月28日（日）、西川町交流センター「あいべ」において、「『高・清フレンドリー古道』・神秘と不思議の世界・月山大雪城直下の不思議エリア調査報告会」を開催しましたが、係る新聞報道等の切抜きを記載します。合せてパネル展示も行いました。108人もの多くの方々からお集まり頂きました。ありがとうございました。

2024(R6)/01/27(土)山形新聞新聞

月山参詣の史跡

西川「高清水通り」あす調査報告会

西川町本道寺からの参詣道「高清水通り」の歴史を調査する町内外の有志でつくる団体「高清水通り調査隊」は28日、町交流センターあいべで、月山大雪城直下の史跡などについての調査報告会を開く。

昨年5～11月に高清水通りにある石製の水受けや、石像、ほこらなどを調査し、それぞれに書かれた文字を解読した結果、設置された経緯などが判明した。隊員の大沼香さん（山形市）が報告する。参加無料で、配布資料を用意するため、メールか電話での事前申し込みが好ましい。当日受付も可能。問い合わせは同調査隊の宮林良幸さん090（2790）9222。メールアドレスはmoonhill@j.gmobb.jp

（森谷亮）

300年前の舟形石

西川・月山参詣道調査隊の報告会

出羽三山の参詣道に残る文化遺産を掘り起こし、継承する活動に取り組む有志団体「大黒森プロジェクト・高清水通り調査隊」の調査報告会が28日、西川町交流センターあいべで開かれ、来場者が歴史ロマンに思いをはせた。

同調査隊が昨年5～11月に月山の大雪城直下で発見した旧跡や石碑などについて、隊員の大沼香さん＝山形市＝が解説した。大沼さんが本道寺からの参詣道「高清水通り」にある舟の形をした石製の水受けに刻まれた文字を解読したところ、1716年に同市八日町の丹羽氏が寄進奉納したことが判明。船首が湯殿山、船尾が寄進者の居住地に向くように置かれていることを紹介した。

他に岩根沢からの参詣道「清川道」で、清川行人小屋近くにある鳥居と石祠（せきし）を建立した趣意が刻まれた石碑を見つけたことなども説明した。町内外の108人が聴講した。（渡部真美子）

月山の参詣道で発見した旧跡や石碑について解説した調査報告会

＝西川町交流センターあいべ

2024(R6)/01/30(火)

山形新聞

〖 最　後　に 〗

最後に、本件調査、および、このような集約や報告に対し、陰に陽に係られた大黒森プロジェクト、清川仙人会、関係有志・仲間達、本道寺地区会、西川町役場のみんなに心より多大なる感謝を申し上げます。　大沼は下表内グーグルサイトに簡易ＨＰを開設し、調査報告書を掲載し随時更新しているので、ご覧下さり、知人・友人に拡散賜れば有り難く存じます。このような成果の公表・公開の意図は、ただただ、月山とりわけ東南域（西川口）の新たな魅力に触れて欲しいという切なる願いからであります。口コミやSNSの拡散を通して多くの方々に知って貰い、自ら現地に足を運んで貰い、ご自分の肉眼で直視して貰いたいと希望しています。　みんな、みんなに感謝しています。ありがとうございます。

<table>
<tr><td colspan="4">情報発信（公開・共有化・周知）コンテンツ</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td>高清水通り</td><td>高・清フレンドリー古道
（“清川道”主体）</td></tr>
<tr><td colspan="2">活動者主体</td><td>Ｔ－FMO</td><td>Ｔ・Ｋ－Friends</td></tr>
<tr><td colspan="2">報告会（発表）</td><td>2023(令和5)年3月12日(日)
於西川町交流センター「あいべ」</td><td>2024(令和6)年1月28日(日)
於西川町交流センター「あいべ」</td></tr>
<tr><td colspan="2">調査報告書</td><td>（ダイジェスト版）</td><td>（ダイジェスト版）</td></tr>
<tr><td colspan="2">西川町HPトップ
『西川町デジタルマップ』</td><td>３部構成で掲載
2023(Ｒ5)/9/26(火);初回掲載
2024(Ｒ6)/2/6(火);更新</td><td>2024(Ｒ6)/2/6(火);初回掲載</td></tr>
<tr><td colspan="2">インターネット</td><td>「YBCニュース　石橋」
で検索（放送済）</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">SNSで調査報告書を随時更新（拡散ＯＫ！）</td><td>大沼開設の
ホームページに掲載</td><td>URL；「https://www.dreamyok.com/」
（URL検索窓に dreamyok.com でもok）
QRコード</td><td>カメラを当てると
「 dreamyok.com」
と表示される</td></tr>
<tr><td>大沼開設のFacebookに投稿</td><td>QRコード
検索窓に「@大沼香」</td><td>・Facebookアカウントの設定が必要
・プロフィール写真は
白衣着用姿
 </td></tr>
</table>

（完）

2025（令和7）年１月末日

Ｔ・Ｋ－Friends
（西川町観光開発月山サポーター）

大沼　香；［著述文責］
（ 山形市内在住／TEL 080-3338-3738）

出典根拠（本書）を明記すれば、いかなる部分も使用（コピペ）可
ただし、個人の金儲け（販売書籍等）に資するものはＮＧ

・唐突な言い回しや仮想的な事柄に気付くだろうが、それらの理由・背景については、別の調査報告書（作業中）に記述する。
・図表の一つひとつの細部説明は省略することからは、おかしな処に気付いた場合や、その解釈は、賢明・頭脳明晰なる読み手の想像にお任せする。見解の異なる処は、読み手のご見識を以ってご自身のさらなる向上に当てて欲しい
・本書は専門的学問的研究の書ではなく、あくまでも、現地に幾度となく足を運び、現物と幾度となく対面した上での素人の考察である。